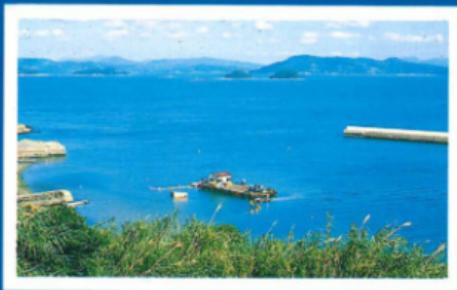


# 鷹島海底遺跡

—長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修  
工事に伴う緊急発掘調査報告書—

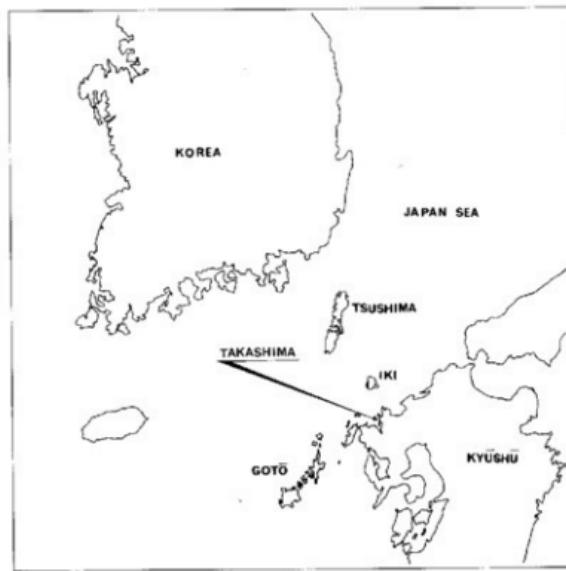


1992

長崎県鷹島町教育委員会

# 鷹島海底遺跡

廣島町位置図



## は じ め に

このたび、当町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書を公刊いたすことになりました。

調査は、昭和58年度にも実施報告されておりますが、本報は平成元年6月8日から10月5日までの間に行なった調査内容を主な内容としたものであります。

わが鷹島は、長崎県の北西部に位置し玄海灘の荒海をさえぎるように伊万里湾口に浮かぶ島で、711年の昔、元寇の役で元軍の殲滅したところとして知られておりましたが、昭和55年～57年度の文部省科学研究費による調査、又58年度の床浪港の海底調査によって重要な史蹟の島であることが再認識されたのであります。

ところが、床浪港改修工事のため遺跡指定区域内に物揚場が建設されることになり、建設工事に先きだち緊急に発掘調査を行うことになりました。調査に当たっては、荒木伸介氏の指導によって行なわれ引き揚げられた元寇関係の遺物は、青磁・白磁・金属製碗・陶磁器片石弾・碇石等285点、その他の遺物で縄文・弥生土器・須恵器・近世陶磁器等291点などあります。

今後も、私達は郷土の歴史をふりかえり、文化、政治、経済、産業の全ての分野にわたる先人の町づくりの実績を、後世の人々に伝えることが私達の責務であると信じ、本町の埋蔵文化財を収集保存し、更に調査研究を積極的にすすめるとともに、地域住民に文化財についての知識と理解を深め、元寇の島、鷹島づくりを能動的に推進してゆく必要があると確信するものであります。

この度の、発掘調査に際し種々ご指導とご助言を賜りました、荒木、石原、林田先生の努力に敬意をはらうとともに、調査と整理、本書の執筆にいたるまでご苦労いただきました。県文化課の田川、高野両先生に心から感謝の意を表しあいさつといたします。

平成4年3月25日

鷹島町長 宮 本 正 則

## 例　　言

一 本書は1988年、1989年に実施した北松浦郡鷹島町床浪港の護岸工事に伴う鷹島海底遺跡緊急発掘調査報告書である。

二 本書は下記により分担執筆した。

I, II, III-1-①, ②, ③, ④	高野　晋司
III-2, 3, 4, 5, V	石原　涉　日本習字
III-1-⑤, ⑥, ⑦, ⑧, 潟州鏡・硯	松下　孝幸　長崎大学医学部助教授
IV-1	山本　愛三　元長崎県立北高等学校
IV-2	木村幾多郎　大分市立歴史資料館館長
IV-3	

三 本書掲載遺物の復元・実測にあたっては下記諸氏の協力を得た。

福岡市埋蔵文化財課	森本　朝子
九州大学文学部考古学研究室	平川　敬治（九州大学研究員）、渋谷　格（大学院修士2年）、高久　健二（大学院修士2年）、李　正端（大学院修士2年）、宮田　剛（学部4年）、川上　洋一（修士1年）、井上　蘭子（修士1年）、尾園　晃（学部4年）

四 本書関係遺物は、現在全て鷹島町立歴史民俗資料館で展示公開している。

五 英文要約は林田憲三氏（西南学院大学）による。

六 本書の編集責任は高野にある。

# 本文目次

第Ⅰ章 調査の経過	
一 調査に至る経過	1
二 遺跡の地理的歴史的環境	8
第Ⅱ章 調査方法とその概要	
一 1988年（昭和63年度）の調査	13
1 調査方法	13
二 1989年（平成元年度）の調査	16
1 地層探査機による調査	16
(1) 調査区設定	17
2 潜水調査	18
(1) 器材	18
(2) 調査方法	20
3 発掘調査日誌	21
第Ⅲ章 出土遺物	
一 遺物出土状況	33
1 土器	33
① 繩文土器	33
② 弥生土器	38
③ 土師器	38
④ その他の土器	43
⑤ 船載陶磁器	44
⑥ 船載陶磁器に関する考察	58
⑦ 国産陶磁器	66
⑧ 国内産の陶磁器類に関する考察	70
2 陶器（磚、甕）	75
3 石製品（石弾、碇石、甕、石臼）	75
4 金属製品・その他の遺物	83
5 木製品	86
第Ⅳ章 出土遺物の自然科学的な検討	
1 長崎県壱島海底遺跡出土の人骨	95
2 長崎県壱島（海底）遺跡の貝殻から見た考察	108
3 長崎県壱島海底遺跡出土動物遺存体	107
第Ⅴ章 まとめ	115

## 挿 図 目 次

Fig. 1	1983年床浪出土陶磁器	2
Fig. 2	調査地点位置図	3
Fig. 3	鷹島南岸遺物出土図（石原氏作成）	5
Fig. 4	工事計画区域と試掘調査位置図	7
Fig. 5	周辺遺跡出土遺物と古墳	8
Fig. 6	町内遺跡図（1/4000）	9
Fig. 7	宝ヶ峰1号墳（上）と2号墳（下）	11
Fig. 8	1989年調査区域図	15
Fig. 9	調査区設定図	18
Fig. 10	台船係留図	18
Fig. 11	筏模式図	18
Fig. 12	隔壁模式図	19
Fig. 13	水中作業模式図	20
Fig. 14	遺物出土状況図	31
Fig. 15	縄文土器①（1/2）	34
Fig. 16	縄文土器②（1/3）	36
Fig. 17	弥生土器・土師器（1/3）	38
Fig. 18	土師器・その他の土器（1/2）	40
Fig. 19	その他の土器（1/3）	42
Fig. 20	船載磁器①（1/2）	44
Fig. 21	船載磁器②（1/2）	45
Fig. 22	船載陶器①（1/2）	46
Fig. 23	船載陶器②（1/2）	47
Fig. 24	船載陶器③（1/2）	48
Fig. 25	船載陶器④（1/2）	50
Fig. 26	船載陶器⑤（1/2）	51
Fig. 27	船載陶器⑥（1/2）	52
Fig. 28	船載陶器⑦（1/2）	53
Fig. 29	船載陶器⑧（1/3）	54
Fig. 30	船載陶器⑨（1/3）	55
Fig. 31	船載陶器⑩（1/4）	56
Fig. 32	船載陶器⑪（1/2）	57

Fig. 33	褐釉系壺類の編年（概念図）	59
Fig. 34	国産陶磁器①（1/2）	67
Fig. 35	国産陶磁器②（1/2）	68
Fig. 36	国産陶磁器③（1/2）	69
Fig. 37	国産陶磁器④（1/2）	70
Fig. 38	碑実測図①（1/3）	76
Fig. 39	碑実測図②（1/3）	77
Fig. 40	各種石製品①（1/3）	78
Fig. 41	各種石製品②（1/4）	79
Fig. 42	各種石製品③（1/4）	80
Fig. 43	各種石製品④（1/6）	81
Fig. 44	鉄製品実測図（1/2）	82
Fig. 45	湖州鏡実測図（1/2）	83
Fig. 46	その他の遺物（1/2）	85
Fig. 47	木製品実測図（1/10）	86
Fig. 48	遺跡の位置	96
Fig. 49	人骨の残存部	97
Fig. 50	長崎県・鷹島位置図	103
Fig. 51	鷹島における調査地位置図	103
Fig. 52	泥質堆積層分布状況図	104
Fig. 53	資料抽出地見取図	106

## 表 目 次

Tab. 1	資料	95
Tab. 2	肺骨計測値	98
Tab. 3	頭蓋計測値	100
Tab. 4	肺骨計測値	100
Tab. 5	長崎県・鷹島海底遺跡貝類組成表	105
Tab. 6	ウマ Eguns 計測表	109

## 図版目次

PL. 1	浚渫状況他	13
PL. 2	ソナー探査状況他	17
PL. 3	グリッド設定状況他	21
PL. 4	調査使用器材他	22
PL. 5	各種器材他	23
PL. 6	海底シルト堆積状況	24
PL. 7	調査用台船	24
PL. 8	水中作業状況	24
PL. 9	木製品収容枠他	25
PL. 10	遺物出土状況	26
PL. 11	遺物出土状況	26
PL. 12	遺物出土状況	26
PL. 13	水中ビデオ撮影状況	27
PL. 14	水中実測状況	27
PL. 15	エアーリフト操作状況	27
PL. 16	水中遺物出土状況	28
PL. 17	水中遺物出土状況	28
PL. 18	水中遺物出土状況	28
PL. 19	台風接近	29
PL. 20	水中遺物出土状況	29
PL. 21	指導委員会	29
PL. 22	調査地遠景	30
PL. 23	縄文土器	35
PL. 24	縄文土器	37
PL. 25	弥生土器・土師器	39
PL. 26	土師器・瓦器	41
PL. 27	捏鉢	42
PL. 28	舶載陶磁器	60
PL. 29	銘入り舶載陶磁器	60
PL. 30	高麗青磁	60
PL. 31	舶載陶磁器	61
PL. 32	舶載陶磁器	62

PL. 33	舶載陶磁器	63
PL. 34	舶載陶磁器	64
PL. 35	舶載陶磁器	65
PL. 36	舶載陶磁器	65
PL. 37	國產陶磁器	70
PL. 38	國產陶磁器	72
PL. 39	國產陶磁器	73
PL. 40	國產陶磁器	74
PL. 41	國產陶磁器	74
PL. 42	國產陶磁器	74
PL. 43	磚	87
PL. 44	各種石製品	88
PL. 45	石臼・カマド	89
PL. 46	鐵製品	90
PL. 47	湖州鏡	91
PL. 48	木製品	91
PL. 49	その他の遺物	92
PL. 50	石彈	93
PL. 51	銅碗	93
PL. 52	鐵製品	93
PL. 53	鷹島海底遺跡出土人骨、女性前頭骨、男性肺骨	101
PL. 54	ウマ肩甲骨、胫骨、大腿骨	110
PL. 55	ウマ寛骨	111
PL. 56	イノシシ、シカ遺存骨	112
PL. 57	各種動物遺存体	113

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 一 調査に至る経過

鷹島海底遺跡は、1981年（昭和56年）7月に遺跡として周知された。その範囲は鷹島南岸全域であり、東側干上鼻より西側雷岬までの延長7.5km、汀線より沖合200mにいたる150万m<sup>2</sup>がこれに相当する（Fig. 2）。

このような膨大な面積を周知の遺跡とする原因となったのは、1980年から1982年にかけて実施された、東海大学茂在寅男氏を中心とする文部省科学研究費「古文化財」の一部である「水中考古学に関する基礎的研究」の実験調査場所に鷹島が選ばれたことに起因する。

鷹島南岸の海底からは、以前から地元漁師によって各種遺物（壺類や碗類、碇石等）がかなり引き揚げられており、加えて当地は蒙古襲来に言う「弘安の役」の際の暴風雨によって大部分の軍船が沈没遭難した場所であるとの通説があった。

実験調査の結果、当該地海底からは数多くの陶器片や碇石、石製砲弾などが引き揚げられた他、以前地元民が海岸から採集していた銅製印船がまさしく元軍の所持品と見て差し支え無いとの判断から、ここに史実の一一致が確認されることになった訳である。（Fig. 3）

一方、遺物が出土する海底の範囲は鷹島南岸全域に及んだため、遺跡の周知化にあたっては冒頭述べたような広大な範囲にならざるを得なかった。汀線から沖合200mというものは工事が及ぶと予想される海岸からの距離であり、水深的には20m～30m程のラインである。

遺跡の周知化によって、当該地域に於ける開発行為は法的に規制されることになったが、県港湾課は鷹島南岸床浪地区に離岸防波堤建設や護岸整備を以前から計画しており、遺跡の保存のための協議が再三にわたって行なわれることとなった。

第1回目の協議は昭和56年から60年度にわたる離岸防波堤建設工事にかかるもので、この時には工事計画自体が遺跡の周知化以前からの継続事業であったことから、工事の中止や設計変更是困難であるとの判断により工事区域内の緊急調査を実施することとなった。

調査は1983年（昭和58年）7月25日から9月23日まで実施された。このときの成果についてはすでに報告しているが、概略のみ記しておく。

調査面積は460m<sup>2</sup>で水深は10m～27mに及んだ。海底の基本的層序は、第1層が貝殻を多量に含む非常にゆるいシルト層でその厚さは約3m。第2層は細粒砂層で厚さは0.7m。第3層は砂礫層で厚さ約3m。そして第4層は基盤の軟砂岩となる。遺物が出土するのは第2層の下部から第3層の上面までの間に限られていた。

この時の調査では出土遺物は元寇関連遺物が主であったが、その数は調査面積に比して僅少であった。しかし、遺物には蠣殻等の付着物も無く、また摩耗も認められなかつたことから、沈没後早い時間内に第2層下底部に埋没したものと推定された。この事実は逆に、まだ未発見

であるが、沈没後厚いシルトの下に早い時間内に埋没すれば船体の一部も残存する可能性を示しているとも言えよう (Fig. 1)。

第2回目の工事計画に伴う協議は1988年（昭和63年）から始められた。今回報告する事業である。離岸防波堤建設に続く一連の工事として、今度は護岸工事に伴う一部海岸埋め立てと浚渫がその計画の概要であった (Fig. 2)。

調査はまず、計画予定地に対する目視による潜水調査が行なわれた。しかし当該地の表面は厚い砂によって被覆されていたため遺物の散布状況は不明であり、改めて試掘調査による土層の堆積状況の確認と遺物の分布状況を知ることが必要であるとの指摘がなされた。

試掘調査は鷹島町教育委員会を事業主体として1988年9月1日から20日間行なわれた。その詳細については後述するが、調査の結果、工事予定区域にはなお相当数の遺物の埋蔵が推定されるに及び、工事に先立ち本調査の必要性が認識されるに至った。

本調査は、やはり鷹島町教育委員会を事業主体として翌1989年（平成元年）6月8日から8月6日まで約2か月間実施され、その結果船体材そのものは含まれなかつたが、元寇遺物はもとより縄文土器から近世遺物まで各種の遺物が多く出土した。

なお、鷹島南岸ではこの床浪地区以外にも船唐津港や殿浦港などで護岸工事の計画があり、その都度潜水調査や工事立ち会いを実施したが、その区域内については全く遺物を発見することは出来なかつた。

註1 鷹島町教育委員会・床浪海底遺跡調査団「床浪海底遺跡」1984

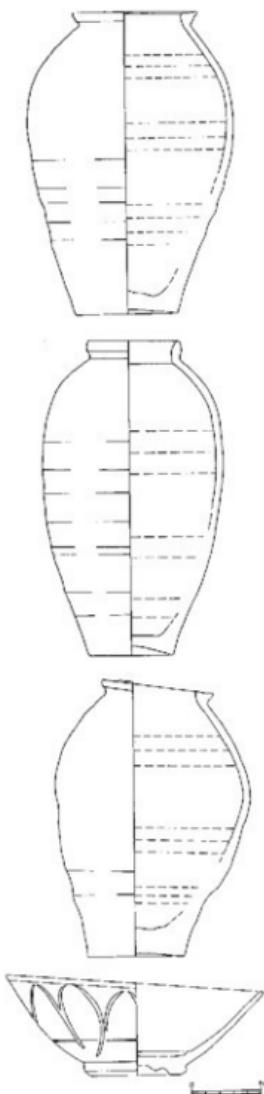


Fig. 1 1983年床浪出土陶磁器

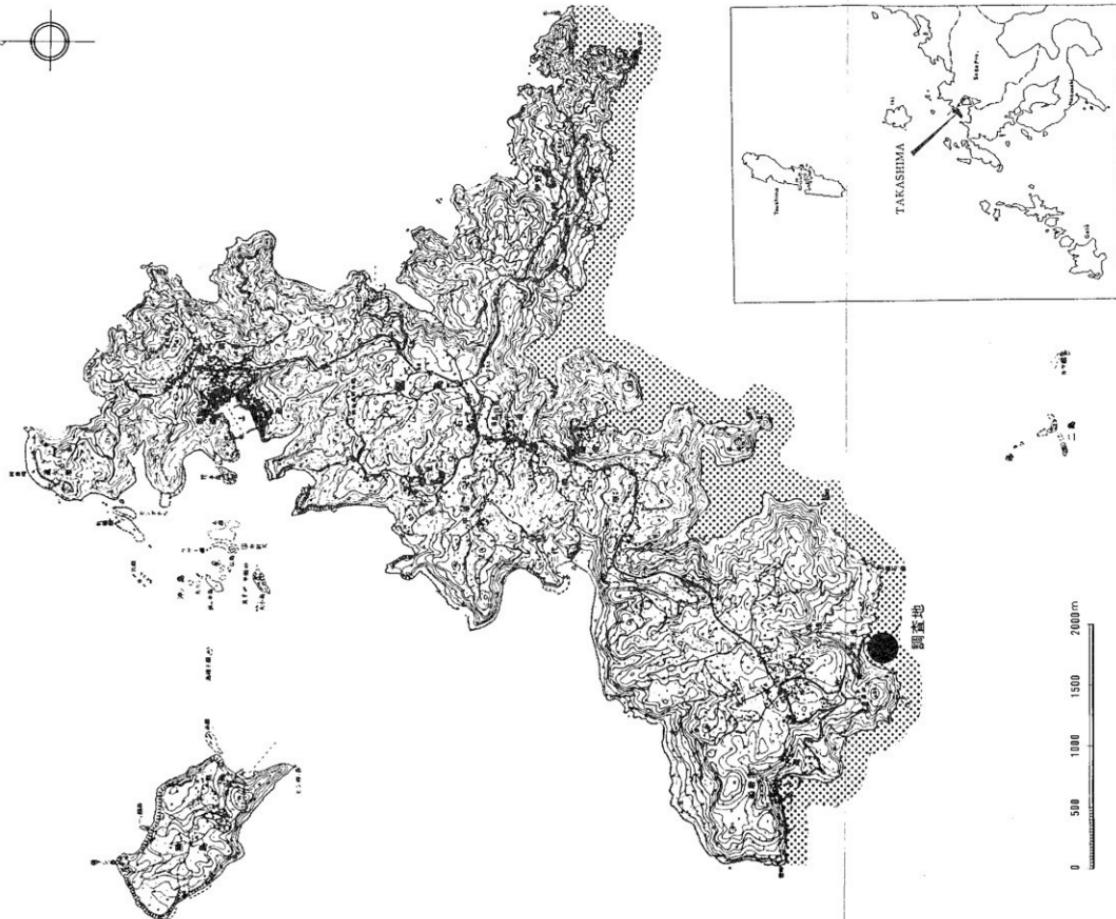
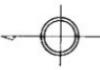


Fig. 2 調査地位置図(アマクリワ島地図上)

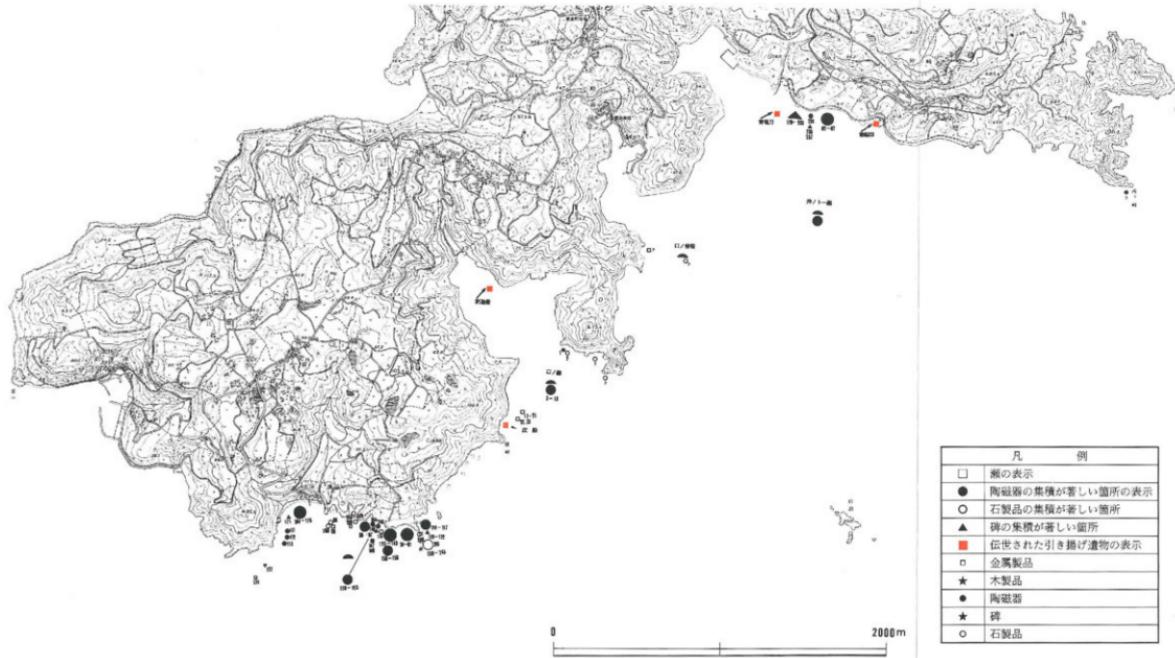
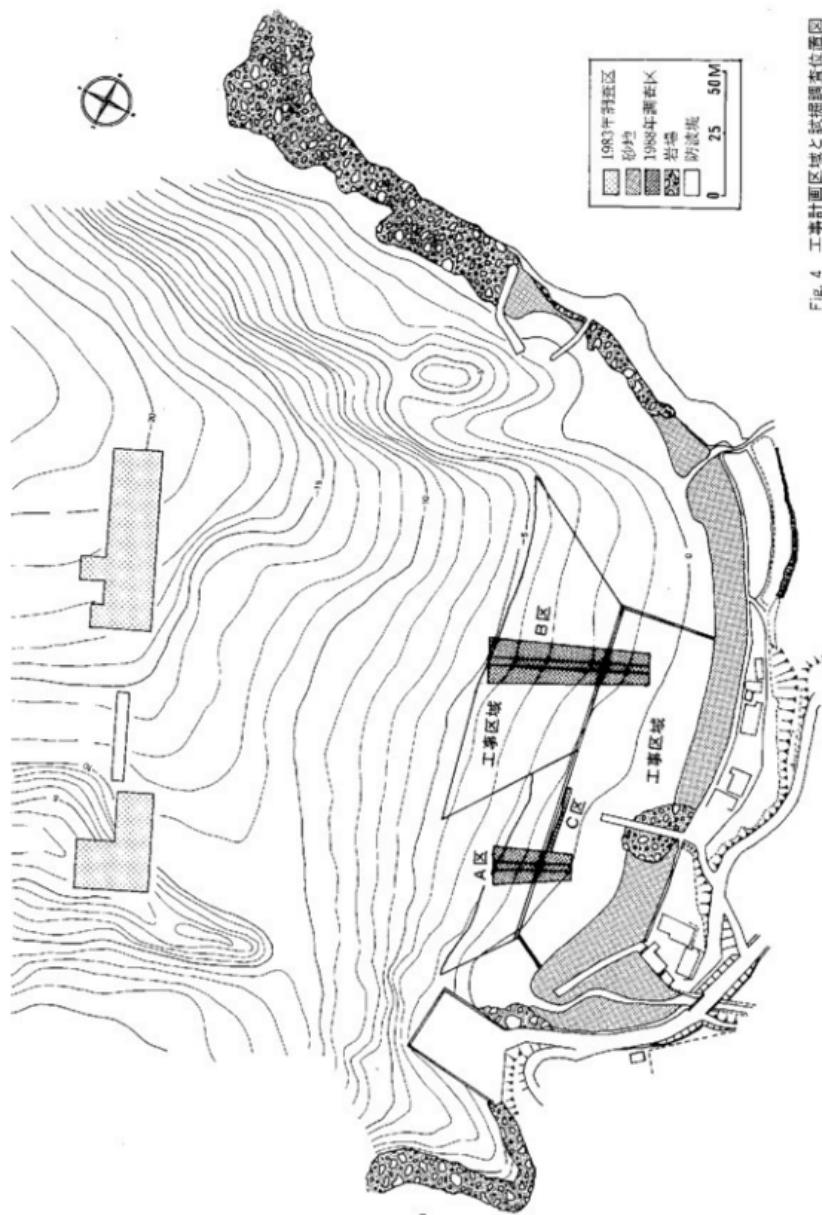


Fig. 3 漢島南岸遺物出土図 (石原氏作成)

Fig. 4 工事計画区域と試掘調査位置図



## 二 遺跡の地理的歴史的環境

鷹島は長崎県北松浦郡に属する。東経129度45分、北緯33度26分で、伊万里湾口に位置する面積17.16km<sup>2</sup>の小さな島である。鷹島への交通は、福岡方面からは糸島、唐津を経て海岸沿いに西側へ向かい、佐賀県尾瀬港から10分程フェリーに乗る。長崎方面からは、松浦市今宿まで行き、そこからやはりフェリーを利用すれば45分程度で着く。

島の人口は1991年現在3,382人で他の離島同様まだ減少傾向にある。島は農家数が322軒、漁業經營体数が172軒であるが養殖を中心とした海面漁業漁獲量は比較的多く、生業としては漁業が占める割合が農業に比して高い。島は、玄武岩を基盤とする比較的低平な台形状の熔岩台地であり、最高所は西側に位置する牧ノ岳で標高117mを測るにすぎない。また島の西側にある三里地区を除いて平坦地に乏しく、水系も小河川が散在するにすぎないため、耕地利用状況も水田より畠作の方が多い。

上述、島の基盤である玄武岩は阿翁石と呼ばれ、石塔に適した材として有名である。永禄年間以降鷹島における石工業の発展の基になった石で、慶長14年（1609）に建立された福岡古宮<sup>註1</sup>跡八幡宮の大鳥居も鷹島産の阿翁石であるという。

鷹島の地形については、文化十年（1813）、第34代平戸藩主である松浦静山公の積極的な応援によって、伊能忠敬による測量が3日間にわたって行なわれた記録がある。鷹島は「元寇遺跡」として有名であるが、島の歴史は古くその始原は旧石器時代まで遡る。島内には現在37の遺跡が周知されている。（Fig. 6）主な遺跡を時代順に概観すると、まず13長畑遺跡と32開田遺跡が知られる。開田遺跡は島の西側台地上に所在し、佐賀県腰岳産黒曜石製のナイフ形石器や台形石器が採集されている。この他に石鏃も採集されているが、土器片は発見されていない。長畑遺跡は島の中央部の台地上に位置し、やはり表面採集ながら腰岳産黒曜石製の小型のナイフ形石器、細石核、細石刃、石鏃、縦長剣片やサヌカイト製のスクレイパー、あるいは玄武岩製の磨製石斧等も採集されている。（Fig. 5）これらの遺跡の他にもナイフ形石器は1, 2, 3, 12, 14, 35の諸遺跡でも散見されるなど、その分布はほぼ島全体に及んでいる。繩文時代の遺



Fig. 5 周辺遺跡出土遺物と古墳

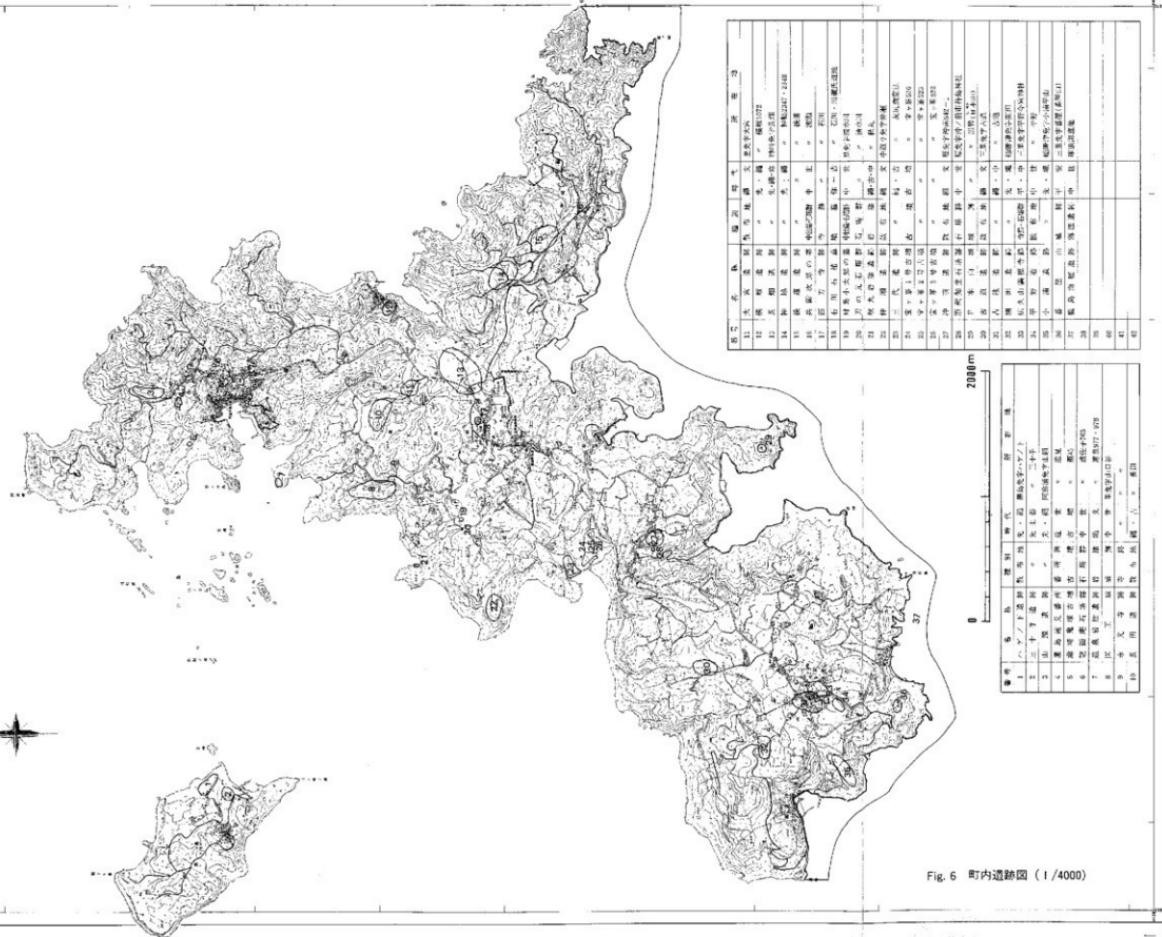


Fig. 6 町内道路図 (1/4000)

跡としては23<sup>4</sup>三代遺跡が良く知られて  
いる。水路災害復旧工事に先立って実  
施された緊急調査で、中期から晩期に  
かけての土器や石器が多数出土した。  
この遺跡は、島内では後背地と水利に  
最も恵まれた地域に位置している。<sup>21</sup>  
秋丸<sup>22</sup>遺跡からも後期の資料が出土  
しているが、遺跡自体は規模が小さい。

島内からは4基の古墳が発見されて  
いる。<sup>5</sup> 薦崎鬼塚古墳は島北部の台地  
上に築かれた横穴式石室を持つ小さな  
<sup>23</sup>円墳であったと想定されている。畠地  
の開墾によって封土を含め大部分が消  
滅しているが、かつてこの古墳から出  
土したという須恵器の特長から7世紀  
前半に比定されている。<sup>24</sup>, <sup>25</sup>, <sup>26</sup>の  
3基の古墳は23<sup>4</sup>三代遺跡見下ろす丘陵

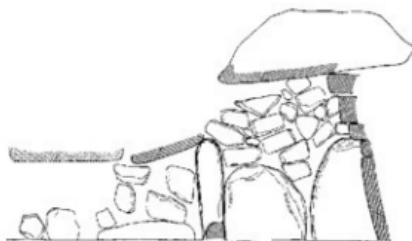


Fig. 7 宝ヶ峯1号墳(上)と2号墳(下)

中腹に位置している。古墳群は3基からなり、それぞれ宝ヶ峯1号墳～3号墳と呼称されてい  
る。いずれの古墳もすでに盗掘によって封土も失われるなど旧状を留めていないが、共通する  
特長は何れも横穴式石室を持つことである。宝ヶ峯1・2号墳の石室内から出土した遺物は6  
世紀後半の特長を示し、宝ヶ峯3号墳は石室の特長から7世紀と推定されている。これらの資  
料から鷹島では6世紀後半から7世紀にかけて高塚古墳が築造されたことになろう。奈良時代  
や平安時代に属する遺跡は知られていない。以上古墳時代までを概観すると、後期旧石器時代、  
縄文中期・後期・晩期、弥生中期、そして古墳時代へと続くが、これまでの資料で見る限り時  
間にやや断絶が見られる。1988年と1989年の床浪地区的海底調査は、これまで欠如していた  
時期の資料を提供することになったが、その分については後述する。中世及びその後の遺跡は、  
墓地を形成した島内に散在する中世の石塔によってその存在が周知されてきたが、生活関連遺  
跡は知られていない。元寇の脅威が一時的にせよ生活の場を放棄させたのではないかとの説も  
ある。

鷹島の地名が何時頃から知られるようになったかは定かではないが、元寇について記した『八  
幡愚童記』に「…鷹島にうち上げられたる数千人…」との記載があるほか、やはり元寇に関する  
記録の中によく登場するようである。<sup>27</sup>

平安時代末の鷹島を含む松浦地方は所謂「松浦党」の本拠地として知られているが、その起  
源は源久という人物に始まると言う。江戸時代平戸松浦氏によって編纂された『松浦家世伝』

によれば、松浦党の祖先である源久は延久（1069）攝津国より下松浦今福に下向し土着した。その後当地に梶谷城を築いて根拠地とし、その所領は肥前国上下松浦（佐賀県東・西松浦郡、長崎県北松浦郡を含む）に及んだとされる。更に、明治時代に編纂された『西松浦郡誌』によると「源久は晩年は鷹島郡里村に別邸を設けて移り住んだ」とある。<sup>33</sup>の広久山満福寺跡遺跡が源久を祀った場所と言われ、「満福寺殿當山開基廣久禪○門○。久寿二（1156）亥九月十五日、松浦家先祖」の碑が残っている。しかし、源久という人物が松浦家の始祖であることは否定できなくとも、攝津国から下向した後、一代で広範な領域を支配するにいたった過程の不自然さが指摘されている。<sup>34</sup>ただ、平安末期には小値賀、平戸、大島など周辺にはすでに開発領主が割拠しており、鷹島もこの頃には松浦家の領地であったことが考えられる。その名が歴史に登場してきたのもこの頃以降かと思われる。

註1 長崎県民手帳資料編 1988による

註2 鷹島町「鷹島町郷土誌」1975

長崎県教育委員会「長崎県遺跡遺跡地図」長崎県文化財調査報告書 第87集 1987

註3 松浦静山「甲子夜話」

註4 長崎県教育委員会「三代遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報 XIII 所収 長崎県文化財調査報告書 第94集 1989

註5 坂田邦洋 他「鷹島埋蔵文化財調査報告」「鷹島町郷土誌」所収 1975

註6 肥前舊事卷之六 後字多院天皇の条に『北条九代記』曰、弘安四年、七月、大元賊徒自宋朝、高麗數艘船寄來、數日、漂對島、海上、而群集、肥前、鷹島之處、同 日夜間七月一日、大風賊船悉漂倒死者、不知幾千万、但將軍范文虎誦國云々、…』との記載がある。肥前史談会編「肥前舊事 第一輯」所収 青潮社 1973

註7 濑野精一郎「中世編一」長崎県史古代・中世編 1980

## 第II章 調査方法とその概要

### —1988年（昭和63年度）の調査

前項で記した如く、調査は試掘調査  
とその結果に基づく本調査に分かれる。

PL. I

1988年は試掘調査を実施した。その  
結果について改めて述べておきたい。

試掘調査は1988年（昭和63年）7月25  
日から9月23日まで実施したが、調査  
組織は以下のとおりである。

事業主体 鷹島町教育委員会

調査主体 長崎県文化課

調査指導 荒木伸介 平泉郷土館長

石原 涉 日本書字

調査員 高野晋司 長崎県文化課

主任文化財保護主事

町田利幸 文化財保護主事

村川逸朗 同

調査協力 林田憲三 中村学園短期大  
学（現西南大学）

久保寿一郎 九州大学大学  
院（現福岡県立大牟田南高  
等学校）

県港湾課

県北振興局田平上木事務所  
鷹島町建設課



浚渫風景



浚渫した土砂を土運船の上に落とす



土砂を海水によって洗別

#### 1 調査方法

当該地内における県港湾課による事  
前のボーリングの結果によると、水深  
は1～4mであるが、海底下には更に  
2～4m程のシフトが堆積しているこ  
とがわかった。その堆積状況は

1層：黄灰色粒砂層（1m）、2層：灰黒色混貝砂層（1～2m）、3層：砂岩（基盤）である。一方これまでの調査結果からすると、各種遺物は2層中に多く含まれており、そこで調査方法としては、まず1層をパケットにより浚渫したのち包含層をエアーリフトによって精査することとした。なお、浚渫したシルトは土運船の上に架設した10m平方の鉄筋枠（10cm方眼に組んだ編状の枠）の上に集積し、放水洗浄して遺物の有無を監視することとした。また、エアーリフトによって吸い上げた2層中のシルトは、海上に浮かべた後の網に一旦沈し、あやまって吸い込んだ遺物が散逸するのを防ぐ方策をとった。

浚渫には1.2m<sup>2</sup>用のパケットを使用したが、海底下に堆積したゆるいシルトは浚渫後のトレーニチ内に鐵地獄のように流れ込むため、底面を3mの幅で確保するためには上面は最低その3倍の9m程が必要となる。つまり同じ区域を何度も繰り返して浚渫する必要があり、またその量は予想以上であった。これによって予定した調査面積を逆に十分確保出来なくなるという事態が生じた。

波深にあたっては、工事予定地内に南北方向に2本のトレーニチを設定し、遺物の出土状況を勘案した後、護岸工事ラインに沿って東西にトレーニチを1本を追加認定した。東側トレーニチをA区、西側をB区、そして東西方向のトレーニチをC区と呼称した（Fig. 4）。

## 2 調査結果

A区……南北方向に、長さ30m、幅3mの規模で設定したトレーニチである。この幅3mというのはトレーニチ底面の幅であって、シルトの流れ込みを考慮した海底上面の幅は12m程になる。シルトの厚さは平均して3m程であるから、従って堆土の量は約700m<sup>3</sup>程になる。このトレーニチの浚渫に4日かかった。浚渫が終ると同時にエアーリフトによる精査に入り、浚渫用台船はB地区に移動する。A地区からの出土遺物は、僅少であった。

B区……南北方向に長さ65m、幅3mの規模で設定したトレーニチである。やはり海底上面の幅は12m程になるから平均したシルトの厚さ3mを勘案する堆土の量は約1450m<sup>3</sup>程になる。このトレーニチの浚渫には7日かかっている。遺物は水深が2m程の浅いところ（浚渫後は5m）と逆に5m（浚渫後は10m）程の深さの地点からはあまり出土せず、その中間の地点に集中していた。遺物の内容については遺物の項で触れる。

C区……A区とB区の間に設定した長さ100mのトレーニチであるが、遺物の出土状態から実際には30m程を精査した。この区域は全てエアーリフトによる調査である。遺物は地点に密度の差はあったが全区域から出土している。

以上の調査によって、工事予定区域の内A区とB区にはさまれたC区を含む1,400m<sup>3</sup>程が遺物を含む範囲であると推定され、改めて調査の必要が生じた。調査区の水深は現況で2～3mであったが、エアーリフトによって掘り進めば6～9mになるものと思われた（Fig. 8）。



Fig. 8 1989年调查区地图



## 二 1989年の調査

前年度の試掘調査によって、あらためて本調査の必要が生じてきた訳である。調査対象面積は1,400m<sup>2</sup>で、1989年6月8日から8月6日まで60日間実施した。

調査組織は以下のとおりである。

事業主体 鷹島町教育委員会

近藤 文衛 壱島町教育委員会教育長

金内 武久 同事務局長

調査指導 松村 恵司 文化庁

荒木 伸介 平泉郷土館長

水中考古学

西谷 正 九州大学

考古学

田辺 昭三 日本水中考古学研究所長・京都造形芸術大学

水中考古学

江本 義理 昭和女子大・京都造形芸術大学

保存科学

山形 欣哉 日本海事史学会理事

船体工学

大橋 康二 佐賀県立九州文化陶磁館

陶磁器

石原 渉 日本習字学芸員

水中考古学

林田 憲三 西南学院大学

水中考古学

調査主体 長崎県教育庁文化課

調査員 田川 肇 長崎県文化課調査係長

高野 晋司 同主任文化財保護主事

調査協力 松下 孝幸 長崎大学医学部解剖学第二教室

斎藤 匠司 長崎大学医学部付属病院放射線部

常松 幹夫 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

久保寿一郎 九州大学（現福岡県立大牟田南高等学校）

池 賢柄 韓国江陵大学博物館

県北振興局田平土木事務所

鷹島町水産商工課

九州・沖縄水中考古学協会

長崎記念病院

### 1. 地層探査機による調査

地層探査機による調査によって、遺物を包含する地区の水深は比較的浅いことが判ったため、調査区を矢板で囲んで一旦ドライな状態にし、流れ込む海水を常時排水しながら調査をする方法も考えられたが、浅い場所は海底下5m程度岩盤に当たることと、経費的に相当な出費がかさむことが分かったため、従来どおり潜水調査で対応することとした。

なお、調査に先立ち、調査対象地の中をあらかじめ地層探査機によって探査し、何らかの反

応があった場合はその地点を実際の潜水調査で確認するという方法を合わせて取ることとした。機器は海上電気製SP2型という地層探知機を使用することとした。

#### (1) 調査区設定

調査区設定にあたっては、まず陸上の基点からトランシットによって角度を決め、メジャーを持ったダイバーが海上定点近くまで移動し、点が定まった場所にブイを投入する。これを数回繰り返して、最終的には海底の調査区域の各コーナーに銅管を打ち込んで、南北20m×東西70mの大グリッドを作り、その中を5mの方眼で区切ることとした。この時、海底に付設するロープは東西方向を緑色、南北方向を白色とし、方眼の交点には東端からの距離を示した数字を貼付した。水中で作業を始めると透明度が極端に落ちるため調査員が方向感覚を失わないための処置である。

地層探査船は東西方向に張ったロープの上を2.5mピッチで合計8回探査した。

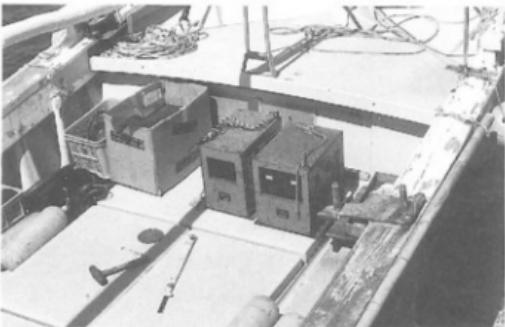
その結果、30か所において何らかの異物に対する反応があり、その地点にはブイを投入して本格的な潜水調査に備えることとした(Fig. 9)。



地層探査機設置状況



ソナー感知器



同上

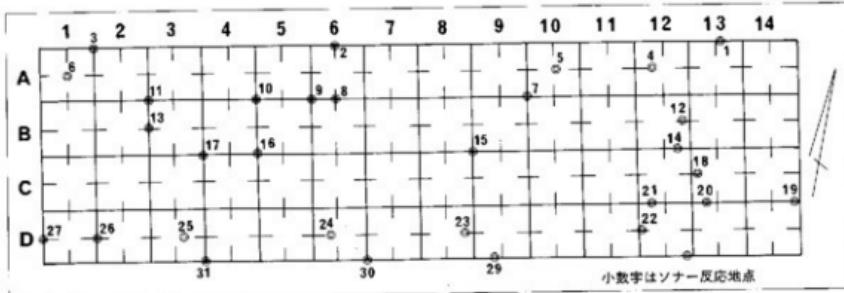


Fig. 9 調査区設定図

## 2 潜水調査

### (1) 器材

台船……調査にあたってはその期間が2か月の長期に及ぶことと、炎天下のもとでの作業になることを考慮して、調査のベースとなる場所を必要とした。ベースとなる台船は筏に接して海上に固定し、休憩室とトイレを付設した (Fig. 10)。

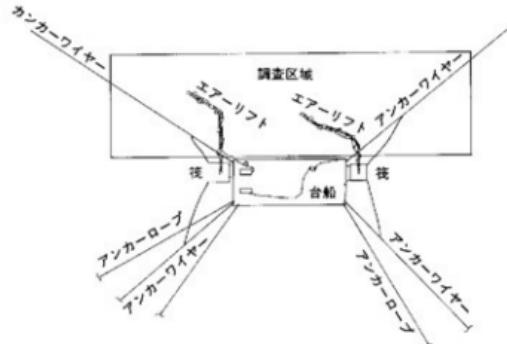


Fig. 10 台船係留図

筏……水中での発掘は、陸上でスコップの役目をするエアーリフトによって余分なシルトを除去し、遺物が見付かった場合は位置の記録と写真撮影を行なうのであるが、エアーリフトの直径は200mmであるため、あやまって遺物を吸い上げる可能性がある。このため、吸い上げたシルトは一旦海上で選別する必要がありそのため海上に浮かぶ筏を作成した (Fig. 11)。

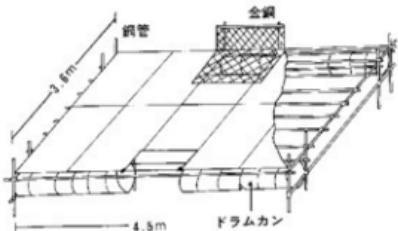


Fig. 11 筏模式図

隔壁……鳶島の水中の発掘で、最も厄介な

問題はシルトの戻りである。試掘調査の項でも述べた如く、海底に堆積したシルトはゆるく、一旦吸い上げた調査区にまた周囲のシルトが蟻地獄のように落ちてくるこれを防ぐ方法として作成したのが隔壁である。

上下が空いた箱形で、調査区に設置し中のシルトを吸い上げながら調査を進めることにより筏自体は自重で沈み、同時に周囲からのシルトの流れ込みも防ぐ目的であった。使用の結果は、2層の貝殻を含むやや深い

層からには思うように沈まなかった。改良の余地がある (Fig. 12)。

なお、今回の潜水調査は水深が10m以下で潜水病の危険が無かったため、緊急用の再圧タンクは用意しなかった。この他、潜水調査で使用した主な器材の一覧を掲載しておく。

フーカーハーネスセット…潜水土用呼吸用具（船上から直接空気を送付）

エアーポンベ……………潜水土用呼吸用具（圧縮空気充填）スキュー・バ用

高圧コンプレッサー……………エアーポンベ充填用

低圧コンプレッサー……………潜水土用呼吸用（フーカー用）

エアーマン……………エアーリフト用空気送付機

高圧ポンプ……………ジェットーポンプ用空気送付機（水深が浅い場合に使用）

水中電話……………陸上と水中の交信用電話

作業船……………船外機付F R P船

エアーリフト……………水中作業用器材

通常ビデオカメラ……………水中調査記録用ビデオ（水中用のハウジングに入れて使用）

ニコノスV15……………水中調査記録用カメラ

スキュー・バ式潜水器具……………ウェットスーツなど

作業に伴う消耗品は省略

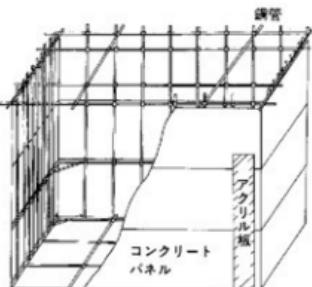


Fig. 12 隔壁模式図

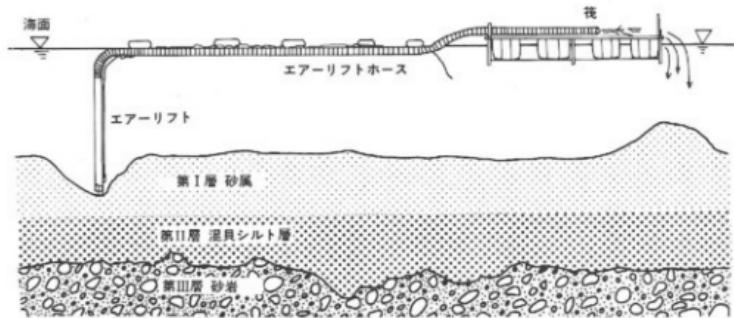


Fig. 13 水中作業模式図

## (2) 調査方法

基本的にエアーリフト操作等の潜水作業は主にプロのダイバーが行ない、調査の進行は台船上の調査員の指示によって行なった。調査は、時間を節約するため一度に2グリッドを併行しながら発掘することにした。1グリッドにつき1名が潜水してエアーリフトを操作し、遺物が発見された場合は直ちに位置の測定に入る。出土位置は、同じ潜水士が海底に設置したグリッドを区画した目盛り使のロープから測定し、水中有線電話で台船上で待機している調査員に報告することにした。水深は潮の干満によって絶えず変化するため、あらかじめ陸上の定点に設定しておいた絶対標高からの深さを使用した。なお、遺物の写真撮影やビデオによる撮影は台船上に待機している別の調査員が行なった。水中の作業は健康管理が最も重要な案件であるが、今回は一人の1回の潜水時間は1時間とし、1日3回の潜水作業をノルマとした。この作業を7名のプロダイバーが交代で行なった訳であるが、1日3回の潜水作業が可能であったのは水深が10m以下で、潜水病にかかる危険が少なかったためである。

## 3 発掘調査日誌

1989年6月8日本 曇

関係者鷹島集合・関係各機関  
挨拶・調査打ち合わせ

6月9日金 晴

長崎より調査用台船到着

長崎より隔壁・筏到着

グリッド設定作業

各器材点検

6月10日土 曇

本日より潜水調査

ソナー反応地点の内、D一

3区・C-13区付近から開始

D-3区…死貝が多い。

6月11日日 晴

C-13区は砂層が厚い。

6月13日火 雨・曇

C-13区…2層精査、磚出

土

D-3区…2層精査、終了

D-4区…1層が浅く、す

ぐ岩盤にいたる。

C-4区…2層より縄文土

器出土

6月14日水 雨

強い風雨

C-13区…かなり2層が厚

い陶片出土

C-4区…2層より縄文土

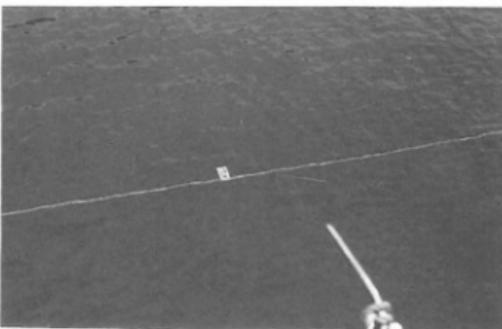
器陶片出土

夕方、台船と筏移動

KT N取材



トランシットによる海底調査区附設状況



調査区附設状況



同上

1989年6月15日(木) 曇

嵐が止む。一転して好天気。

C-4区…壁が崩壊してグリッドのロープが埋没する。陶片出土。

C-13区…壁面を写真撮影  
陶片出土。

6月16日(金) 雨

D-2区へ移動…1, 2層  
精査。陶片出土。

D-12区へ移動…1層

D-3区…2層から青磁小皿出土。

6月17日(土) 晴

D-12区…2層から金属製  
椀出土。

6月18日(日) 晴

D-12区…2層出土の鉄製品の実測、陶片  
出土木製品出土。

C-3区…2層より土師器・  
木製品・繩文土器出土。

C-4区…黒褐釉壺出土。

6月19日(月) 晴

県庁にて、これまでの出土  
遺物について記者発表  
調査は休み

6月20日(火) 晴

C-3区 2層…釘痕のある  
木片・近世陶磁器・須恵器・褐  
釉壺片出土。

D-12区 2層…石製品・擂  
鉢陶片出土。



台船（前立）と作業船（手前）



隔壁



調査の進行具合は調査区内、東側区域は4~5日、西側は2~3日で1グリッドが仕上がる計算。

6月21日(水) 晴

C-3区 2層…近世陶磁器・黒褐釉壺・他

D-12区 2層…陶器片・鯨骨

D-11区…1層

6月22日(木) 晴

C-3区 2層…木片・陶器片 調査終了

D-11区…2層

B-3区…1, 2層 陶磁器片

6月23日(金) 晴

B-3区 2層…木片・陶磁器

D-11区 2層…黒褐釉壺・土師器・人骨・鉄製品

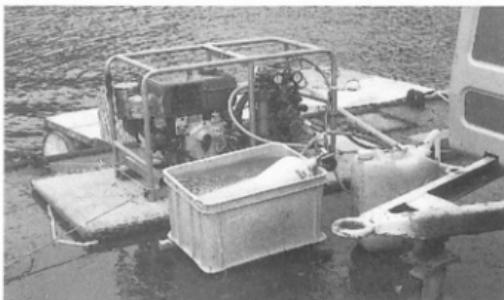
6月24日(土) 雨

台風6号が鹿児島に上陸した影響でその余波を受け朝から暴風雨。しかし、床浪港内は影響が少なく作業は可能。

B-3区 2層…大型木片・陶器片・碇石・石臼

D-11区…2層、鯨骨

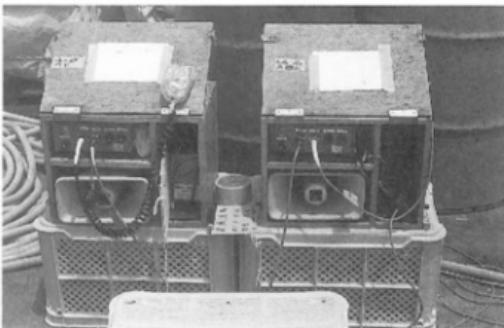
C-10区…1層 隔壁使用



高压コンプレッサー



低压コンプレッサー



水中通信装置

PL. 6 海底シルト堆積状況

1989年6月25日(日) 晴

南西の風が強く、海上はかなりうねり。

A—3区…1、2層

B—3区2層…陶器片

C—10区…隔壁内、大型木  
片(船材)陶器片

B—4区…1層取り除き作  
業

6月26日(月) 晴

作業休み

6月27日(火) 曇・雨

天気下り気味。午後強風。  
台船固定作業。

A—3区…1層

A—4区…1層

C—10区2層…土層写真撮  
影

木片・陶器片

A—3区、A—4区の水深  
が浅いため、エアーリフトを  
ジェットピースに切り替える。

6月28日(水) 曇

A—4区…1層

B—4区…1層、擂鉢

D—11区2層…磚、調査終  
了

6月29日本 晴

マスコミ報道があり、見学  
者多し。

B—4区…1、2層

青磁碗

A—3区…青磁片

C—11区…1、2層

陶器。木器



PL. 7 調査用台船



PL. 8 水中作業状況



1989年6月30日(金) 晴

木器保存用の水槽作り

A-3区…陶器片・布日瓦

A-4区…陶器片・縄文土

器

C-11区…木片多し

やはり2層上面あたりが遺物が最も多い。

7月1日(土) 晴

遺物実測用の鉄製枠作り

2m×2m (10cm方眼) 2個

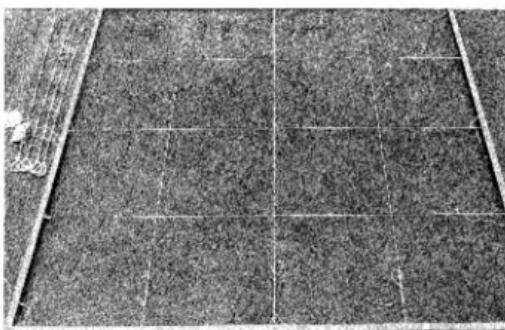
A-4区…2層上面

C-5, 6区…1層

C-11区…2層



木製品収容枠作成



実測用枠

7月4日(火) 晴

遺物実測用の鉄製枠完成

D-5, 6区…1層, 陶器

片

C-12区…1, 2層, 陶器

片

7月5日(水) 晴

B-3区…2層上面実測

溝底がフラットでないため  
枠設置に時間がかかる。

C-5, 6区…1, 2層

D-5, 6区…1, 2層,

硯(寛永八年五

月吉日の銘)

C-12区…2層

D-10区…1層

7月6日(木) 晴

D-10区…1層

C-5, 6区…1, 2層

鉄製品・陶器片



水中通話

PL. 10 遺物出土状況

1989年7月7日(金) 晴

C-7区…1層・陶器片

C-5, 6区…1, 2層

土師器

C-12区…木製品

D-10区…1, 2層

7月8日(土) 雨

C-5, 6区…2層上面実

測

D-5, 6区… //

C-7区…1層, 陶器片

C-12区…2層, 鉄製武器

7月9日(日) 雨

朝から暴風雨。波のうねり  
高し午後に至り風もおさまる。

D-5区…2層

D-10区…2層

マスコミの取材あいつぐ。

7月11日(火) 曇

午後うねりが高くなる。

D-10区…2層, 終了

D-5区…2層, 終了

D-13区へ移動

D-6区…2層

7月12日(水) 曇

エアーリフトの空気調節ノ  
ブが毀損。鳩島町水道課から  
代用品調達。

D-6区…2層

D-13区…1層

C-5区…2層

7月13日(木) 雨

C-5区…2層, 終了

D-13区…1層

水中調査風景写真撮影



PL. 11 遺物出土状況



PL. 12 遺物出土状況



PL. 13 水中ビデオ撮影状況

1989年7月14日(金) 晴

猛暑。梅雨明けを思わせる。

エアーマン1基午前中不調。

C-6区…2層、終了

陶器片(写真)

D-13区…2層、陶器片

各調査区の水深(絶対標高)

調べ

7月15日(土) 晴

C-6区…2層

D-13区…2層、土師器出土

7月16日(日) 晴

作業班移動。

D-7区…2層

D-13区…2層、陶器片

7月18日(火) 晴

猛暑が続く。台船上にテントを張る。

C-6区、D-7区終了

B-3区終了

D-13区終了

D-8区…1層

7月19日(水) 晴

梅雨明け宣言が出る。町教育委員会にて指導員会議打ち合わせ。引き続き資料作り。

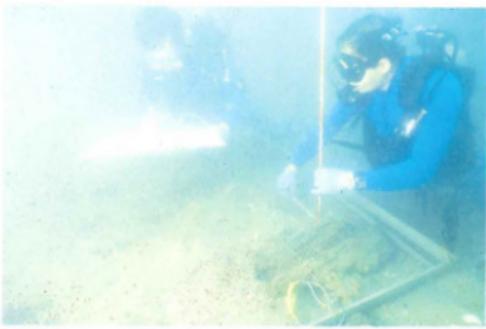
C-8区…2層

B-4区…2層

C-8区、D-8区 2層  
上面付近に遺物が集中している模様



PL. 14 水中実測状況



PL. 15 エアーリフト操作状況



PL. 16 水中遺物出土状況

1989年7月20日(木) 晴

台船を西側へ5m移動。

B-4区…2層終了

A-3区…2層終了

C-8区…1層

C-9区…1層

調査区の水中ビデオ撮影。

調査区の水深が浅くなるとエアーリフトの効率が悪くなるため、ジェットポンプに切り替える。

7月21日(金) 曇

A-4区…2層

C-9区…1層

これまでの出土遺物は総数449点。

7月22日(土) 晴

A-4区…1層終了

B-5区…2層、礫石出土

D-8, 9区…1層

7月24日(月) 晴

B-5区…2層

C-9区…1層

7月25日(火) 曇

強風。

A-5区…1, 2層

B-6区…1層

C-9区…2層

D-9区…2層、壁面写真

撮影

県港湾課・田平土木事務所  
来訪、NHK取材



PL. 17 水中遺物出土状況



PL. 18 水中遺物出土状況



PL. 19 台風接近

1989年7月26日(水) 晴

C-8区…2層

A-5区…1層

指導委員会開催。

各指導委員に対し、出土遺物の説明。

午後鷹島町民に調査報告会を開催する。

7月27日(木) 晴

台風11号接近中。

A-5区…2層

A-6区…1層

B-8区…1層

午後に至り、台風接近を決定的なものと判断して作業は午前中で打ち切り、避難のための準備を行なう。

夕刻船唐津港へ避難。各機材の固縛を終了。

7月28日(金) 暴風雨

台風11号のため作業中止。  
風は車から南東へ変わり、風速25mの暴風雨となる。

床浪港はその間に巻き込まれるも、避難先の船唐津港は平穏無事。

7月29日(土) 晴

現場は嘘のような静けさ。

台船移動。各器材点検。

午後から作業開始。

A-6区…1層

B-8区…1層、包含層無  
く終了



PL. 20 水中遺物出土状況



PL. 21 指導委員会



1989年7月30日(日) 晴

A—6区…1層

B—7区…1層

7月31日(月) 晴

A—6区…1, 2層

B—7区…1層

A—8区…1層

8月1日(火) 曇

A—6区…2層

A—7区…1層

A—8区…1層

ソナー反応地点の遺物の有無と水深を特に注意。

8月2日(水) 雨

台風12号の影響か、南東の風強くうねりが強い。

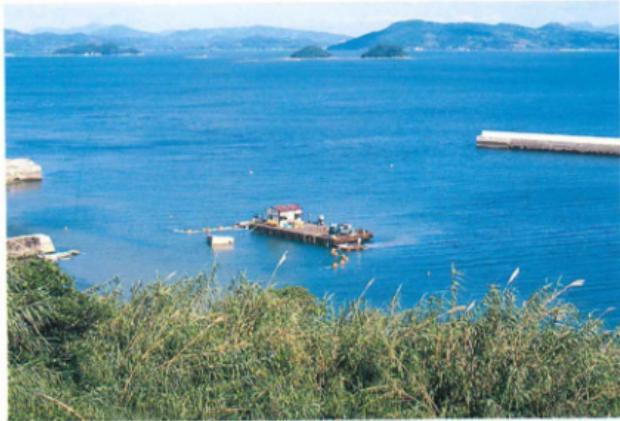
A—6区…2層

A—7区…1層

B—5区…2層、縄文土器

B—6区…2層

PL. 22 調査地遠景



木片には釘跡が明瞭であるが、鉄製品は錆びのため殆ど不明瞭。

8月3日(木) 晴

九州全域に高潮現象。

A—5区…2層

A—5区…2層

B—6区…2層、終了

8月4日(金) 晴

A—6区…2層終了

B—5区…2層終了

B—6区…2層終了

A—8区…2層、終了

B—8区…2層終了

8月5日(土) 曇

午前中ののみの作業で全調査終了。

A—7区、B—7区の残り部分を調査。

8月6日(日) 晴

各器材撤収。

エアーホース→町歴史民俗資料館へ移動

筏→解体 午後解散。

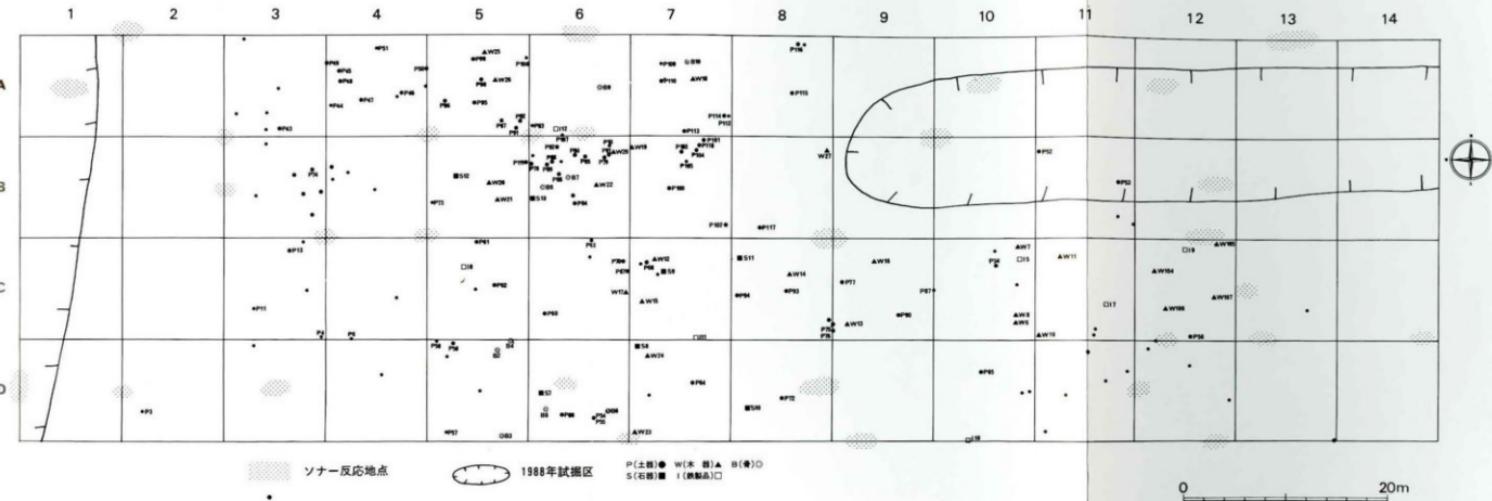


Fig. 14 遺物出土状況図

## 第三章 出土遺物

### 一 遺物出土状況 (Fig. 14)

1988年と1989年の調査によって様々な遺物が出土したが、出土位置に大きな差は無いものと思われることから、ここでは一緒に報告しておきたい。

Fig. 14は1989年調査時の遺物出土状況である。今回の調査では、沈没船等何らかの遺構が出土した場合は当然実測が必要であるが、その他、あらかじめ実施した地層探査機によって得られた反応が何に対するものかを確認し、その有効性を探る目的もあった。このため、特に探査機に反応した地点については注意深く精査を行なう必要があり、出土遺物については出来るだけその位置の記録に努めることとした。位置測定は、海底下に設置したグリッドを区画したロープの交点から漸次測定し、水深は絶対標高を使用することとした。

その結果、469点の出土遺物の内173点について位置測定を行ない、ソナーによる反応対象物との比較をすることが出来た。その結果については後述する。

海底のシルトの堆積状況は、調査区によって若干の相違はあるが、平均して1層が砂層で厚さが1m前後、2層が混貝砂層で厚さ1m~1.3m程度であり、その下は砂岩からなる岩盤であった。この内、遺物は1層下部から出土し始め、2層上面から3層上面まで及んだが、最も多かったのは、2層上面直下であった。遺物の種類と時期は多岐にわたったが、主に1層には明治から昭和にかけての近代遺物が多く含まれ、2層中には縄文時代から江戸時代までの遺物が含まれていた。従って、層位によって遺物の時期を決定することは出来ない。また、同じ資料が10m程の距離で、しかも水深を異にして接合することもあり、海底シルトの中でも遺物が案外頻繁に移動していることが分かった。更に、時期的に新しい遺物に螺殻が付着せず、本来下層にあるべき時期的に古い資料に螺殻が付着している事例があることも、海底下のシルトの堆積が一様では無く、時にはかなり擾乱状況を呈することがあったことを推測させる。

以下図示した遺物の概略を説明しておく。

#### 1 土器

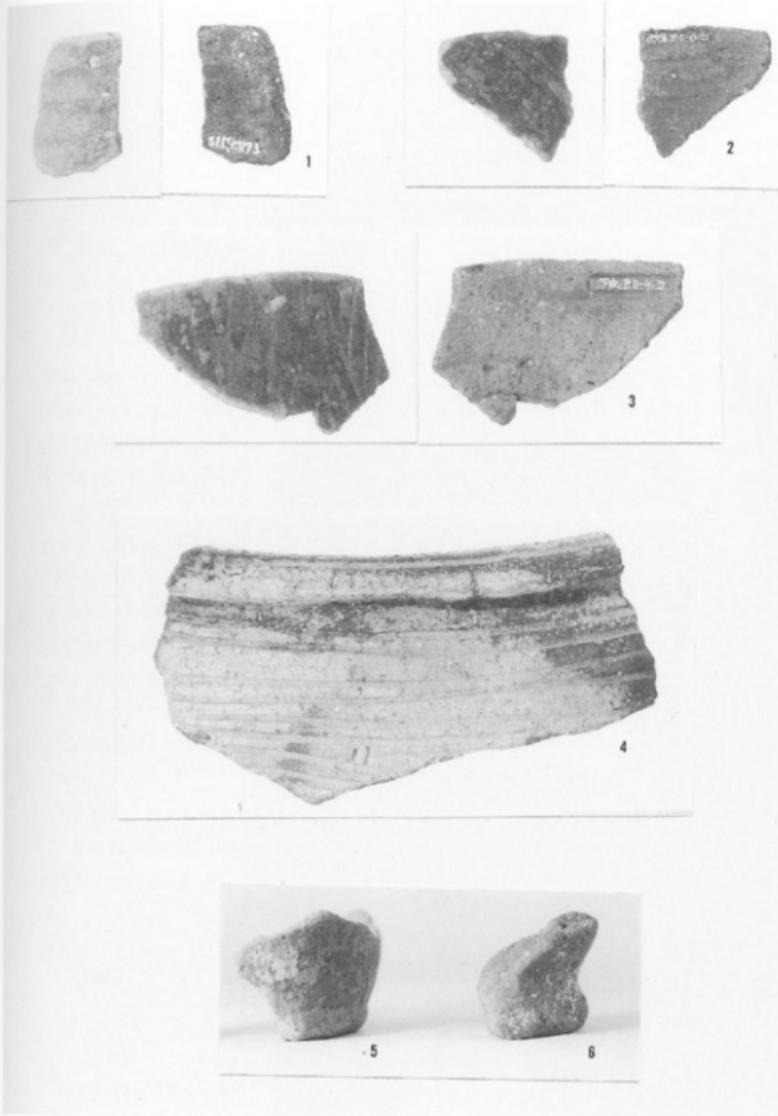
##### ① 縄文土器 (Fig. 15)

1は深鉢口縁部である。黒褐色で胎土に雲母と石英粒を含む。器表面には3条のミミズばれ状の微隆起線を貼付する。焼成は良好であるが、ややローリングを受けている。2層中から出土した。轟B式に比定される。2も深鉢口縁である。茶褐色で胎土に石英と雲母を含む。器壁は7mmと薄く、焼成は良好である。器表面には右斜め下方に向て、そして内面には横方向の短い凹線を施し、口唇部には横円形の刺突を施す。器表面にはススが付着する。3も深鉢口縁である茶褐色で胎土に石英と雲母を含む。器表面には縦方向に浅い沈線を施し、内面には横方向



Fig. 15 横文土器① (1/2)

PL. 23 純文土器



の凹線を巡らす。やはり器表面にはススが付着する。2, 3は曾畠式土器に比定される。

4は鉢口縁部である。復元口径は60cm程になるが、胴部から急速に内湾する器形であるため、器高はそれ程高くならないものと思われる。

黒灰色で胎土に石英と雲母を含む。器表面には凹位の平行沈線を施す。口唇部は肥厚させ、やはり2条の平行沈線を巡らせる。内面はナデによる調整をおこなうが、粘土の継ぎ目痕が明瞭である。鐘ヶ崎式に比定される土器である。

5は深鉢底部である。復元底径は10cmで、底から外側に直線的に胴部まで伸びる。黄褐色で、胎土に雲母と石英粒を含む。器表面は綫方向、内面には横方向のナデ調整を行なう。焼成は良好である。

6も深鉢底部である。復元径は12.5cmで、ややあげ底となる。明褐色で胎土に石英、雲母を含む。内外面共ナデ調整を行なっているが、ローリングを受けているため不明瞭。

5, 6とも晩期に属する資料であろう。

7, 8, 9はいずれも粗製深鉢の資料である。

7は復元口径が26cmで、口

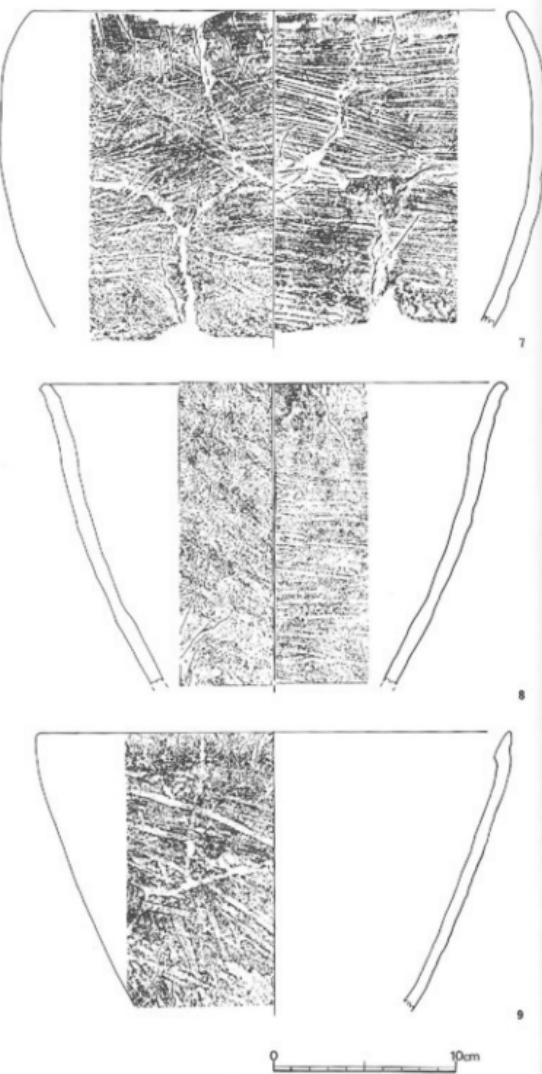


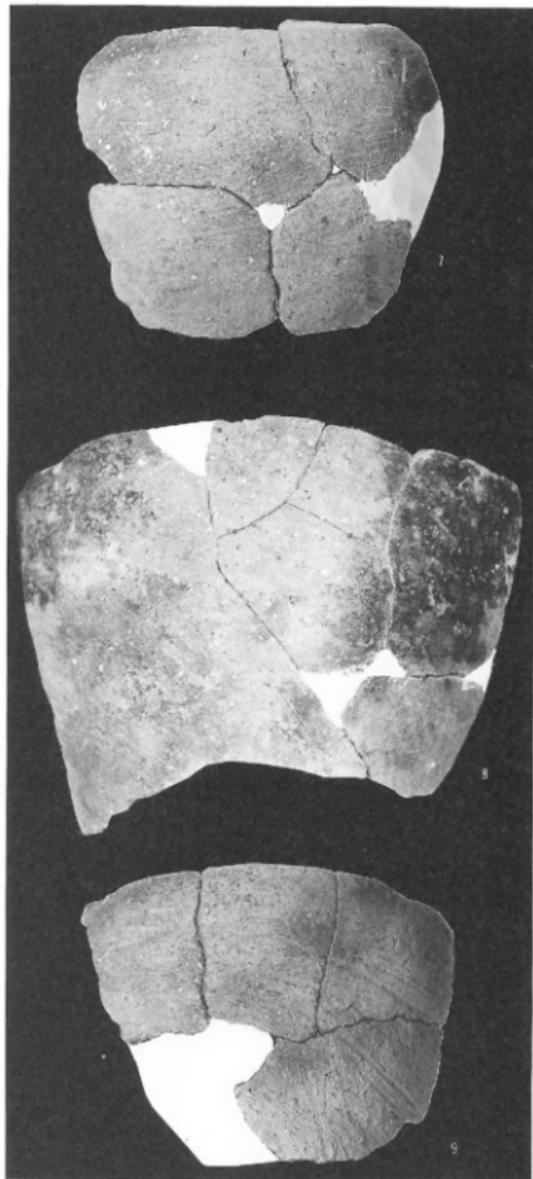
Fig. 16 縄文土器② (1/3)

縁部から外側へ張り出し気味に膨らむため、最大径は胴上半部になる。灰褐色を呈し、胎土に貝殻を含む。器壁の内外には荒い貝殻条痕を施す。共にD-4区とB-6区の2層中出土から出土し、整理の段階で接合したものである。

Bは復元口径が25.5cmで、最大径が口縁部にある。口縁から底部に向かって直線的にすぼむ器形を有する。明褐色で胎土に貝殻を含む。内外面に荒い貝殻条痕を施す。

9は復元口径が26cmの深鉢口縁である。その最大径は口縁にあり、直線的にすぼまりながら胴部にいたる。口唇先端部はやや尖り気味である。暗灰褐色を呈し、胎土に貝殻を含む。焼成は良好である。器壁の外面には荒い貝殻条痕を施し、内面にはナデ調整を行なう。

以上の資料は何れも晩期に属し、類似資料は佐世保市宮<sup>里1</sup>の本遺跡で多く見られる。



② 弥生土器 (Fig. 17)

10は弥生土器の壺口縁である。黄褐色で胎土に大粒の石英と若干の雲母を含む1層の砂層中から出土したが、且つて海底に露出した時期があったものとみえ表面に鱗殻が付着している。口径は21cmで、朝顔状に開く。ローリングを受けていたため調整痕は不明瞭であるが、内面にヨコナデ痕が観察される。中期末から後期にかけての資料である。

③ 土師器 (Fig. 17)

11は土師器口縁である。茶褐色で胎土に大粒砂粒の他、石英と雲母を含む。器壁は1cmと厚く、焼成は良好である。一時海底に露出していたらしく、鱗殻の付着が見られる。如意形口縁で脇部がやや膨らむ器形である。器面調整は外面は荒いタタキ、内面には荒いハケ目を施し、その後、内外の頸部付近にのみヨコナデ調整を行なう。このため、外面のタタキ痕と頸部のヨコナデ痕の境には僅かな段が生じている。なお、内面には指頭による押捺痕が顕著である。口縁内部に一部ススが付着している。11世

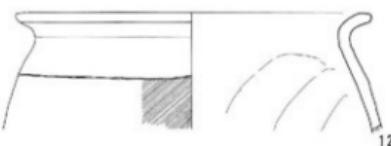
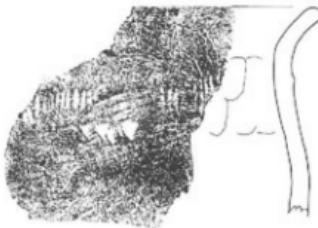


Fig. 17 弥生土器・土師器 (1/3)

紀頃に比定される製塙土器と思われる。

12も土師器である。復元口径は21.4cmの薄手の甕である。茶褐色で胎土に雲母と長石を含む。焼成は良好である。器壁の調整は、外面には斜め方向のハケ目を全面に行なったあと、頸部のみ横方向にナデを施す。そのハケ目とナデの境には細く浅い沈線が残る。内面は頭部以下大きくヘラ削りを行なう。口縁内側上部にススが付着する。

13は胴下半部を欠損するが、ほぼ内容が分かる土師器の甕である。口径は28.6cmで、胸部は厚さ4mmで比較的薄い。明黄褐色で胎土に砂粒を多量に含む。焼成は良い。口縁部はくの字形に外反し、内側には鋭い稜線がつく。器壁調整は、外面は縱方向のハケ目を施し、内面は幅25mm前後で、底部から口縁部方向にかけての体美のヘラ削りを行なう。口縁部外面にはススが付着する。蠣殻等の付着物が全く見られず、また全体的にローリングが認められないことから、海底下に埋没後はあまり移動しなかったものと思われる。

12, 13は8世紀から9世紀にかけての資料であろう。

PL. 25 弥生土器・土師器



10



11



12



13

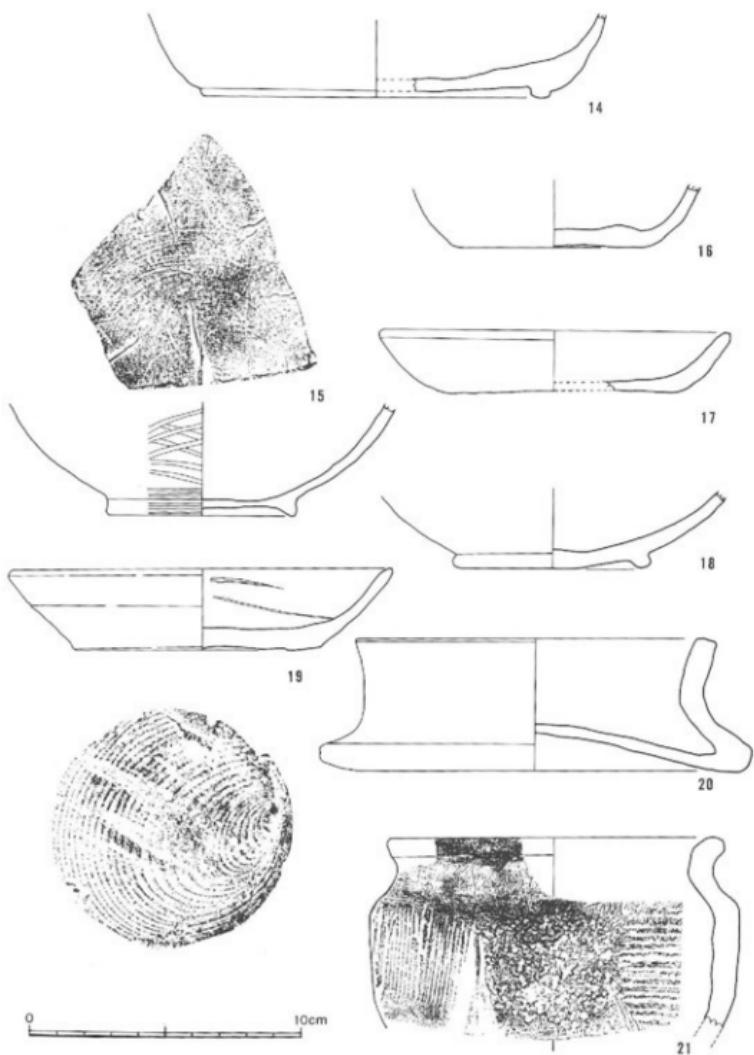
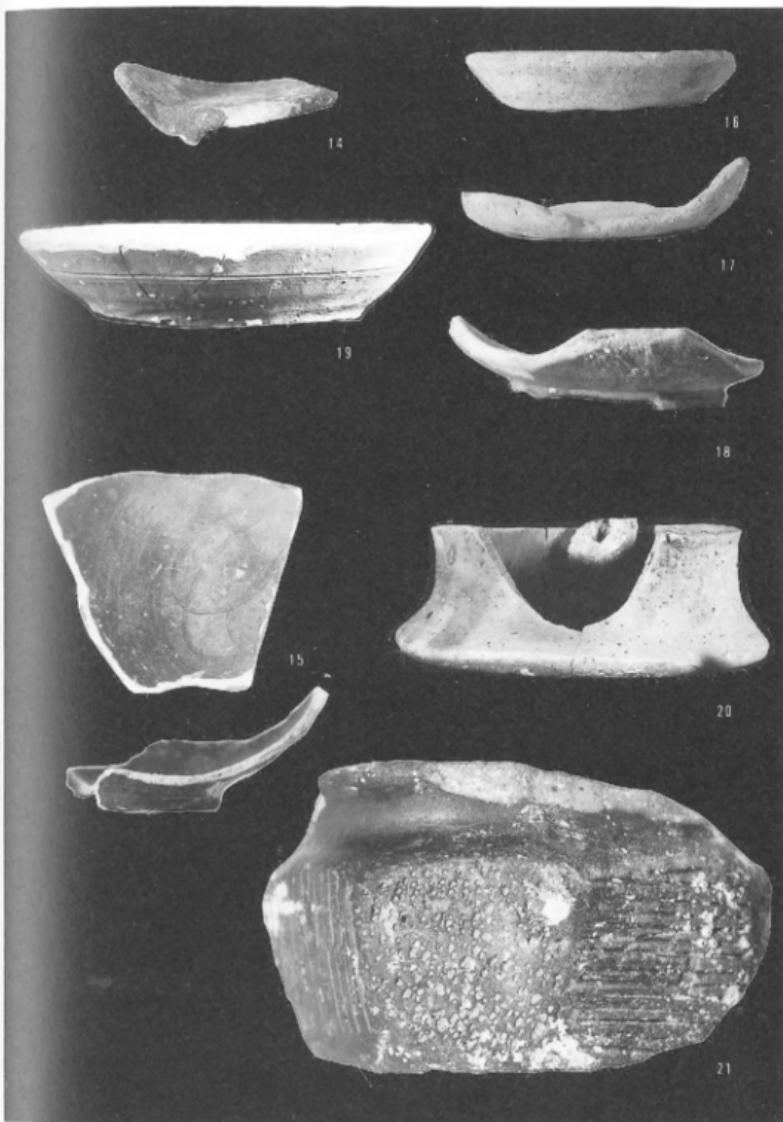
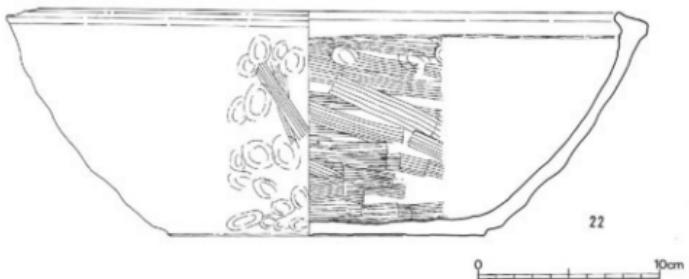


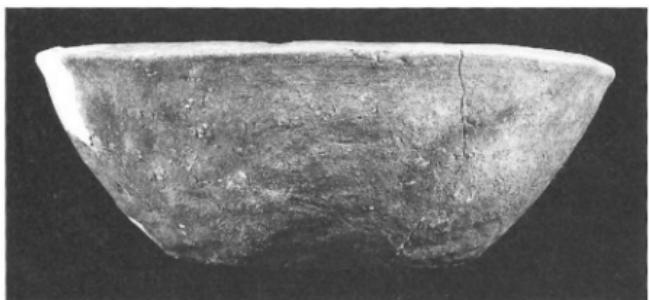
Fig. 18 土師器・その他の土器 (1/2)





PL.27 捩鉢

Fig. 19 その他の土器 (1/3)



14は土師器の杯身である。上部を欠損する。底径は13cmで、底部外側に低く丸い高台がつく。暗灰褐色で胎土には雲母を若干含む。全体的にローリングを受けているため細かい調整痕は不明である。8世紀後半頃に比定されよう。15は黒色土器である。口縁部を欠損する。外面とも黒化処理した所謂黒色B類にあたる。底径は7cmで、底部から体部が強く内湾しながら立ち上がる深椀の器形を持つ。底部には断面が逆三角形を呈する低い高台を持つ。調整のヘラ磨きは概して難で、外底面まで及ばない。外面には一部カーボンの剥落が見られる。この種の土器は九州では10世紀中頃～後半頃より数量が増加し、12世紀前後まで存続するという。16は土師器杯である。口縁部を欠損する。底径7cmで、底部から内湾しながら立ち上がるが、体部中位に屈曲を持つ。黄灰色で胎土に雲母を若干含む。ローリングを受けているため調整痕が不明瞭であるが、山本氏分類の杯aでX期に相当するもので11世紀前後に比定されている。17も土師器杯である。口径13cm、高さ2.2cmを計る。黄灰色で胎土に雲母を若干含む。底部はヘラ切りで、ゆるやかに立ち上がる体部中位には屈曲が認められる。先の編年に従えば、Ⅲ期に相当し12世紀前後の時期が想定される。

#### ④ その他の土器

18は瓦器椀である。外面が黒灰色、内面は黄灰色を呈し、胎土には雲母を若干含む。底径は7.3cmで緩やかに内湾しながら立ち上がる。高台は低く、断面蒲鉾形を呈する。瓦器椀は11世紀中頃に出現すると見られている。19は土師器杯で、口径14.2cm、底径9.2cm、高さ3cmを計る。色調は桃色で胎土は精選されており、若干の雲母を含む。焼成は良好でローリングを受けた痕跡も無い。底は回転糸切りで、体部中位には細い沈線が巡っている。12世紀以降の資料である。20は陶器である。灰白色で焼成は良好である。口径13.6cm、底径16cm、高さ4.9cmを計る。器壁の内外にはロクロ痕が見られる。底はあげ底で調整がいびつであることからその中央部が毀損している。類例に接しないが、機能的には器台に相当しよう。C-12区の2層中出土である。舶載資料の可能性がある。21は瓦器で鉢に相当するものと思われる。口径は18.6cmで円形であるが、体部は八角形で、復元直径が20.5cm程度になろう。器壁は1.5cmと厚い。外面はいぶし銀色を呈し、内面には全面にわたってススが付着する。外面胴部は八角形に区画し、平行沈線と刺突文を交互に繰り返しているが、沈線の方向は縦方向と横方向を交互に配置している。作りは稚で、内面には指頭押捺痕が顕著である。B-11区2層からの出土であるが、器壁に蠣殻が付着しており、ある期間海底に露出していたことを示している。用途は不明であるが、ススの付着の状態から使用頻度が高い日用雑器であろう。22は陶器の捏鉢で、ほぼ1/2が残存する。青灰色を呈し、胎土には大粒の長石を多量に含む。焼成は普通である。口径は35.3cm、底径は17.2cm、高さは12.3cmである。器壁調整は外面はナデを行なうが、指頭押捺痕が顕著である。内面は荒いハケ目調整を施している。舶載資料と思われる。

註1 佐世保市教育委員会「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査報告書 1980

註2 森 隆『九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書』「古文化談叢第21集」所収  
九州古文化研究会 1989

註3 山本 信男『統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて一』「九州上代文化論集」  
所収 乙益重隆先生吉希記念論文集刊行会 1990

註4 森田 勉・横田賢次郎『太宰府出土の土師器に関する覚え書き』「九州歴史資料館研究論集  
2」所収 九州歴史資料館 1976

⑤ 舶載陶磁器(Fig. 20~Fig. 32)

床浪海底遺跡から出土した陶磁器類について述べる。同海底遺跡の調査区域からは、大別すると国内産と舶載品が検出確認された。そしてその陶磁器類が生産、流通、使用された時期は、この島が持つ歴史的背景と密接に関連しているように思われる。以下はその出土遺物としての陶磁器類に焦点を当て、遺跡自体の性格を明らかにしてみたい。

◎舶載品の碗・皿類。

23 青磁碗である。高さ7cm、口径16.6cm、底径5.8cm。整形は粗雑でヘラ削りは粗い、器形の内壁面には平行沈線が走る。胎土は若干気泡を含む。釉調は淡灰黄色を呈し焼成は良好である。また見込み部分には焼き重ねの砂目跡が付着している。全体としては青磁本来の色調は薄く得られていない。日用什器の雑器として使用されたものであろう。

24 青磁碗である。高さ6.5cm、口径16cm、底径6.5cm。整形は全体的に粗く、器形外面にろくろ整形の痕跡を残す。釉調は淡灰黄色を呈す。施釉は器形の両面に流し掛けで、本来は無釉であるべき高台にも釉掛かりが見られる。高台部分は回転ヘラ削りである。焼成は良好である。

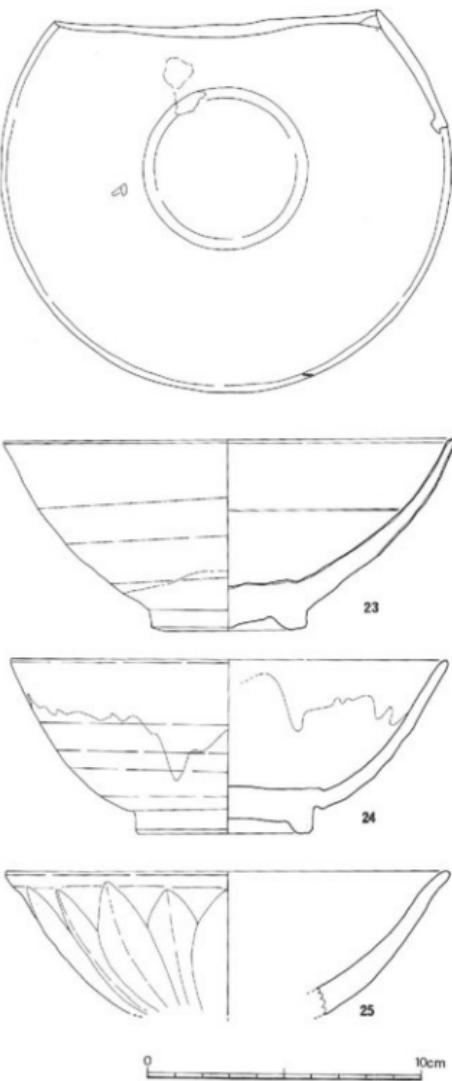
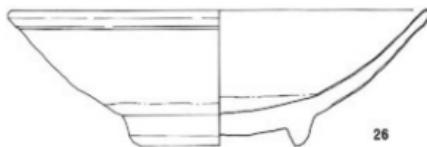


Fig. 20 舶載磁器① (1 / 2)

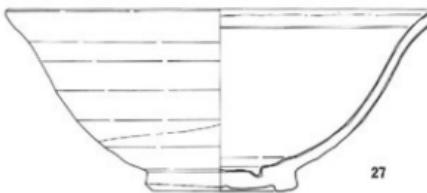
25青磁碗である。胎土は精良で、焼成も良好である。釉調は暗黄緑褐色を呈し、いわゆる龍泉窯系青磁の特徴を示す。蓮弁は鏽を有する「鏽蓮弁」で、施釉も均等であり、最大4mm程度の厚みを有する。ただし釉の表面には気泡が表れ、一部貫入りも見られる。器形及びモチーフは13世紀初頭からみられるもので、大量生産された什器とみなしうるであろう。

26白磁皿である。口縁径15.2cm(復元)、器高49mm、底径6.5cm。やや高い高台を有する。胎土は気泡と黒い微粒子を含む。焼成は良好である。釉調は淡灰白色を呈し、施釉は全面で、見込み部分のみ蛇ノ目釉ハギである。器面の下部と高台部分は、ヘラによる調整痕が明瞭に残る。12～13世紀代のものと思われる。これも日用什器であろう。

27白磁碗である。口縁部分の残存は半程度である。口縁径15.5cm(復元)、器高6.55cm、底径5.4cm。口縁部直下の内側面には平行沈線が走る。胎土は砂粒、黒い微粒子を含み、気泡がみられる。釉調は薄緑灰色で光沢がある。施釉は器形下部から高台部分にかけて無釉である。また口縁端部が釉ハギされ、見込み部分も蛇ノ目釉ハギである。高台の無釉部分の釉調は淡黄色を示す。焼成はやや不良。器形の外側面はヘラによる調整痕が明瞭に残る。疊付けの部分は面取りがなされている。



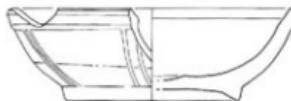
26



27



28



29



Fig. 21 船載磁器② (1/2)

28白磁小皿である。口縁径8.9cm, 器高3.2cm, 底径4.1cm, 完形品である。口縁部直下の内側面に平行沈線が走る。胎土は殆ど砂粒を含まず、精良で磁化も良好である。釉調は乳灰白色を呈し、釉は流れ溜まりの釉尻が灰緑色を呈する。施釉は口縁部から器形の内外側面に及ぶが、下部から高台部分にかけては無釉で、底部は砂目をみせる。また見込み部分と疊み付けには付着物がみられる。焼成は良好である。12~13世紀代のものであろう。



29白磁小皿である。器形のうち1/4が残存し、他は欠損のため、復元を試みた。器形は肉厚である。外側面の口縁直下には凸帯白線の平行線がめぐり、内外側面は二重白線で器形を6区画に別つ。外側面は口縁直下の凸帯平行線から出発して高台まで延び、内側面は口縁部から出発して見込み部分直上まで延びる。口縁端部は釉ハギで、内側面はヘラによる調整痕がみられる。胎土は精良で、焼成は良好。釉調は灰白色を呈し、釉調は薄緑灰色を呈す、施釉は

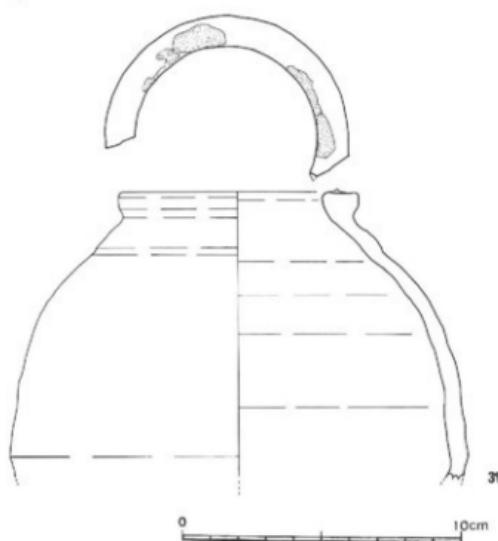


Fig. 22 船載陶器① (1/2)

器形下部より高台部分は無釉、墨み付け部分の面取り調整はない。

◎船載の壺類、瓶類である。

褐釉壺である。褐釉壺は数タイプの器形に大別できるが、ここではそれを種別ごとに取り上げて、器種の特徴を明確にしたい。そこでこれをI類～IV類まで便宜的に区分する。

(I類-A)

30は口縁部から肩部にかけて残存し、以下は欠損する。口縁径10cmで中型のものである。器形は口縁直下から緩やかに膨らみをみせる。ヘラによる調整痕を残す。器面は肉厚で強度的には強く、安定した構造を有する。口縁部中央にやや凹みがみられるのが特徴である。胎土は少量の石英粒を含み精良である。焼成は不良。施釉は内外面に及ぶ。釉調は外側面が暗茶褐色、内側面が薄茶褐色を呈す。韓国新安沖の沈没船にも同様の器種が出土している<sup>(3)</sup>。

31は口縁部が1/2残存し、復元を試みた。口縁径8.6cm(復元径)。30に比べると口縁直下から一層大きく膨らみ、頸部をなす部分が明瞭で、そこからさらに緩やかな膨らみをみせる。器面はヘラによる調整痕を残し、肉厚である。口縁部分は凹みをみせ、焼成時の焼重ね用の胎土目が溶着している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。施釉は内外面に及ぶ。釉調は暗褐色を呈す。

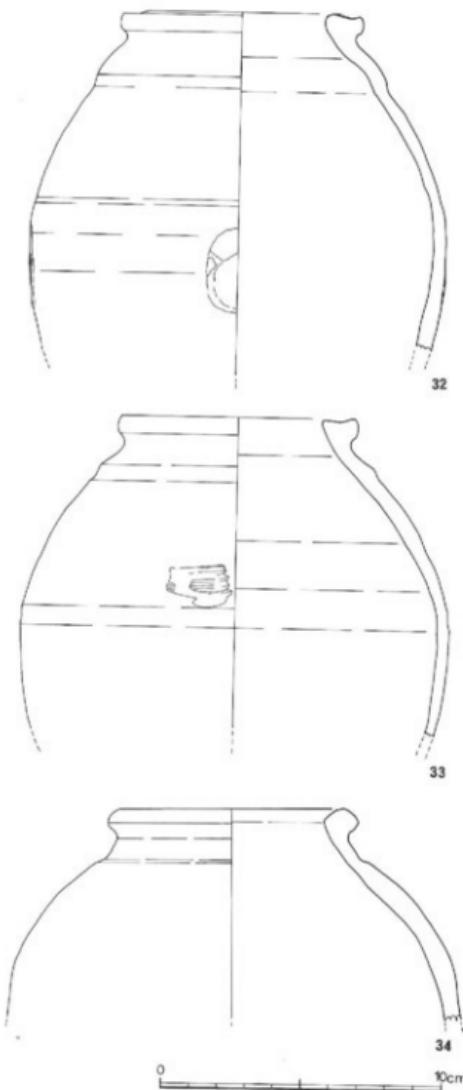


Fig. 23 船載陶器② (1/2)

32は器形の1/2が残存するため、復元を試みた。口縁径9cm(復元径)。31と同様の器形を示し、口縁部直下に高さ2cm程度の頸部を有し、それを境に緩やかな膨らみをみせつつ、胸部最大幅に至る。器形はヘラによる調整痕を留める。口縁部には焼重ね時の、胎上目が熔着している。胸部中央にも胎土目が熔着。胎土は灰白色、若干の粒子を含むが精良。施釉は内外面に及び、釉調は黒褐色。焼成はやや不良で、釉の剥落が激しい。

33も1/2固体を復元実測した。口縁径8.5cm(復元径)。31, 32に比べて頸部は短い。器形の全面にヘラによる調整痕を留める。胎土は灰色で、若干の石英粒子を含むものの、比較的精良。施釉は内外面に及び、釉調は暗褐色を呈す。焼成はやや不良。器形の全面に気泡が表れている。また、胸部には焼成時に熔着した、貝の背跡が残る。貝目である。

#### (I類-A')

34も器形の1/2が残存するため、復元を試みた。口縁径9cm(復元径)。31, 32, 33に比べると口縁部分の凹みではなく、口縁自体も断面がやや蒲鉾型を呈し、頸部も短い。器形はヘラによる調整痕を留める。断面はI類一

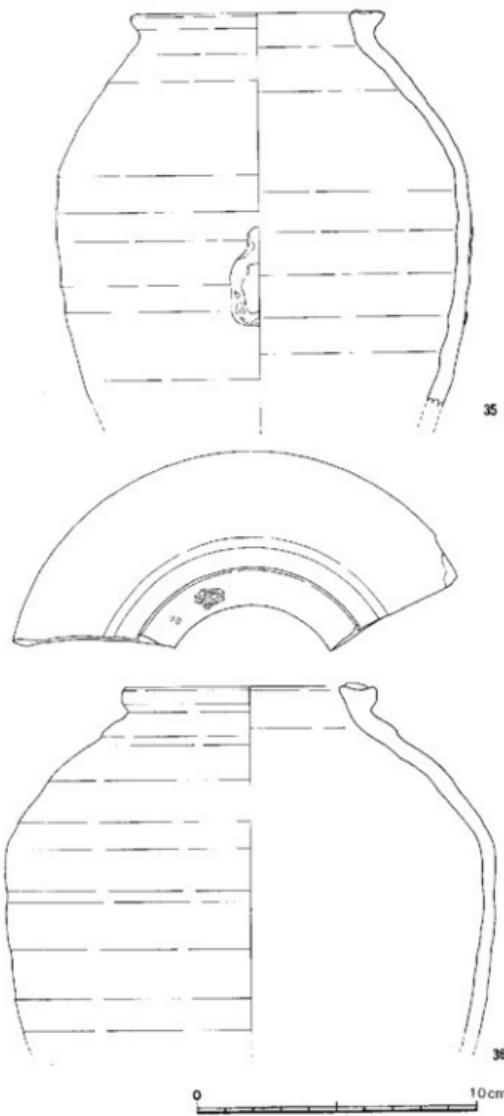


Fig. 24 級載陶器③ (1/2)

Aに比べて、頭部直下の肩部からほぼ2倍の肉厚となる。胎土は砂粒、砂レキを多く含む。焼成は良好。施釉は内外面に及び、釉調は暗灰色を呈す。

(I類-B)

35洞部下方から底部を欠損。口縁部径9cm、胸部最大幅14.8cm。I類-Aと外見上では同器種に見えるが、最も違う点は、口縁部直下から大きく膨らみ、器形全体のほぼ1/3程度の位置に、緩やかな肩部の張り出し部がある点である。従って、器形のうち最大幅は、肩部の張り出し部分である。口縁部分はI類-Aと同様に凹みがあり、焼き重ね時の砂目跡が明瞭に残る。また器形の全面にヘラによる調整痕が伺え、腹部中央の外壁面には2つの胎土目跡が着している。胎土は灰白色、若干の粒子を含む。施釉は内外面に及ぶも、器面の施釉部分は気泡が見える。焼成は良好である。この器種も韓国新安沖の沈没船から同様のものが出土している<sup>(5)</sup>。

36口縁部分と肩部分の1/2を残存するので、復元を試みた。口縁径9cm、最大幅18.5cm。口縁部分には胎土目が明瞭に残り、焼重ねの状況を呈する。器面は全体にヘラによる調整痕が伺える。胎土は精良、焼成も良好、施釉は内外面に及び、釉調は暗灰黄色を呈する。

37口縁部分から腹部の側面が1/3程度残存するため、復元を試みた。口縁部10.2cm、最大幅19cm、器面は全体にヘラによる調整痕がみえる。頭部から肩部にかけて、胎土目が着しているが、おそらくは口縁部分に乗せた焼重ね用の胎土が落ち、焼成時に熔着したものであろう。胎土は石英の粒子を含む。焼成は良好。施釉は内外面に及び、釉調は暗緑灰褐色を呈す。

(I類-B')

38口縁部分と肩部分の1/3が残存し、復元を試みた。肩部の張り出し方や、器面の厚みなどI類-Bと酷似するが、口縁部分に着目するとI類-A'に同様に凹みがなく、断面がS字状にたちあがり、I類-Bにはない、高さ7mm程度の頭部を有している。また器面自体も均等な厚みを持ち続け、若干肉厚の感がある。器面は頭部から肩部分にかけて、ヘラによる調整痕が残る。胎土は石英の粒子を含む。焼成は良好で、施釉は内外面に及び、釉調は暗緑灰色、内側面は灰緑色を呈す。若干、釉の剥落がみられる。

39 I類の底部と思われる。底径8cm、底部はくり込みによって高台状となし、疊付け部分には焼成時に熔着した、砂が付着している。恐らく焼重ねによる他との熔着を避けるためのものであろう。砂は黄色の灰褐色を呈し、石英質のようである。胎土は灰褐色の粒子を含み、やや粗質である。調整痕は外側面の右下がりヘラミガキが明瞭に残る。釉調は灰褐色を呈し、内側面は施釉が焼成不良により、一面にツブツブと気泡として目立つ。この底部がI類のどれに該当するのか、判じ難いが、過去の出土例からみると、おそらくはI類-A、A'のいずれかであろう。

(II類-A)

40四耳付褐釉壺である。口縁部分とわずかに胸部が残存し、以下は欠損する。口縁部外径8.7cm、口径8cm。口縁部分は、断面三角形の葦傘状に、やや下がり加減に張り出す。この器種の特徴の一つである。3cm程度の粘土紐の両端を、押圧によって付着し耳となす。耳は縱方向に口縁を中心として、左右対象に一対ずつが付着している。肩部の張りは強く、器高筒形を呈する。器面はヘラによる調整痕が見られる。また胴部の外壁面には焼成時に他と熔着せぬよう、胎土目をかませたものか、その胎土が付着している。器面は口縁部分を除いて肉薄である。胎土は砂粒を含むも精良。施釉は内外面に及び、釉調は外側面が灰赤褐色を呈し、内側面はやや赤褐色を呈す。焼成は良好で堅く焼きてしまっている。この器種は北部九州を中心に、国内でも出土例が知られる。また大陸では、泉州湾で出土した、宋代沈没船の積み荷として検出され、共伴した貨幣は、淳元宝背7年(1271年)の

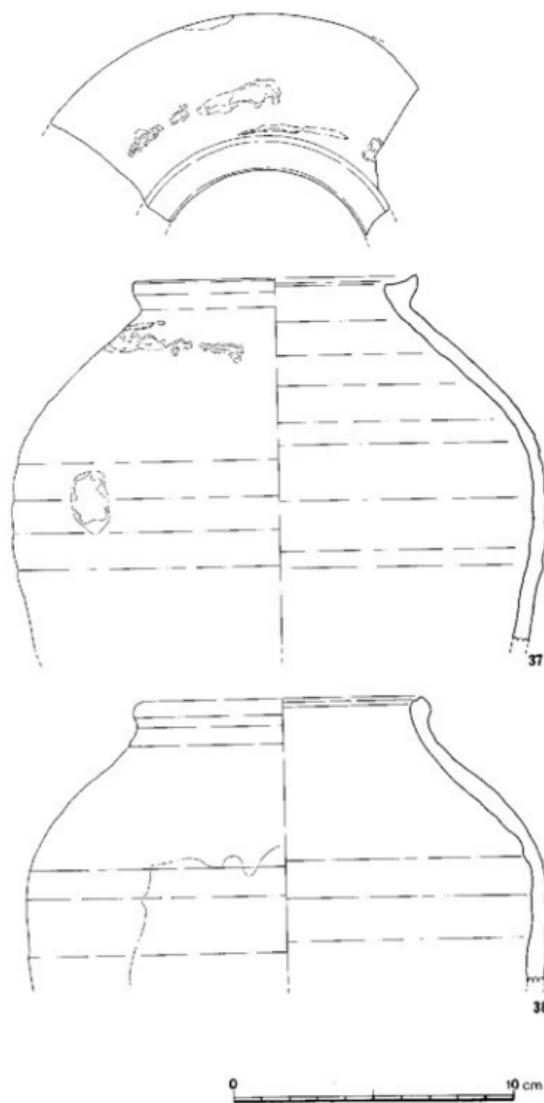


Fig. 25 舶載陶器④ (1/2)

紀銘があった<sup>(3)</sup>。また金壇周囲基の副葬品にこの器種が含まれており、埋葬年代は南宋理宗の景定2年(1261年)であった<sup>(3)</sup>。さらに韓国新安沖海底から出土した沈船にも、この器種が含まれており<sup>(3)</sup>、共伴した木簡の年号、至治3年(1323年)がしらされている。すなわち少なくとも13世紀後半から14世紀前半までは、広く使用された雑器と考えられる。

41口縁部分が1/3程度残存しており、復元を試みた。40と同様に四耳付褐釉壺である。40に比べると口縁部分の臺座状口縁の直上にごく僅かだが、約2mm程度の立ち上がりが外反して、ラッパ状に開く。口縁部外径10cm、口縁上部が6cm、下部が5.2cm(復元径)。耳は同様に押圧痕で縱方向に付着している。胎土は赤褐色で、少量の砂粒と気泡を含む。施釉は内外面に及び、釉調は外側面が灰褐色、内側面は赤褐色が強い。釉の剥落が激しい。焼成はやや不良である。

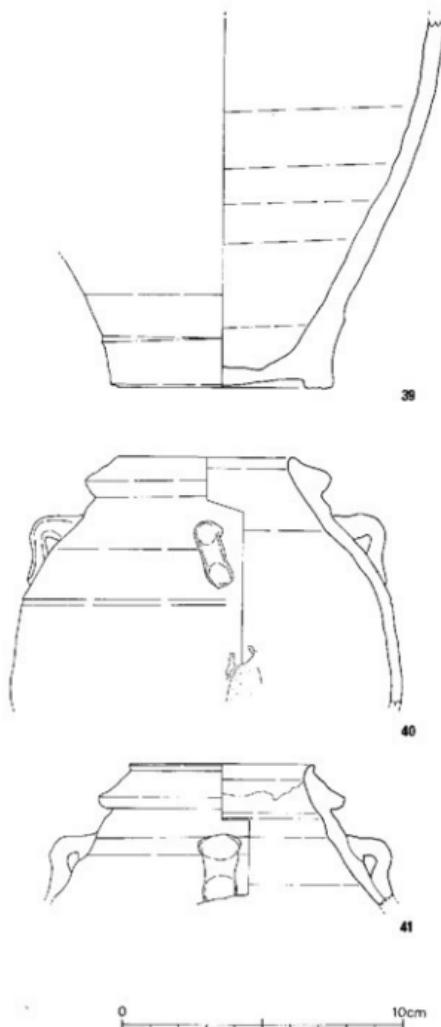


Fig. 26 船載陶器⑤ (1/2)

42四耳付褐釉壺の胸部である。この器種にはかなり大きさに差があるが、これはほぼ中ぐらいの大きさであろう。胸部は筒形をなし、底部直上で内反しつつはある。底部分は肉厚で安定性に優れている。また底部は復元径8.4cm、ゴケ底である。疊み付け部分は焼重ねにより欠落が激しい。器面には調整痕が明瞭に残る。胎土は石英微粒子を多く含む。釉調は灰白色であり発色していない。焼成も不良である。

43四耳付褐釉壺の胸部である。42と同様で、器形的にもほぼ同じくらいのものであろう。胸部はヘラによる調整痕が明瞭である。器面の外側面下部には焼成時に付着した、胎土目がみえる。底部は底径8cm、ゴケ底である。胎土は石英の微粒子を含む。釉調は暗緑褐色、地色は暗茶褐色を呈す。焼成は良好である。

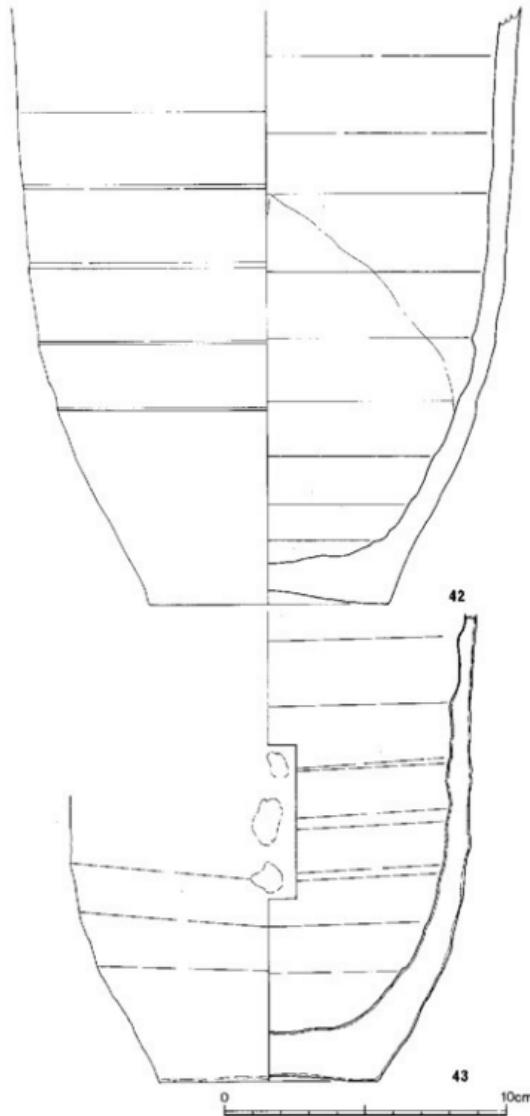


Fig. 27 船載陶器⑥ (1/2)

(II類-B)

44四耳付褐釉壺の口縁部分と底部である。同一固体と考えられる。II類-Aとの違いは口縁部分と底部が大形であり、一見すると幅広の四耳付褐釉壺である。従って外形的には口縁部分も、底部もそれぞれII類-Aを幅広にした感がある。口縁部分は11.5cm(復元径)で、壺身状口縁のややさがりぎみの張り出しをもち、粘土紐を押正痕により縱方向に付け、耳となす。口縁部分に沿って、焼重ねのために、上の器と熔着したものか、釉の剥離痕跡が明瞭に残る。これは底部の疊付け部分でも、同様の釉の付着跡がみられる。製品を引き剥がす際に、あるいは釉が剥離し、あるいは付着したものであろう。底部は底径8.5cmで、ゴケ底である。胎土は石英の微粒子を含む。焼成は良好。釉調は暗黒褐色を呈す。

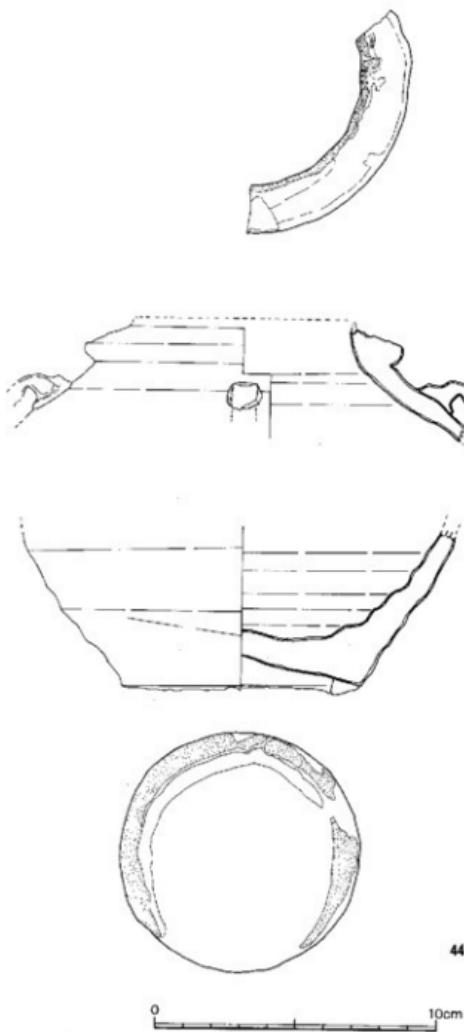
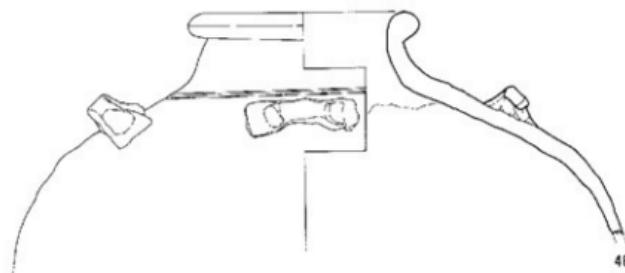
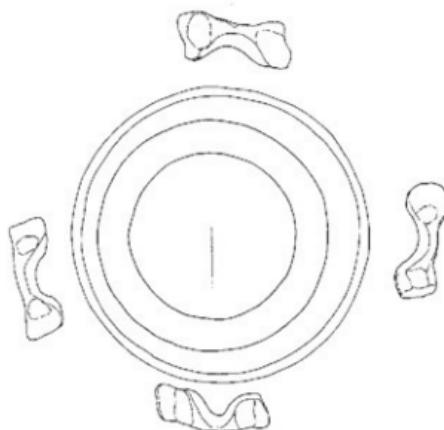
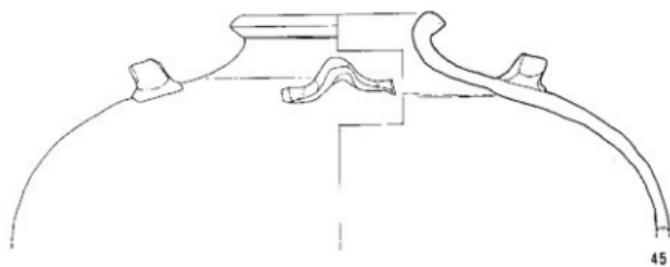
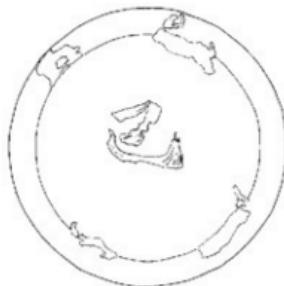
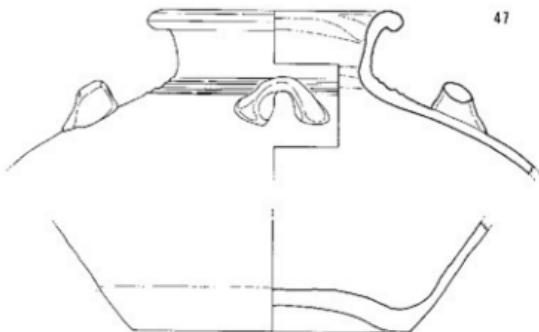


Fig. 28 船載陶器⑦ (1/2)



0 10cm

Fig. 29 舶載陶器⑧ (1/2)



0 10cm

Fig. 30 舶載陶器⑤ (1/2)

(III類一A)

45 黒褐釉四耳壺、いわゆる「呂宋壺」である。口縁部から肩部にかけて残存し、胸部以下は欠損す。口縁径11.5cm、四耳は粘土紐を、口縁部と同心円を描くように横向きに、しかも均等の間隔をあけて、押圧痕によって取り付けられている。器形は口縁部から耳付き直上の、高さ2cm程度の頸部にかけて大きく膨らみをもち、そのままさらには膨らんで器形で最大径となる肩部を構成する。典型的な「呂宋壺」で肥後細川家伝来の「黒清香茶壺」とほぼ同型と思われる<sup>11</sup>。施釉は全面に及ぶとおもわれるが、口縁部分から耳迄の間は釉ハギを行う。胎土は若干の気泡がみられる。焼成は良好。釉調は暗黒褐色を呈す。この器種は宋代から明代にかけて、中國東南部において生産されており、最近の調査では、現在の広東省広州石湾鎮寄石村古窯群の桃源崗古窯跡と、広東省新会県官沖村の新会古窯跡から、この種の壺類が生産されていたことが分かっている。このうち桃源崗古窯跡からは「嘉裕□口」(1056~63)、「政和6年」(1116)の年紀が、また新会古窯跡からは「政和2年」(1112)の年紀が出上しており、11世紀中葉から生産されていたことを伺わせる。ただ、おそらくは広東省から福建省の民窯でも、幅広く生産され

た日用品であった可能性がつよい。

(III類-B)

46茶褐釉四耳壺、これも「呂宋壺」である。口縁部分から肩部にかけて残存していた。口縁径11.4cm、III類-Aに比べると頸部が高く、四耳との間には、ごく細い2本の推線が口縁と同心円を描く。耳は口縁部を中心に粘土紐を均等な間隔で、横向きに押圧痕により取り付けられている。肩部はAに比べ緩やかに膨らみをみせ、やや肩細の感を与える。胎土は緻密、若干の気泡を伴う。焼成は良好。色調は茶緑褐色を呈す。同様の器種としては、頸部から肩部にかけて波状沈線が巡るものが、佐賀県片山一号経塚の銅板製經筒の外容器として出土し<sup>45</sup>、經筒の編年からみて、12世紀初頭の埋納が考えられ、外容器としての壺も、ほぼ同じ頃に貿易陶磁器として入ったものと思われる。生産地はおそらく中国南部の広東省か福建あたりの窯のものであろう。

47黄褐釉四耳壺、これも「呂宋壺」である。口縁部分と肩部分が残存し、耳部分も2個残存していた。口縁径13.7cm。<sup>46</sup>と同じように、頸部直下に口縁と同心円を描いて4本の推線が巡る。耳は同様に粘土紐を押圧痕により四つ、口縁部を中心にややいびつながら横向きに配置している。肩部からの膨らみはやはり緩やかである。胎土は黄灰色で石英粒を含む。焼成は良好。釉調は外面が暗黄緑灰色、内面が灰白色を呈す。施釉は全面に及んだとおもわれるが、釉の載りが悪く剥脱している部分が多い。

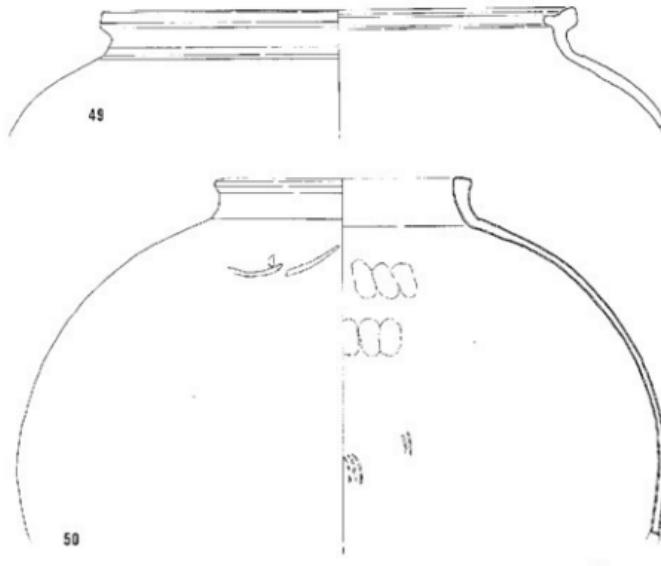


Fig. 31 軸載陶器@ (1/4)

48 黄褐釉四耳壺の底部である。底径15cm、ゴケ底である。骨付け部分には砂土目が残る。また、底部中央には鉄軸により漢字体で「己」を描く。胎土は精良。焼成は良好。釉調は暗黄緑灰色を呈す。

(IV類)

49 褐釉瓶である。口縁部が1/4程度残存しているため、復元を試みた。口縁径6.2cm(復元径)、口縁部分は殆ど垂直に近く立ち上がり、緩やかに膨らみをもつ肩部となす。胴部もほぼ同じ幅であろう。器面はやや肉薄で、内外の側面はヘラによる調整痕がみられる。胎土は砂レキや粒子をやや含む。焼成は良好。釉調は青灰褐色を呈す。この器種は太宰府都府棲跡や、中世の博多、さらには佐賀県東脇村の雲仙寺跡の経塚からも出土しており<sup>⑨</sup>、12世紀～13世紀に幅広く使用された雑器と考えられる。

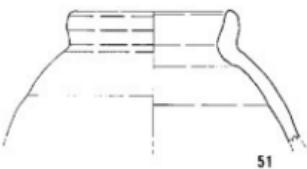
壺 (Fig. 31)

49は復元口径が34cmの壺で、口縁から肩部にかけて残る。色調は灰色で胎土に砂粒を含み、焼成は良好で堅緻である。口縁は若干外反し、内側に突き出す。口縁から下部は肩に向かって大きく張り出す。胴部径は50cm程にもなるものと推定される。内側には同心円の當て具痕が頗著である。

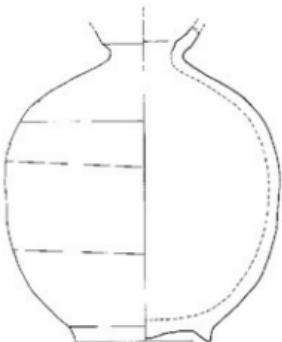
50も大型の甕である。口縁部は短く直立し、肩部から胴部にかけて大きく張り出す。口径は18.2cmであるが胴部径は46cmになる。茶褐色を呈し、胎土には細かい砂粒を含む。内面はタタキのあとナデ調整を行なう。

### ◎高麗系青磁

52 青磁の小壺である。口縁部の上面が欠損するが、ほぼ完形に近い。器高約11.5cm、胴径9.7cm、底径4.9cm。口縁部は残存する部分から、推定するところラッパ状に開くと思われる。頸部は細く短い。胴部は円みを帯びて膨らみをみせ、そのまま底部へとすぼまり、全体的には提灯形を呈する。底部は骨付け部分を残してくり込みをみせるが、くり込みが不十分で、三日月高台ぎみである。胎土は黒い粒子を多く含む。焼成はほぼ良好。施釉は全



51



52



面に厚くかかり、2mm程度の部分もある。器面には質人がみられる。釉調は淡緑灰色を呈す。底部には砂目の痕跡が着する。

#### ⑥ 船載陶磁器に関する考察

これまでに、出土遺物の船載陶磁器に関する所見を述べてきたが、これら資料について若干の総括を行ってみたい。まず碗類であるが、どれも日用什器とみなしうる。すなわち器形の整形や施釉の状況をみると、25を除くいずれもが、大量かつ粗雑な増産型と言え、これまでに同遺跡近辺から検出された、類例の多さからも、この点を指摘できるものと思われる。またこれらと同器種の碗は、中世の博多でも盛んに出土することから、その流通は12世紀～13世紀代と考えられる。次に皿類であるが、28はやはり整形、施釉とともに粗雑で、大量生産の器種といえよう。ただ29は、意匠や施釉が丁寧で、手の込んだ造りであり、やや高級感がある。おそらく時代的には碗類と同じ程度であろうと思われる。

次に壺、瓶類であるが、所見にもあるとおりI類-A～III類-Bまで、韓国新安沖の沈没船から同様の器種が検出されており、同船の沈没時期が至治3年（1323年）頃とみられるので、その流通時期も、12世紀～14世紀前半の範囲内に入るものと思われる<sup>15)</sup>。IV類は中世の博多や、所見でも述べたように、北部九州の経験に埋納された類例も多く、時期的には同じ幅を与えることができる。最後に高麗青磁の壺であるが、これは整形や施釉も丁寧で、しかも日用什器ないしは貯蔵用の雑器というよりは、高級感のあふれる製品といえる。

さて、これらの船載陶磁器類が流通していた時期と、この遺跡の歴史的な背景を重ね合わせると、まず想起されるのは、元寇関連の事件であろう。まず文永11年（1274年）に行われた元軍の進攻、そして7年後に行われた弘安4年（1281年）の再攻、そのいずれもがこの鷹島を舞台に行われており、特に再攻が行われた弘安役（弘安4年・1281年）では、元軍軍船4,400隻が、この島の南岸海域で、暴風雨により覆滅したとされている。では、これらの陶磁器類はその際のものといえるのであろうか。物的証拠としての遺物は、これら元軍の携行品としては何の申し分のない品といえる。ただ本遺跡では遭構面が確認されておらず、武器武具といえるものは確認されていない。ましてや覆滅した軍船の痕跡も確認されていない以上、これら陶磁器類のみをもって、ただちに元軍の携行品と断定するのは早計であろう。何故なら、これら陶磁器類は12世紀～13世紀代には、東アジア諸国で、ごく普通に流通していた品であり、元軍と直接結びつくだけの確証に乏しいからである。ただ限りなく元寇関連遺物である可能性が強いことだけは言い添えておきたい。今後、遭構として覆滅沈没した元軍軍船自体の発見がなされ、その積載品の中に、これら陶磁器類が確認され、晴れて本遺物類も同様の品であることが、証明されることを待ちたい。

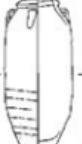
器種 年代	I類一A	II類一A	II類一B	III類一A	III類一B	IV類
	I類一A					
1 1世紀				• 1056年 桃源洞古窯跡「嘉祐〇〇」紀銘		
1 2世紀				• 1112年 新余古窯跡「政和2年」紀銘		
1 3世紀				• 1260年 モンゴルのフビライ汗即位 • 1261年 金邊境周境窯制器品（南宋景定2年）		
1 4世紀	• 1274年 元遼襲宋（文永の役） • 1323年 朝鮮新安沖で貿易船が沈没	 		• 1279年 南宋は元との崖山の戦いに敗れ滅亡する • 1281年 元遼襲宋（弘安の役）  		

Fig. 33 楊釉系壺類の編年（概念図）

PL. 28 舶載陶磁器



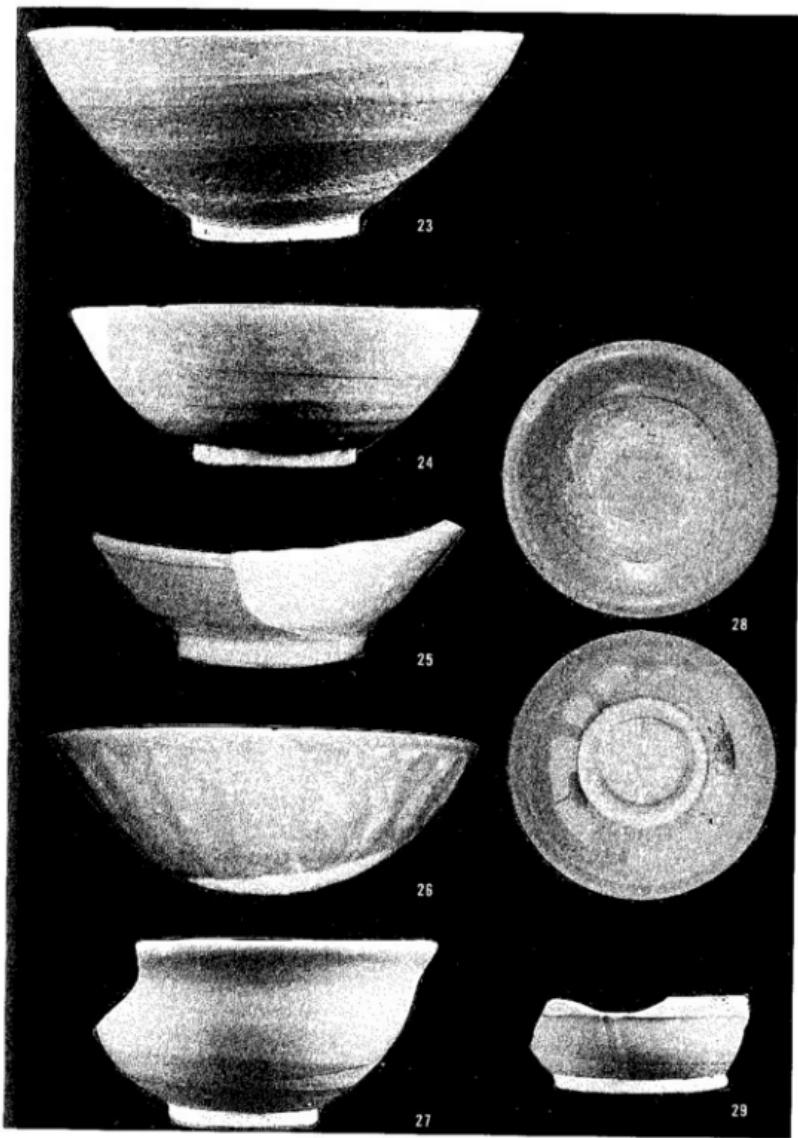
PL. 29 銘入り船載陶磁器



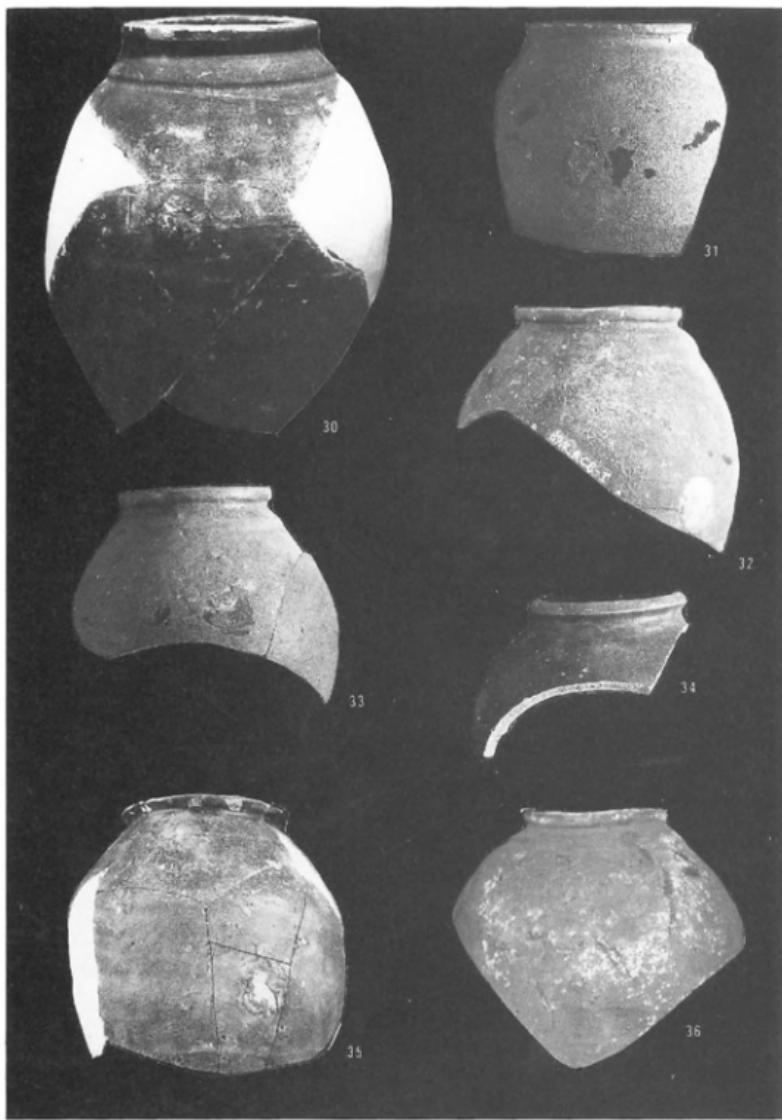
PL. 30 高麗青磁



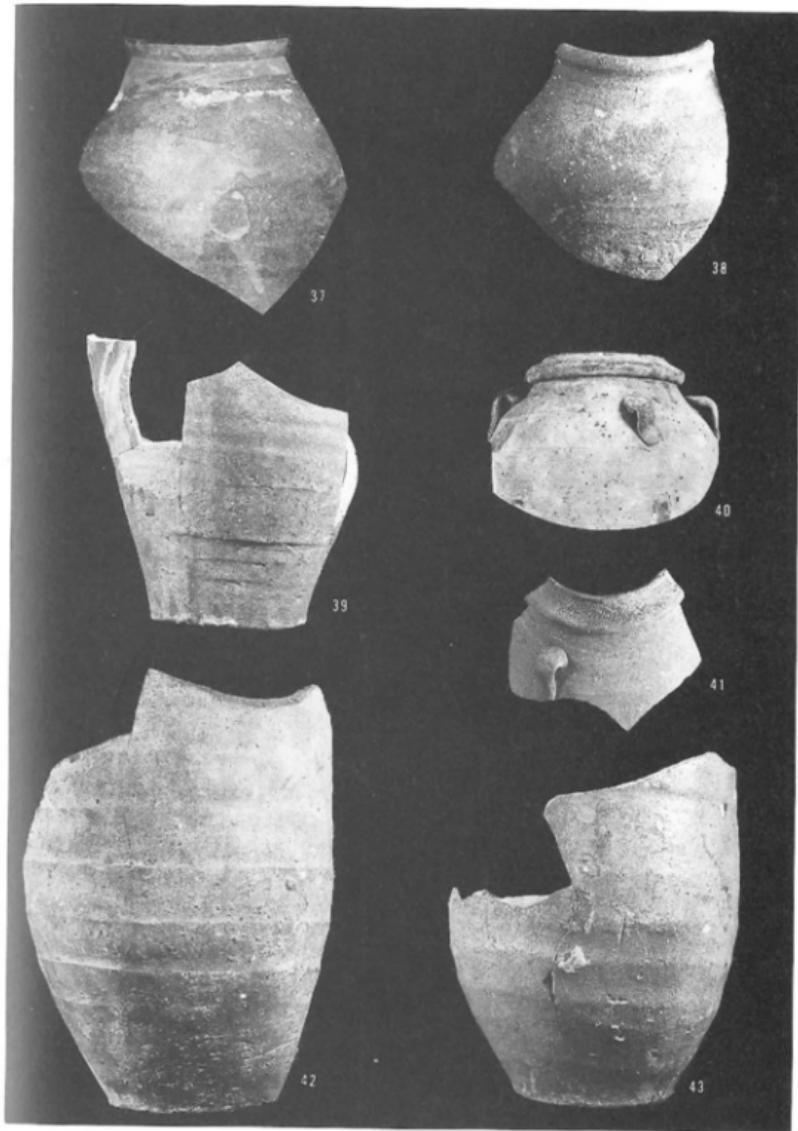
PL. 31 船载陶磁器



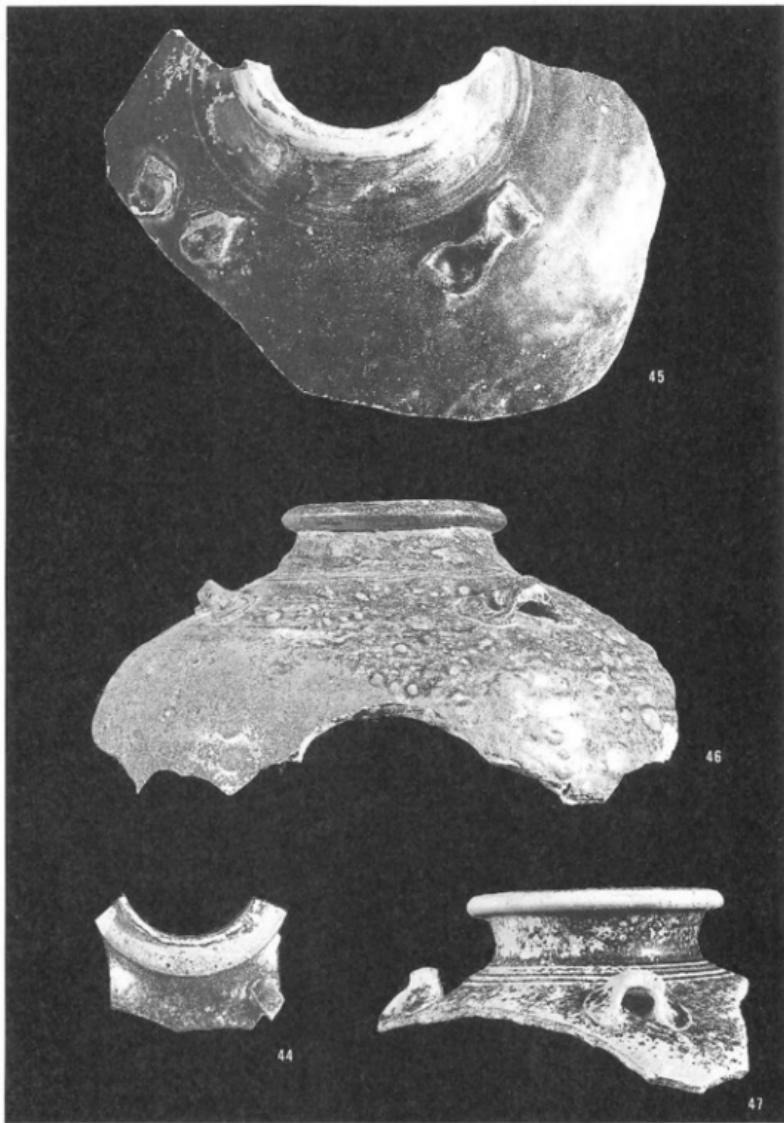
PL. 32 舶載陶磁器



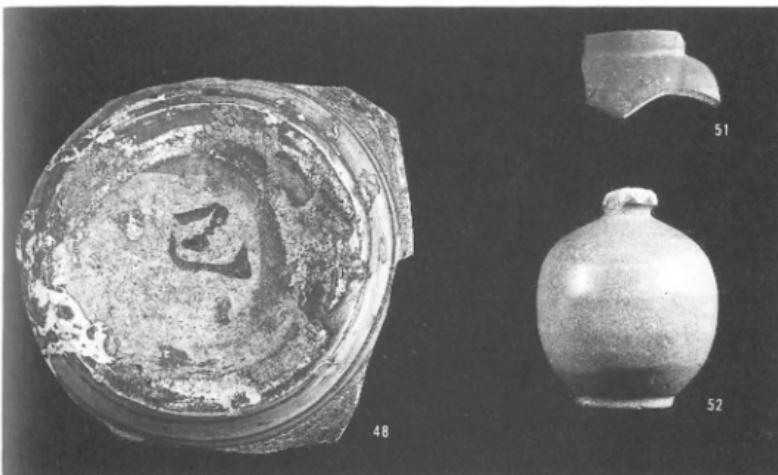
PL. 33 船载陶器



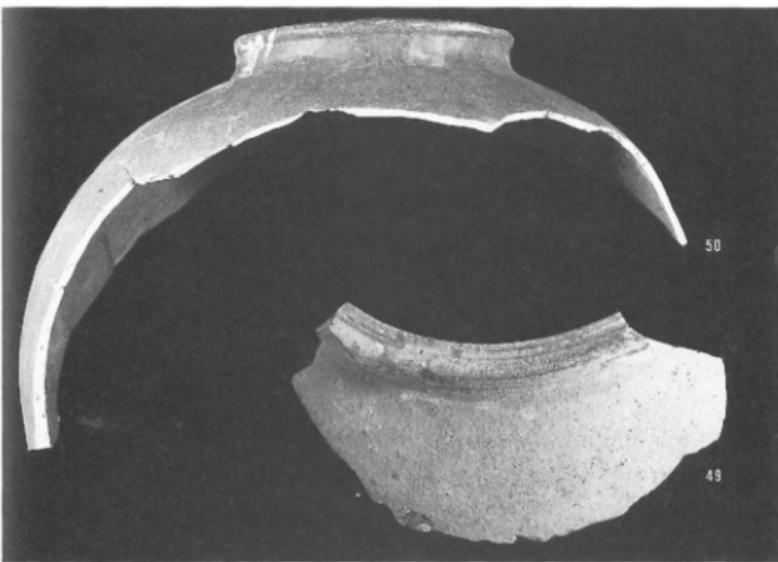
PL. 34 船載陶磁器



PL. 35 舶載陶磁器



PL. 36 舶載陶磁器



## ⑦ 国産陶磁器

53 肥前系の陶器湯呑碗である。器高5.3cm、口縁径9.4cm、底径3.8cm。口縁直下は垂直に胴部を形作り、器高1/2程度から、内反しながら底部に至る。器面はヘラナデによる調整痕が残る。高台置付け部分は、ヘラによる面取りがなされる。施文の染付けは、梅笠文である。釉色は内面と底部を除く外面に及び、貰入がはいる。胎土は砂粒を含まず灰色で精良。焼成はやや不良。釉調は淡茶褐色を呈す。

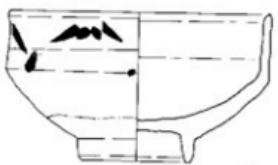
54 肥前系の陶器高台碗（くうわんかわん）である。器高6.5cm、口縁径11.6cm、底径4.5cm。口縁直下に1本の沈線が巡る。見込み部分には目跡が3点残り、砂粒も付着する。高台の長付け部分はヘラによる面取りがなされる。施釉は長付けを除く全面に及び貰入する。置付け部分は施釉後の釉ハギである。施文は青白の彩釉である。胎土は黄褐色で若干砂粒を含む。釉調は黄褐色を呈す。

55 肥前系の京焼風丸碗である。器高7.6cm、口縁径10cm、底径5cm。胴部が立ち上がった器形で、成形も薄作りで丁寧な仕上げである。胎土は気泡と黒い粒子を含む。焼成は不良である。施釉は全面に及ぶが、高台の置付け部分は釉ハギである。釉調は淡黄緑色を呈す。

56 肥前系の唐津刷毛湯呑碗である。口縁部分が1/4残存し、復元を試みた。器高6.3cm、口縁径11.3cm(復元径)、底径5cm。器面はヘラによる整形痕が明瞭にのこる。胎土は灰白色で、黒粒子と気泡を含む。焼成はやや良好。施釉は全面に及ぶも置付けは釉ハギ。釉は内外面にハケで白化粧土を螺旋状に施する。釉調は黄茶褐色を呈し、器面には一部に貰入がみられる。

57 肥前系の染め付け碗蓋である。口縁部の一部を欠損しているが、ほぼ完形品。口縁径9.7cm、器高3.1cm、底径4.3cm。器面内縁には縁文様に幾何文が、また見込みには一条の推線と松文が呉須で描かれている。また縁文は呉須をはじく。器外面は松と鳥文で、高台には2本の推線が巡る。また高台裏には「太明年製」の文字がみられる。胎土は精良、焼成も良好。釉調は地色が乳白色を呈す。18世紀の広東形碗ないしは端反り形碗の蓋であろう。

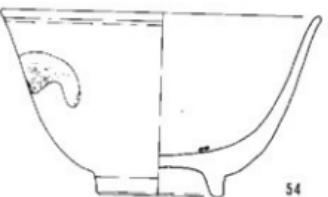
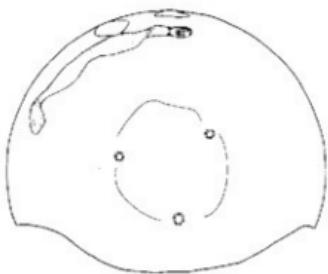
58 肥前系の染め付け碗蓋である。口縁径9.5cm、器高3cm、底径4cm。器面内縁には縁文様に雷文が、また見込みには一条の推線と花卉文が呉須で描かれている。器外面は複雑な花卉文で覆われる。高台裏には変字形が記されている。胎土は精良、焼成も良好。釉調は内外面とも地色は白濁し“窯泣き”が見られる。18世紀後半～19世紀前半頃のものと思われる。



53



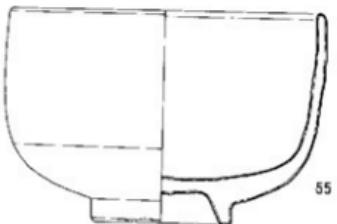
56



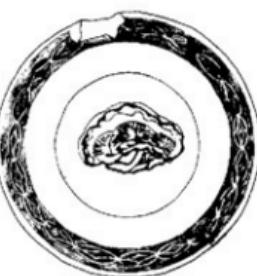
54



57



55



57



Fig. 34 国産陶磁器① (1/2)

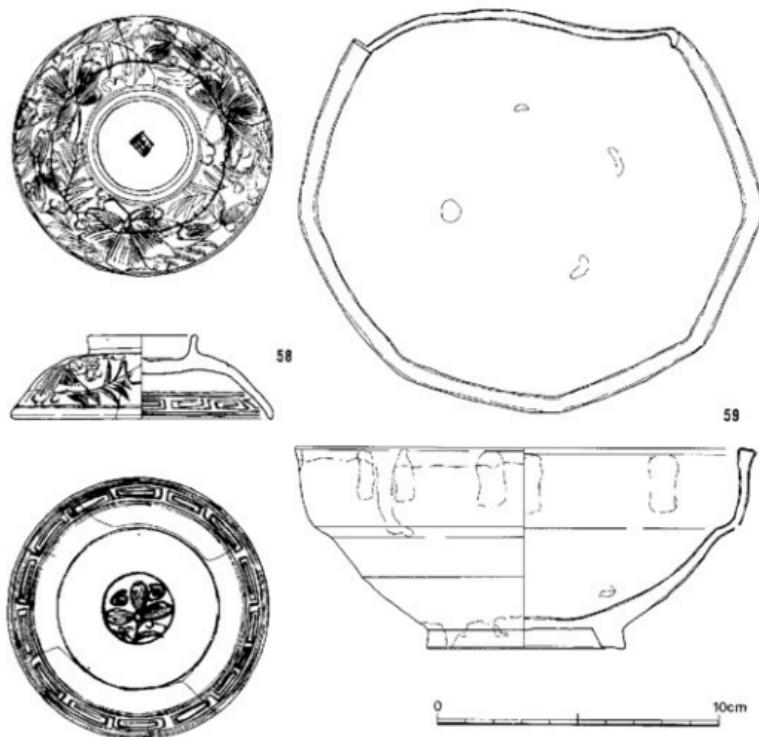


Fig. 35 国産陶磁器② (1/2)

59陶器の八角鉢である。口縁の一部を欠損するも、ほぼ完成品に近い。器高7.2cm、口縁径16.5cm、底径7.1cm。器高の1/2程度の位置に、ツマミによって形成された八角の上部は、垂直な立ち上がりをみせ、下部は緩かに内反しながら底部へとそぼまる。見込み部分には胎上目が4点付着している。高台は疊付け端部分が面取り、裏部分はケズリを施され、釉もかからない。胎土は黒い粒子を含む。施釉は濃緑色の釉を流しがけし、口縁部分にはさらに施釉が施され、光沢がでている。釉調は緑灰色を呈す。

61肥前系の染め付け八角皿である。

口縁部に若干の欠損があるものの、ほぼ完形品。口縁径13.1cm、器高3.9cm、底径7.4cm。高台は蛇の目凹形高台で、釉ハギ部分に胎土目が3点付着する。器の内壁面の縁文様は雷文様を挟んで、上下に2本づつの線文を呉須で描く。器面は見込み部分を含めて海浜風景を描き、器面の外側面には底部を挟んで宝文が呉須で描かれている。胎土は白色で緻密。焼成は良好。施釉は透明釉の2度掛け、釉調は淡乳灰色を呈す。

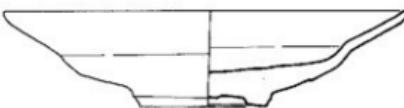
60肥前系の折り縁皿である。ほぼ完形品。口縁径14.4cm、器高3.5cm、底径4.5cm。胎土は精良。施釉は透明釉と銅緑釉の混しがけ、一部に貫入がみられる。底部は無釉。釉調は淡緑灰色を呈す。見込み部分と高台裏には砂土目がそれぞれ4つ付着している。16世紀末～17世紀前半のものと思われる。

◎鉢類。

62肥前系の摺鉢である。器形の1/2が残存し、復元を試みた。復元口縁径10.4cm、器高8cm、復元底径9cm。外側へ折り返され凸帯が口唇部に集約し、玉縁状を呈す。底部は糸切底である。卸し目は7条を1単位とし、半時計回り施されている。また底部には目跡が3ヶ所のこる。胎土は気泡を含む。焼成は良好。釉調は暗茶褐色の鉄釉が施されている。18世紀後半のものと思われる。



61



62

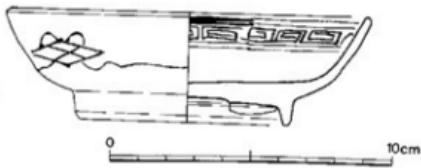
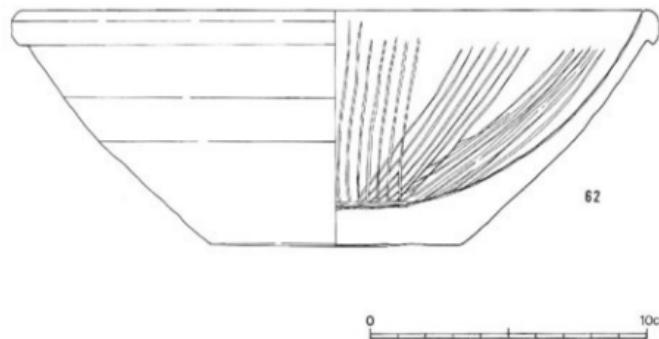
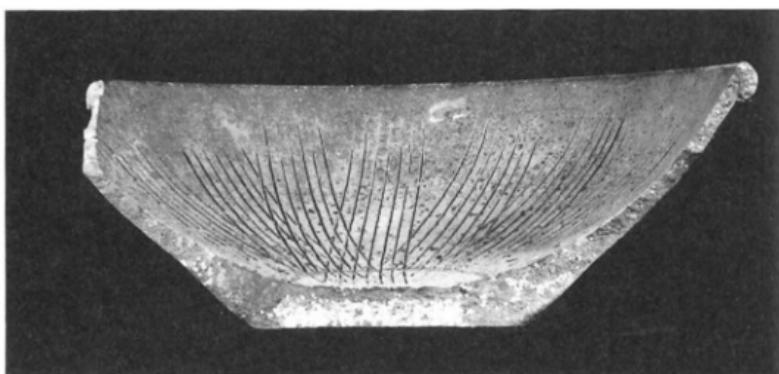


Fig. 36 国産陶磁器③ (1/2)



PL. 37 国産陶磁器

Fig. 37 国産陶磁器(4) (1/2)



#### ⑧ 国内産の陶磁器類に関する考察

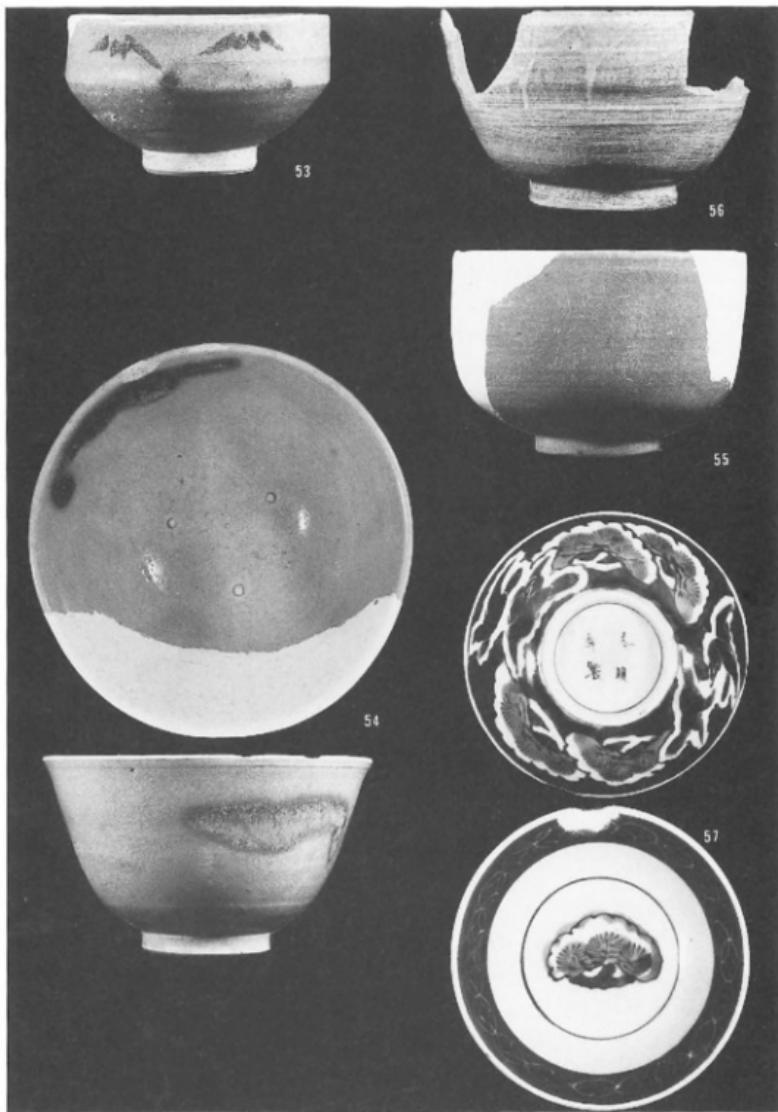
当該遺跡出土遺物に関しては、繩文式土器～須恵器にいたるまで、その痕跡をたどることができ、近世陶磁器としては、肥前系陶磁器類の唐津や、有田産の碗、皿類などが出土し、それらの制作年代は、16世紀末から幕末までの時間幅をもっている。<sup>(700)</sup> 即ち、土器類から陶磁器類といった日用什器を例にとれば、その使用されたものに、ある一定期間の“空白”が存在するようと思われる。ここで想起されるのは、文永の役において、島民の多くが、元軍によって虐殺され、数百年間にわたって、鷹島に住む者はいなかったという伝承である。当該地区は自然に湾曲した天然の良港として、漁労民が住居を構えるには最適の地であり、かつまた小規模な

がら河川の流れもある。その地にあえて“時間の空白”があるとすれば、やはり前述の伝承が正当なものであった可能性が強い。ただこれは当該地区のみの判断によるものであり、あるいは他の場所ではその“時間の空白”をうめる日用什器の出土がありうるかも知れず、即断は許されないが、こういった遺物の出土状況をみると、本島における歴史的な事実と符号する点が多くあり、非常に興味深い。

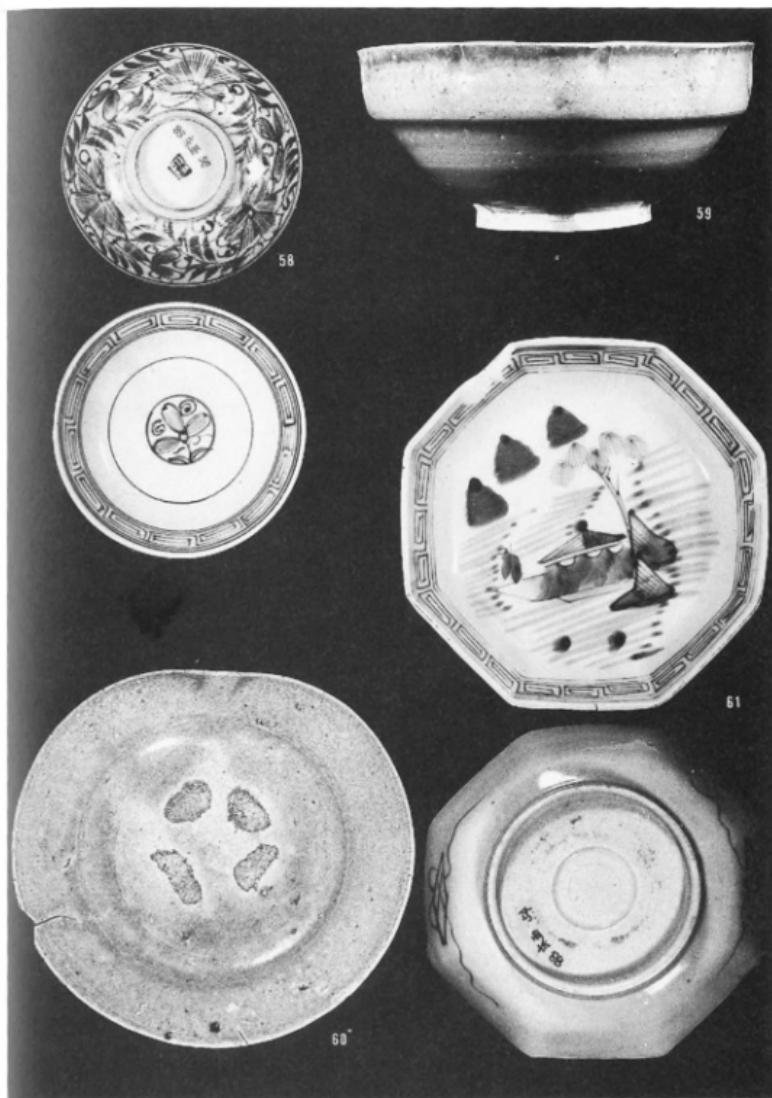
#### 参考文献

- (1) 三上次男「陶磁貿易史研究（上）」中央公論美術出版 S 62, 10  
『いわゆる『呂宋壺』と貿易商品としての性格』
- (2) 杉山 洋「東アジアの考古と歴史（下）」同朋社 1987, 11  
『褐釉系陶器の受容と展開 四耳壺を中心として』
- (3) 松岡史、前田軍次、吉岡完祐、前田恵美子, MUSEUM  
No.327 1978, 「九州伊万里湾発見の褐釉壺について」
- (4) 東背振村教育委員会「靈仙寺跡」1980
- (5) 国立中央博物館「新安海底文物」1977
- (6) 鷹島町教育委員会「床浪海底遺跡」1984
- (7) 有田町史編纂委員会「有田町史」古窯編 S 63, 3
- (8) 大橋康二「肥前陶磁」ニューサイエンス社 H 1, 10
- (9) 上ノ国町教育委員会「上ノ国漁港遺跡」

PL. 38 国産陶磁器



PL. 39 国産陶磁器



PL. 40 国産陶磁器



PL. 41 国産陶磁器



PL. 42 国産陶磁器



## 2 陶 器

### ① 磚 (Fig.37~Fig.39)

方形をした煉瓦状の焼き物である。製作にあたっては数種類の型枠がたったものと思われ、かなり大量に作られた形跡がある。これまでの数回の発掘調査や探集資料の中でも一定の量を占める資料である。形状によって数種類に分けられる。

I類 幅が8cm前後と挟く、厚さが6cm程と方形に近い厚みがあるもの (1, 2)

II類 幅が15cm以上で、厚さも5cmから6cm程のもの (3~6)

III類 幅が10cmから15cmの中間で厚みが3cmから4.5cmの厚みを持つもの (7~8)

比較的のろいために完形品の資料がないが、重量はI類が1kg, II類が2kg, III類で2.5kg程度になるものと推定される。

これらの資料は、基本的には船底に多量に置いて船体のバランスを取るための機能を考えられるが、4のように多量のシックイが付着する例も多く、パラストとしてばかりでなく船内での塗装の材料としても利用されたであろうとの数示を得た。

### ② 瓢 (Fig.43~18)

型造りの日乾し瓢であろう。上部を欠損しているため全体の形状が不明であるが、直径が36cm程度、厚さ5cm程の丸型の瓢になるものと思われる。色調は全体的に灰色で胎土には2~5mmの砂粒と5mm程のスコリア状の粒子が混じる。内部には指頭痕が明瞭で、またススが多量に付着している。

## 3 石 製 品

9~11は石弾であろう。これまで7個が出土しているが、大きさによってやはり数種類に分けられる。

I類 直径が8cm前後で重量が800g程度のもの

II類 直径が11cm前後で重量が1.7kg程度のもの (9, 10)

III類 直径が15cm前後で重量が3kg以上になるもの (11)

石弾は中国春秋時代以後、戦闘に使用される最もポピュラーな抛石机と呼称される武器の弾である。反動を利用して遠くまで石を飛ばす仕掛けであるが、特に元代のそれは「回回砲」と呼ばれた強力な武器であったようで、至元十一年(1274年)中國国内において使用された際の記録に「…威力很大，“机器”声震天地…」とか、あるいは「…一砲中其一樓，声如雷震…」などの表現が見える。石が飛んで来るということの他に、音の威力によって恐怖感が倍増したものと思われる。ここで図示した資料は全て玄武岩の可能性が高いという教示を受けた。石材の問題については後述する。

12は玄武岩製で丸底を呈する。内部に直径4.5cm、深さ4.5cmの穴を抉り、上面は平坦に仕上げる。2個程出土しているが、用途不明。

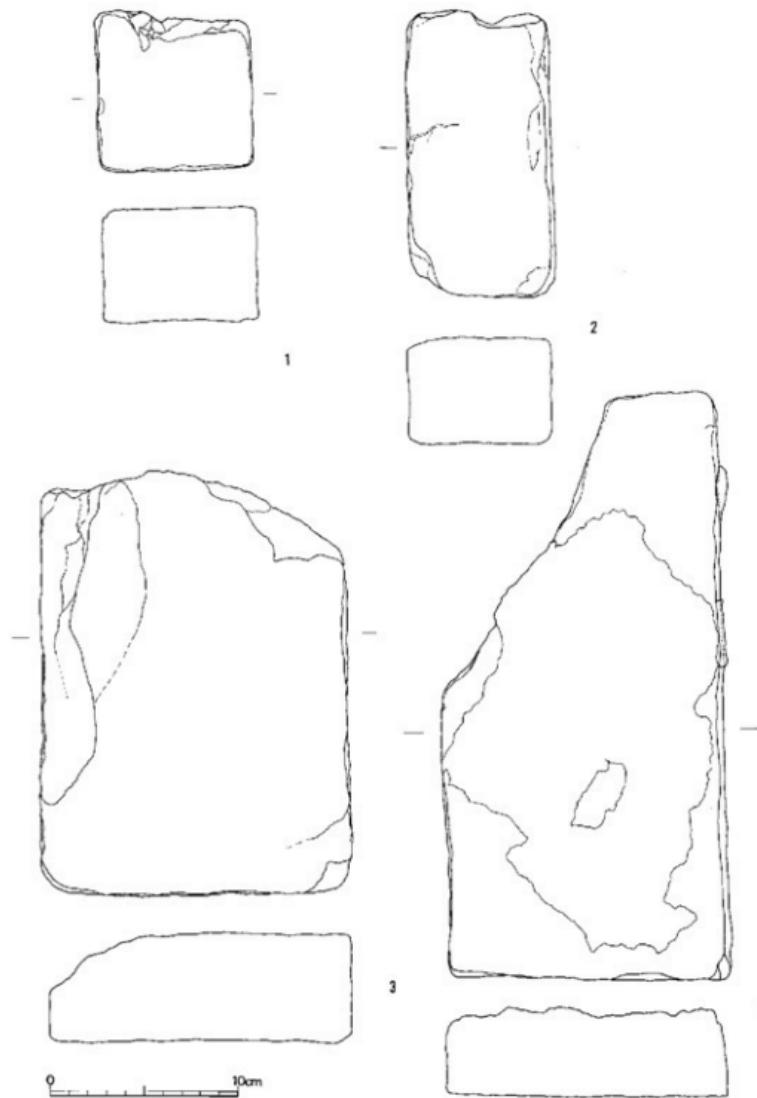


Fig. 38 碩実測図① (1 / 3)

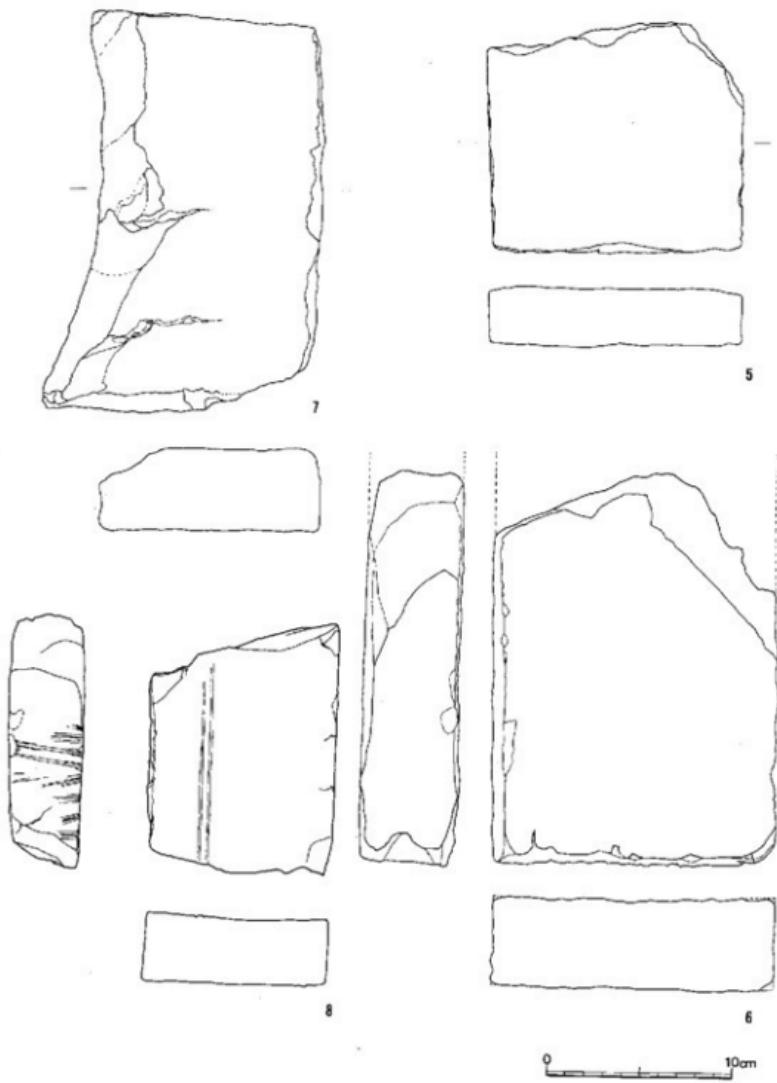


Fig. 39 石実測図② (1/3)

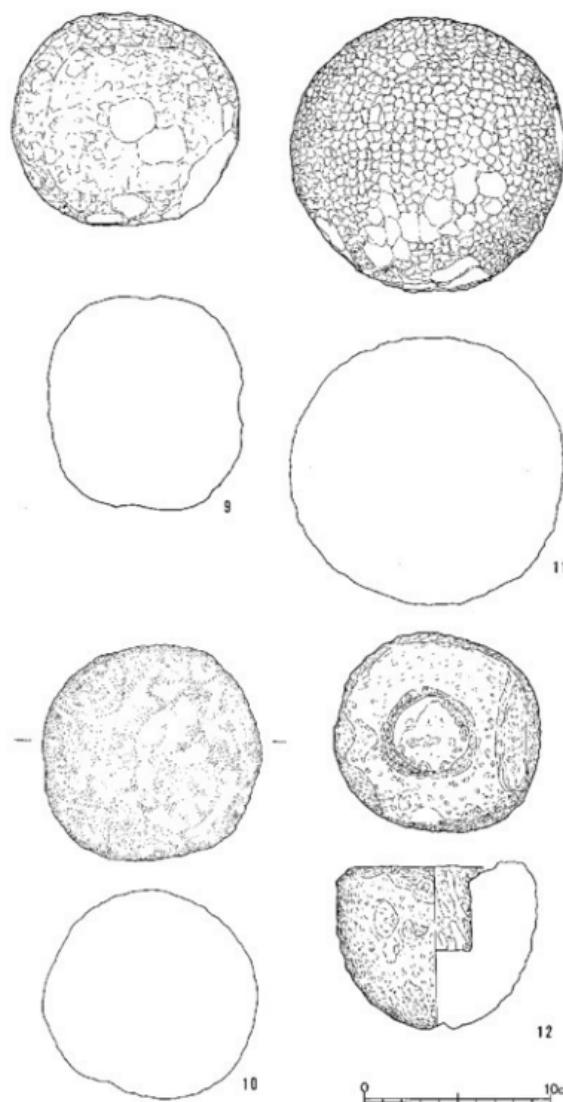


Fig. 40 各種石製品① (1/3)

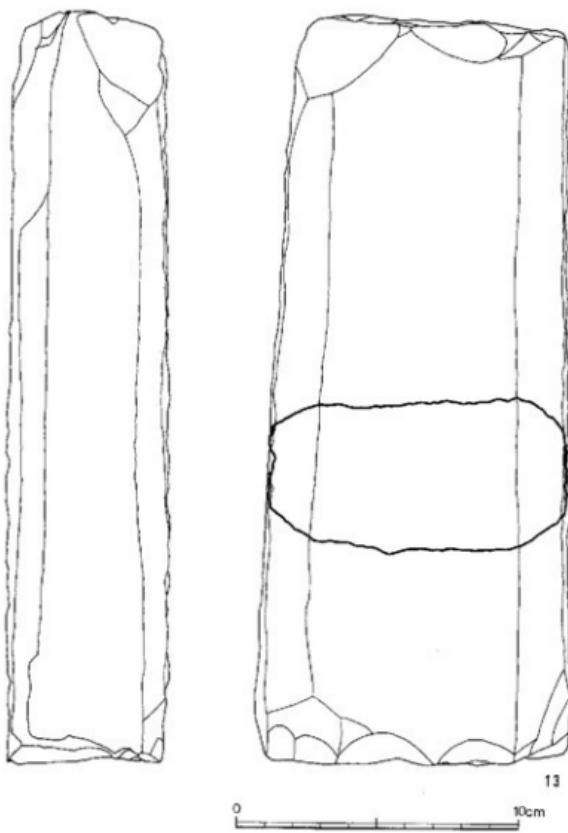


Fig. 41 各種石製品② (1/4)

13は破石である。中程で毀損している。残存長さは52cm、幅は20.7cm、厚さは10.4cm、重量は25.4kgを計る。四隅を面取りして形状を整える。色調は灰白色の花崗岩で石英と長石を多量に含む。この種の花崗岩は唐津付近に産する花崗岩とは異質であるとのことであり、舶載品の可能性が高い。

14は片口の乳鉢である。1/3程欠損している。直径は26cmで底径は20.6cm、器高は14.3cmである。上面に2か所の耳が付く。これまでの調査や表探によって3個が出上しているが、耳の取り付け位置から数種類に分類が可能である。韓国新安海底から出土した資料に酷似する。<sup>註3</sup>

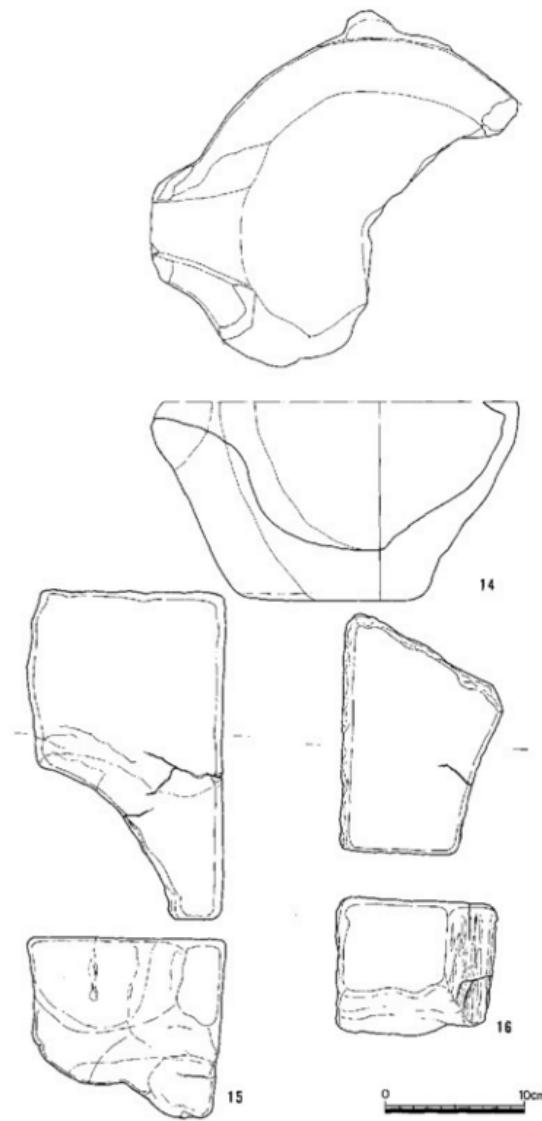
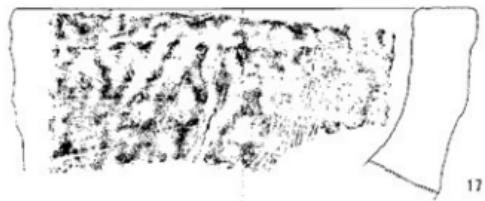
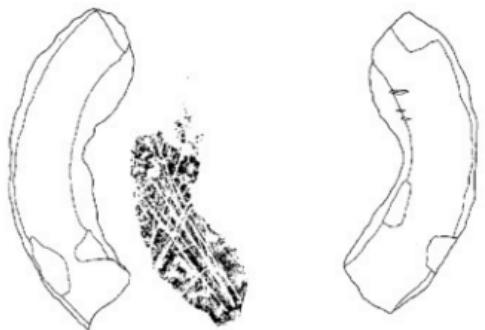


Fig. 42 各種石製品③ (1/4)



17



18

0 20cm

Fig. 43 各種石製品③ (1/6)

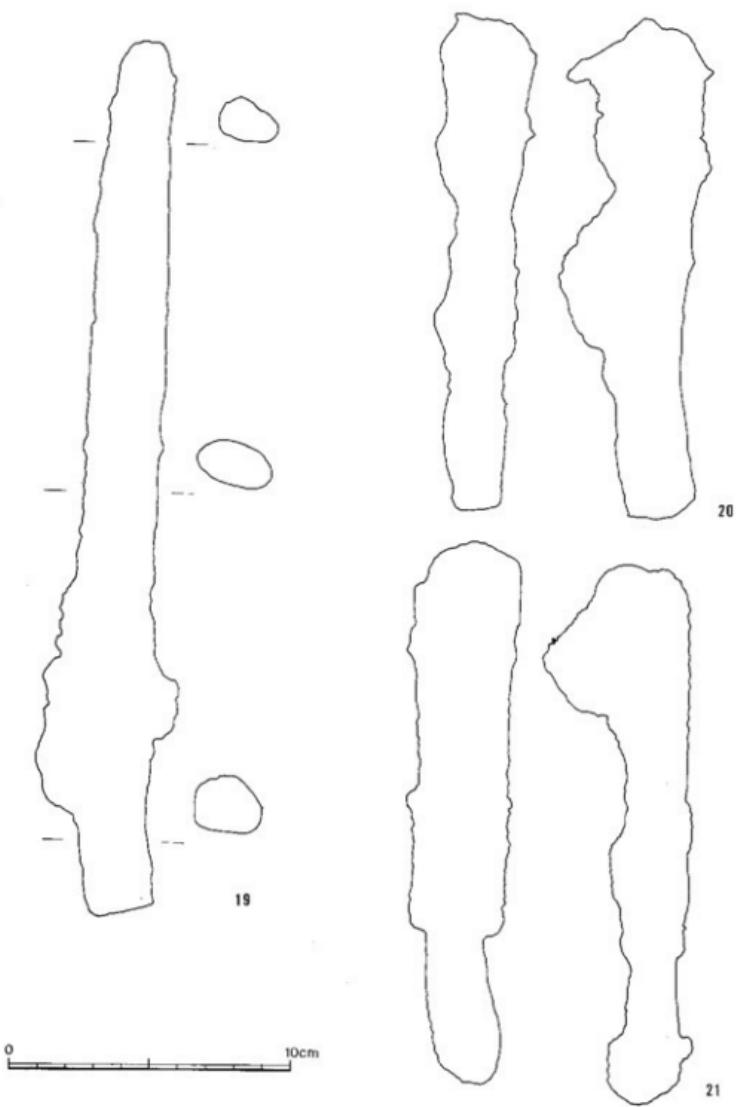


Fig. 44 鉄製品実測図 (1 / 2)

色調は灰白色で玄武岩製であるが、この種の材に良く似たものが巣岐で産するということであり、産地の特定には慎重を期する必要がある。

15, 16は石製の壺である。大部分が欠損している。目の荒い砂岩を利用している。共に全面にノミによる加工痕が顕著で、内面にはススが付着する。

17は石臼であろう。底部を欠損する。復元径は口径が50cm前後であろう。器表面にはノミ加工痕が観察されるが、ローリングのため不鮮明になっている。目の細かい砂岩を利用しているが、この種の砂岩は炭田地帯に産するものであるらしい。鷹島を含む北松浦郡一帯は且つて有数の炭鉱地帯であり、この石臼が元軍の所持品ならやはり現地調達の可能性を考える必要がある。

#### 4 金属製品・その他の遺物

19, 20, 21共鉄製品である。何れも鏝盤が大量に付着しており、原形が定かでない。

19は長さ62cm、幅5cm、厚さ6cmほどの鉄製の塊であるが、X線写真によると木質の鞘を持つ利器であることが分かる。柄の部分には茎が見られる。現在奈良国立文化財研究所で脱塩と保存処理中であるので詳細はまだ不明である。21もX写真によると、幅広の刃を持つ利器であることが分かったが、その後の検査によって近代の鉈であることがわかった。海中からの出土遺物は時代的に多岐にわたることを前述したが、特に鉄製品は錆びがひどく、原形を類推することすら難しい。しかも、通常の保存処理の前にまず脱塩処理の必要があり、処理施設が無い場合の遺物引き揚げには十分の注意を要する。

22は湖州鏡である。同鏡は平成元年度の事前確認調査終了後、港湾改修工事に伴う周辺海域の堆土採掘中に発見されたもので、発見後、同町教育委員会に届けられたものである。面径10.6cm、重さ180gで完形。保存状態も良好でかなり早い時期に海底下に埋没したためか、腐食は進行していない。稜花形で鏡背には紐の右横に鋲出された方格内に2行にわたって紀名がある。紀名は『湖州真石家念二叔照子』で、『湖州』は产地、「石家」銘鏡者を表わす。产地は湖州(現在の浙江省吳興浙路)で、いわゆる後漢中葉以来の銅鏡造の中心地である。特に湖州鏡はその中心的な役割を担っており、多量に製造されその販路も広域にわたっている。

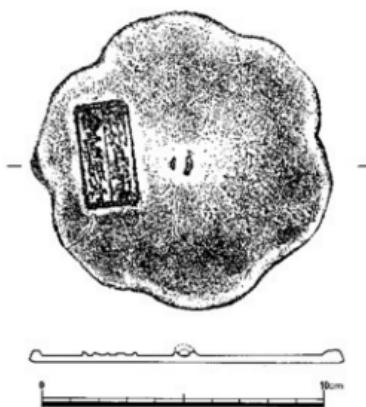


Fig. 45 湖州鏡実測図 (1/2)

従って宋代の紀名銕としては、湖州銕がわが国で最も出土例が多い宋銕といえよう。また器形には葵花形、方形、盾形、亜字形、長方形があり、有柄のものもある。中国大陆での出土例は浙江省、四川省に多く、江苏省、江西省、福建省、広東省、広西壮族自治区にも発見例があるが、北方地域の出土例は少ない。わが国では伝世銕も含めかなりの数が検出されており、本遺跡周辺地域での出土例もある。宋銕の金属成分は銅67.88%，錫13%，鉛7.63%，亜鉛8.24%（宋代初期の湖州素文銕例）であり、漢唐以来の銅鋳造の合金成分比率とほぼ一致している。<sup>註10</sup>これが変化を示すのは宋代末の湖州画像八稜鏡以降である。さて、本遺跡で宋代の銕が出土したことは重要な意味を持つ、即ち弘安の役において鷹島周辺で覆滅した元軍の一方の主力部隊は、南宋降兵で編成された江南軍であり、想像を逞しくすれば伝世銕を携えた南宋兵士の持ち物である可能性も否定できない。本遺跡は遺構面が確認されておらず、いわゆる攪乱された遺物散布地帯といえることから、本遺物を確定するだけの資料に欠けるが、周辺海底からは数多くの遺物が出土しており、あえてここに参考資料として掲載する次第である。

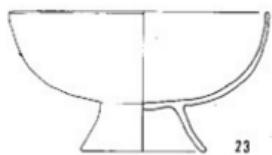
なお、現在長崎県下において、湖州銕は南松浦郡若松町山王神社遺跡、対馬峰町海神社、<sup>註11</sup>同上県町神御魂神社、同上対馬町足見遺跡、同原町多久頭魂神社、東彼杵郡波佐見町川棚川河川敷で発見されている。殆どの資料は祭祀関係の色彩が強い。

23は銅製杯で、台形状に広がる高台から口縁部にかけて大きく内湾しながら立ち上がる。口径9.3cm、器高5cmでハの字形に広がる高台は径4.5cm、高さ1.5cm、器壁の厚さは2mmである。仏具と思われるが不明。24は鉛製の杯身である。毀損しているが、復元した計測値は口径8.6cm、器高5.7cm、高台径は3.6cmである。口縁外側に一本の沈線を巡らす。高くハの字形をした高台から口縁にかけて大きく内湾して立ち上がる。

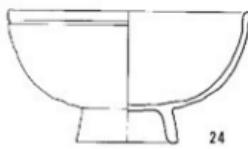
25は土製沈子である。長さ6.2cm、幅4.6cm、厚さ5cm、重量123gを計る。長辺中央部に幅11mmの緊縛用の溝が走る。色調は桃色で胎土に砂粒を多く含む。

26は布目の熨斗瓦である。平瓦を転用している。現存長は長さ11.5cm、幅7.7cm、厚さ1.6cmと薄くて小型である。凸面は繩席のタタキで、凹面には3cm平方に筋縫平行28本；端縫平行29本の布目痕が付く。灰白色で全体的にかなりローリングを受けている。床浪港の北側上方の三里今宮神社には、松浦家の始祖である松浦久を祀った「広久山福寺」があったとされている。布目瓦が甚かれてもおかしくない。

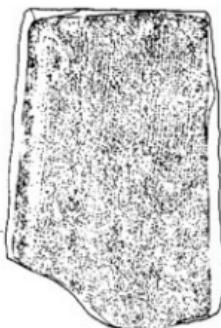
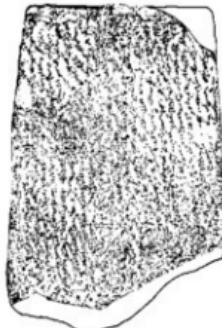
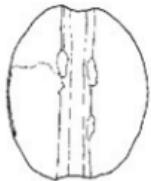
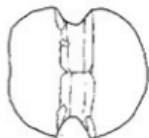
27は四二寸角上覗で、完形品である。長さ四寸（12cm）、幅二寸（6cm）。全体的に覗側は薄く、高さ1.2cm、墨道（陸）は覗側から3mm程度掘り込まれている。また墨池（海）は覗側から最深で7mm程度掘り下げられ、幅2.5cm程度の広さを有する。覗側上面には装飾として爪形のノミ跡が見られる。覗底には線刻により「寛永八月吉日」の記銘が掘り込まれている。色調は淡赤褐色を呈し、石質は山口県産の赤闇石と思われる。四二寸角上覗は和覗の標準寸法に照らしたもので、江戸時代以降の庶民が、日常に使用した文房具であり、覗底の線刻も製作年と考えてよからう。ちなみに赤闇覗の創業は古く、初代大森次郎衛門芳清から



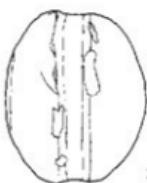
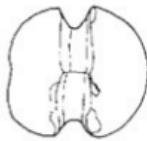
23



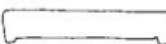
24



26



25



27



0 10cm

Fig. 46 その他の遺物 (1/2)

十三代400年続いた。また歴史上では二代大森頼澄が元和三年(1617年)に、三代頃元が寛永<sup>20</sup>二十年(1643年)に大掾の宣旨を受けている。

#### 5 木製品

C-10区の2層から出土した船材である。両端部を欠損しており、現存長が120cm、厚さ5cm、幅15cmを計る。一木作りで、湾曲部には6か所に釘跡があり、内<sup>2</sup>2か所には釘が現存する。  
和船ではないが、元寇とは無関係の船材であろうとの教示を得た。現在保存処理中であり、樹脂鑑定と年代測定は未実施である。

註1 山形 欣哉氏教示

註2 陶尚 又編「中国古代兵器図冊」1986

註3 文化広報部・文化財管理局「新安海底遺物(資料1)」1981

註4 鎌田泰彦氏教示

註5 田中重雄「日本の美術42号」1969

註6 同崎誠治他『対馬・巻岐の文化財』『仏教藝術』95号所収 毎日新聞社 1974

註7 宮崎貴夫氏教示

註8 鹿島町郷土誌

註9 名倉鳳山「日本の硯」日賀出版 1986

註10 孔祥星、劉一曼(著)・高倉洋彰 他(訳)「中国古代銅鏡史」海鳥社 1991

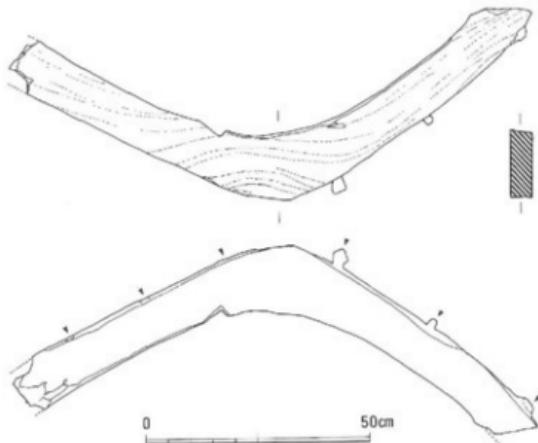
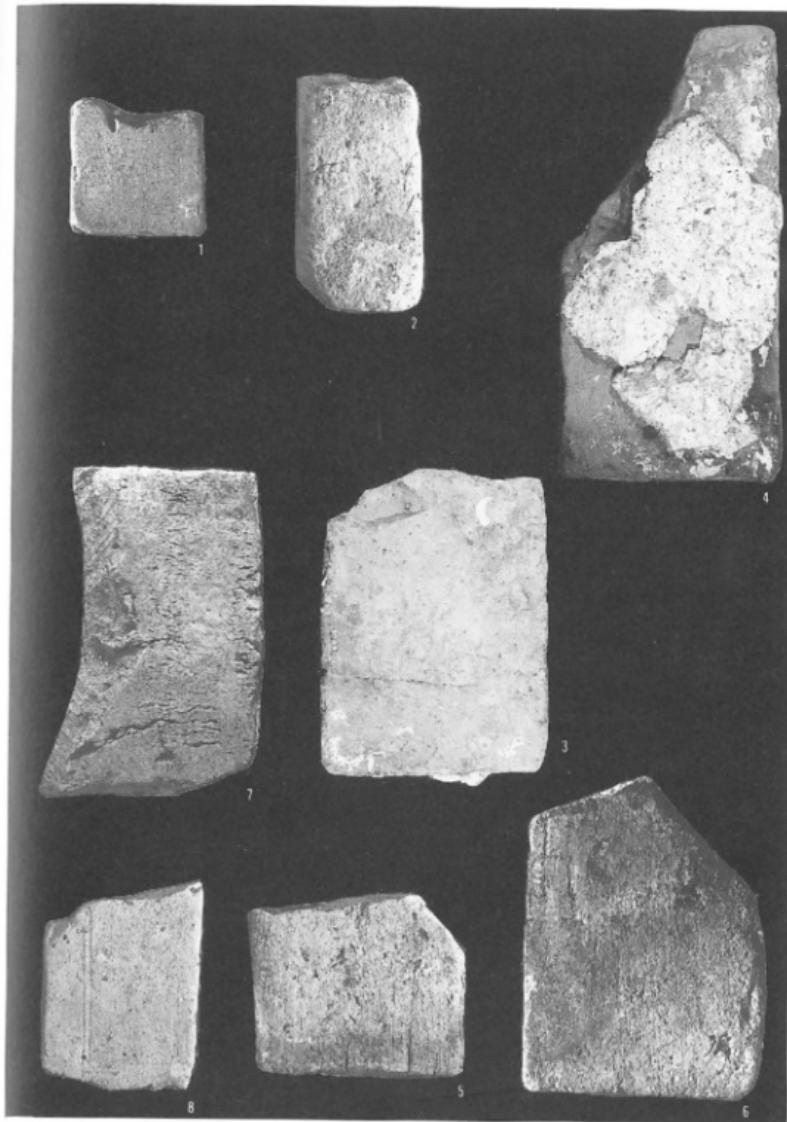
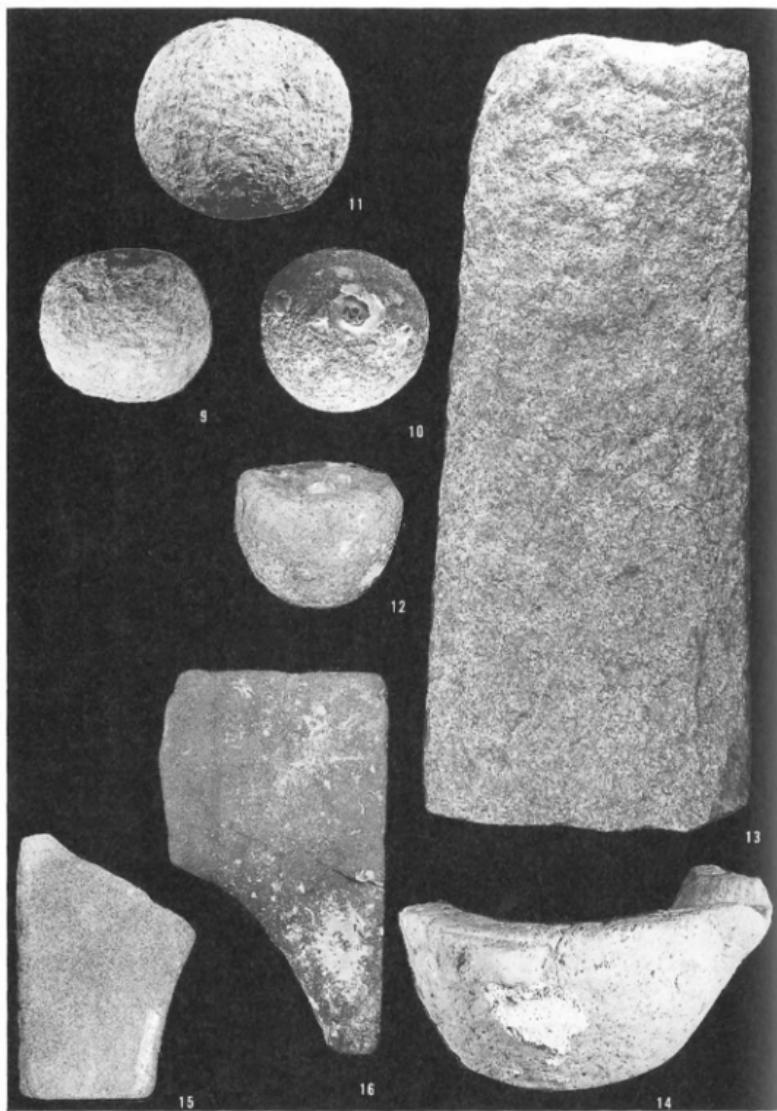


Fig. 47 木製品実測図 (1/10)



PL. 44 各種石製品



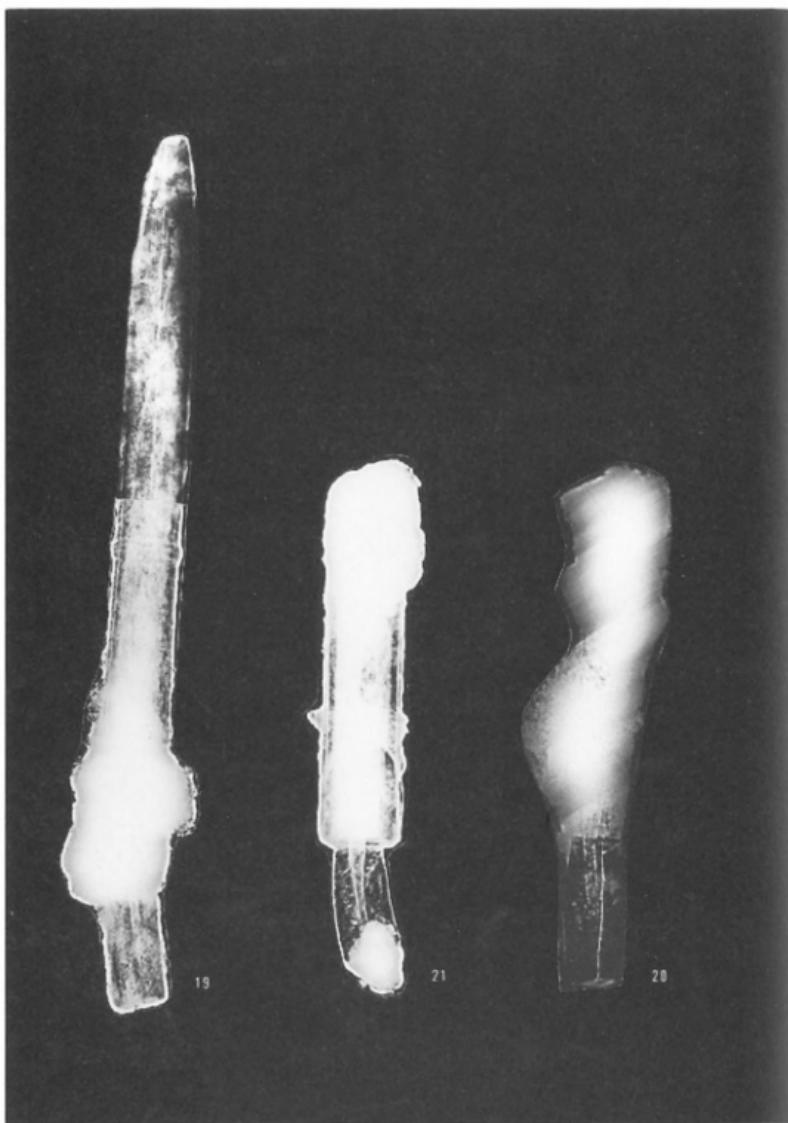
PL. 45 石臼(上) カマド(下)



17



18

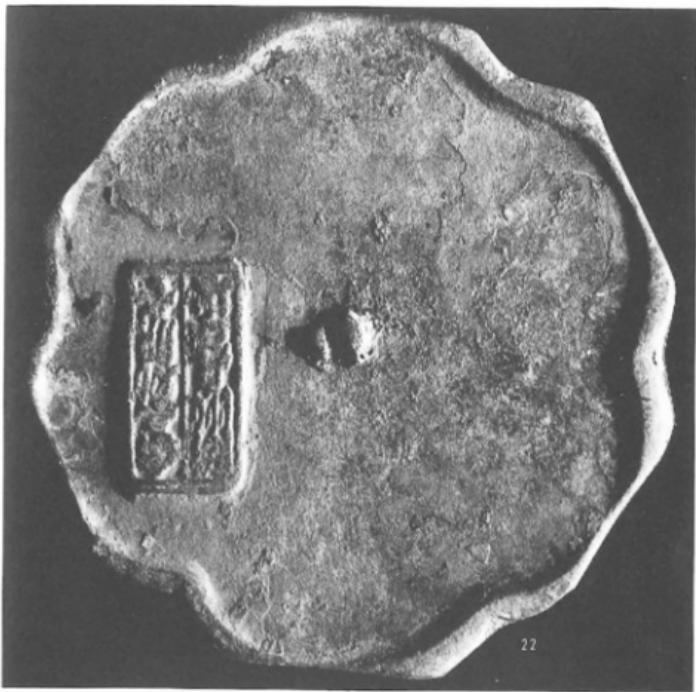


19

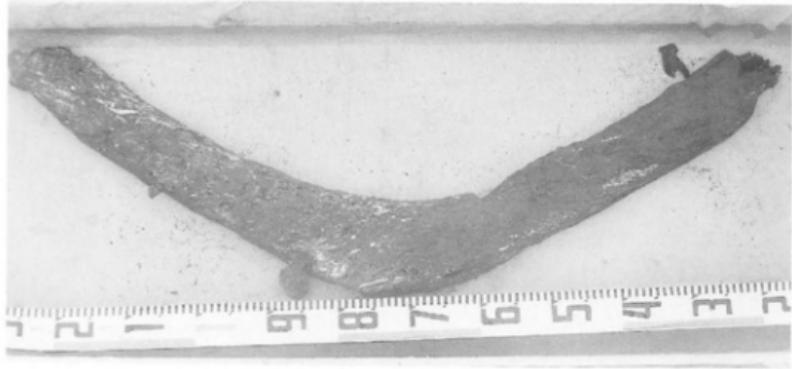
21

20

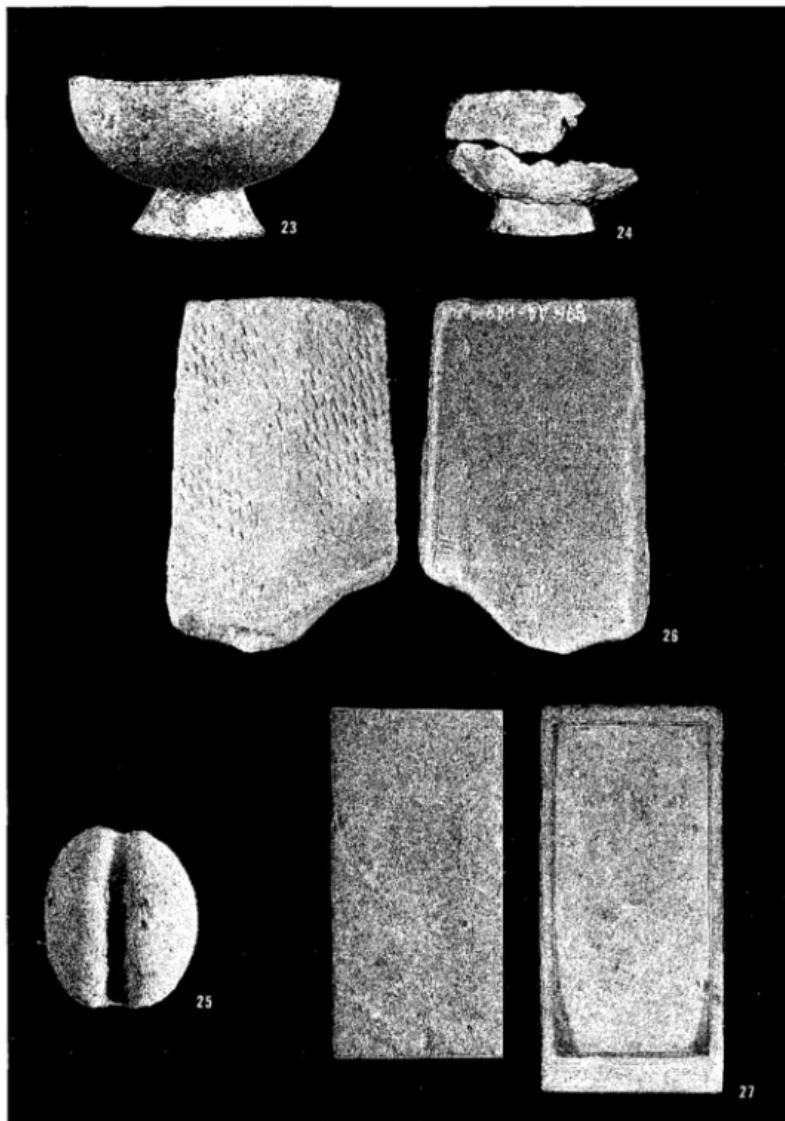
PL. 47 湖州鏡



PL. 48 木製品



PL. 49 その他遺物



PL. 50 石彈



PL. 51 銅碗



PL. 52 鐵製品



# 長崎県鷹島海底遺跡出土の人骨

松下 孝幸\*・分部 哲秋\*・佐伯 和信\*

【キーワード】：長崎県、時代不明人骨、前頭骨、腓骨、cribra orbitalia

## はじめに

鷹島海底遺跡は長崎県北松浦郡鷹島町の床浪港の地先公有水面に所在する周知の海底遺跡である。鷹島町の南端に位置する床浪港では以前から剣などに壺などの遺物がかかり、元冠の遺跡としてその名前が知られている。1988年と翌89年に床浪港の護岸工事に伴って、工事にかかる地点の発掘調査が行なわれ、1989年の調査で人骨が発掘された。人骨の保存状態は良好であるが、後述しているように、所属時代は不明である。出土量が少ないので、人骨の特徴からその所属時代を示唆することもできなかったが、性別・年齢は推定することができたので、人骨の残存部分やその推定結果を報告しておきたい。

## 資料

本遺跡の1989年の調査で2点の人骨が出土した。人骨は図2に示すとおり、前頭骨と右側腓骨である。

(Tab. 1 資料 List of skeletons)

部位	性別	年齢	備考
前頭骨	女性	壯年	
腓骨	男性	不明	右側

人骨はすべて成人骨で、骨質は比較的しっかりしており、磨滅も比較的少なく、保存状態はきわめて良好な方である。

前頭骨は女性の前頭骨、腓骨と推測されるので、今回得られた人骨は2体分の人骨である。なお、各骨から推測した性別・年齢は表1のとおりである。

これらの人骨は、海底の堆積物中の「II層」から得られたもので、この層は縄文時代から江

\* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI

Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine

(長崎大学医学部解剖学第二教室)

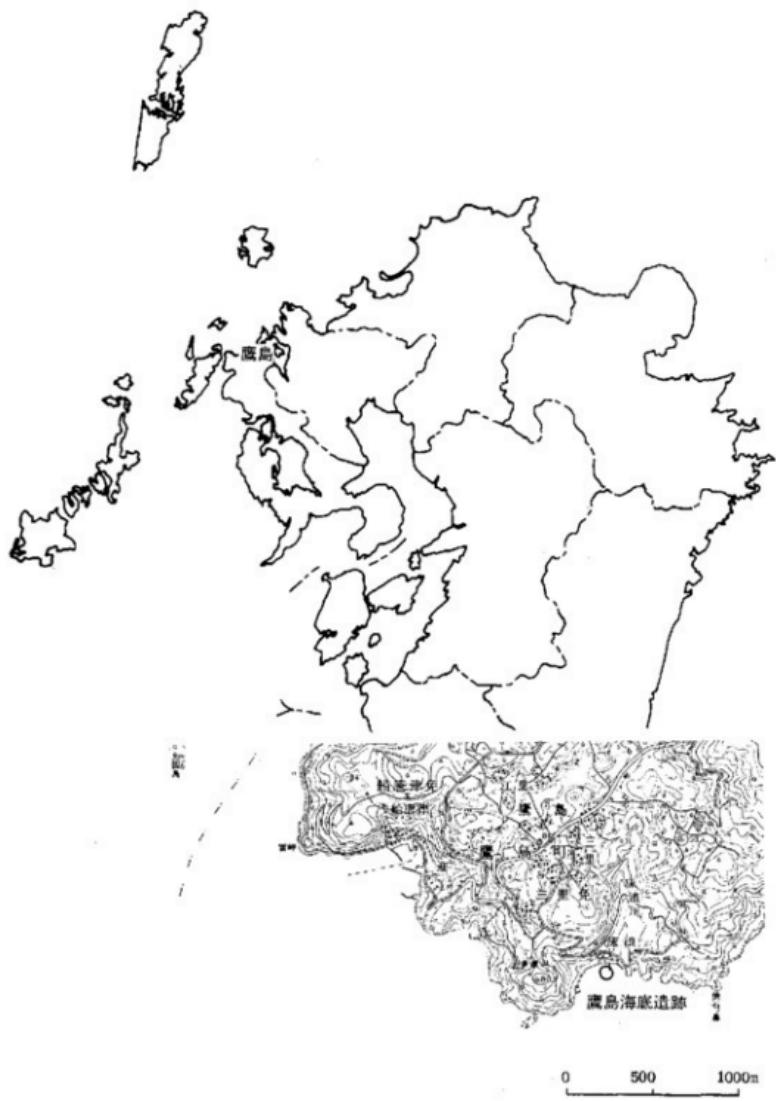
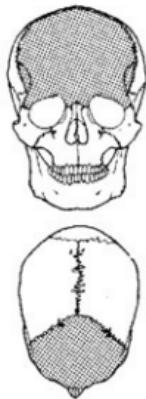


Fig. 48 遺跡の位置  
 (Fig. 48. Location of the Takashima site, Takashima-Cho, Nagasaki Prefecture)

戸時代までの遺物を含んでいることから、本人骨はこの両時代の間のいずれかの時代に属するものと思われるが、狭い範囲で特定することはできなかった。従って、本人骨の所属時代は現時点では江戸時代以前ということになる。

また、人骨の特徴から所属時代をある程度推定できないか考えてみたが、特定できるほどの特徴をこれらの人骨に見い出すことはできなかった。

なお、計測方法は、Martin—Saller (1957) によった。



前頭骨（女性・壮年）  
(Frontal bone, young adult female)



右側腓骨（男性）  
(Right fibula, male)

Fig. 49 人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig. 49. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

## 所 見

### 1. 前頭骨（女性）

ほぼ完全である。前頭結節は良く発達しており、前頭鱗も膨隆しており、眉上弓の隆起は弱い。冠状縫合はまだ閉鎖していたものと推定される。

また、眼窩上壁には内側とも cribra orbitalia が認められる。

性別は上述している特徴から、女性と推定した。年齢は冠状縫合がまだ閉鎖していたものと考えられるので、壮年と思われる。

### 2. 腓骨（男性）

右側が残存していた。両端を欠損しているが、保存状態は良好である。径は大きく、やや磨滅はしているが、種も発達していたものと考えられる。

計測値は、中央最大径が16mm（右）、中央最小径は11mm（右）で、中央断面示数は68.75（右）となり、骨体は扁平である。中央周は43mm（右）で、骨体はやや大きい。

骨体の径が大きいことから、男性腓骨と推定した。

次いで、本腓骨の大きさの傾向を知るために佐賀繩文人（松下・他, 1989）、大友弥生人（松下, 1981）、二塚山弥生人（松下, 1989）および志波屋六本松乙弥生人（松下・他, 1991）との比較を行なってみた。表2に示すように、中央周は43mmで、佐賀繩文人、大友弥生人および二塚山弥生人よりも小さく、志波屋六本松乙弥生人の平均値に近い。また、中央断面示数は68.75となり、この示数值も佐賀繩文人、大友弥生人および二塚山弥生人よりは小さく、比較的志波屋六本松乙弥生人の値に近い。すなわち、本例は骨体の大きさが繩文人や弥生人に比べると小さく、扁平性はやや強い腓骨であることがわかる。

Tab. 2 腓骨計測値（男性、右、mm）

Table 2. Comparison of measurements and indices of male right fibulae

	鷹島海底 人骨		佐賀 繩文後期人 (松下・他)		大友 弥生人 (松下)		二塚山 弥生人 (松下)		志波屋六本松乙 弥生人 (松下・他)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
2.	中央最大径	1	16	3	15.33(左)	10	16.80	9	16.00	7	15.57
3.	中央最小径	1	11	3	11.33(左)	10	11.80	9	11.22	7	10.29
4.	中央周	1	43	3	46.33(左)	9	47.89	8	45.50	7	43.57
4 a.	最小周	—	—	1	43 (左)	6	36.67	3	38.67	2	35.50(左)
3/2	中央断面示数	1	68.75	3	74.11(左)	10	70.38	9	70.26	7	66.60

## 要 約

長崎県北松浦郡鷹島町の床浪港の地先公有水面に所在する鷹島海底遺跡の一部の調査が床浪港の護岸工事に伴って1988年と翌89年に実行なわれ、人骨が2点発掘された。人骨の人類学的観察と計測を行ない、次の結果を得た。

1. 人骨は1989年の調査で発掘された。引き上げられた人骨は前頭骨と右側肺骨である。人骨の保存状態は良好であった。
2. 前頭骨は壮年女性、右側肺骨は男性骨格の一部と推定した。
3. 前頭骨には cribra orbitalia が認められる。
4. 肺骨体の径はやや大きいが、縄文人や弥生人ほどではない。
5. 保存状態は良好であったが、所属時代を特定する部分や特徴を見い出すことはできなかった。この鷹島海底遺跡は元冠の遺跡として知られており、出土した人骨の中に女性の前頭骨が含まれていることから、これと関係があるかどうかが問題であったが、前述しているとおり、現時点では所属時期を特定することができなかつたので、この点についても不明である。

## 謝 辞

綱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

## 参考文献

1. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429-597.
2. 松下孝幸, 1979 : 二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山(佐賀県文化財調査報告書46) : 242-255.
3. 松下孝幸, 1981 : 大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1) : 223-253.
4. 松下孝幸, 佐伯和信, 折原義行, 小山田常一, 1989 : 長崎県峰町(対馬)佐賀貝塚出土の縄文時代人骨。佐賀貝塚(峰町文化財調査報告書第9集) : 193-228.
5. 松下孝幸, 佐伯和信, 折原義行, 小山田常一, 石田肇, 佐熊正史, 1991 : 佐賀県神埼町志波屋六本松乙遺跡出土の弥生時代人骨。志波屋六本松乙遺跡(佐賀県文化財調査報告書第103集) : 第4章 : 1-62.

Tab. 3 頭蓋計測値 (mm) (Skull)

	鷹島海底 遺 跡 女性	
9.	最小前頭幅	90
10.	最大前頭幅	113
26.	正中矢状前頭弧長	137
29.	正中矢状前頭弦長	115
29/26	矢状前頭示数	83.94
43.	上頸幅	97

Tab. 4 腓骨計測値 (mm) (Fibula)

	鷹島海底 遺 跡 男性	
		右
2.	中央最大径	16
3.	中央最小径	11
4.	中央周	43
3 / 2	中央断面示数	68.75

Human Skeletal Remains Excavated from the Takashima Undersea Site, Takashima Cho, Nagasaki Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI

(Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine)

Keywords : Nagasaki Pref., Frontal bone, Fibula, Cribra orbitalia

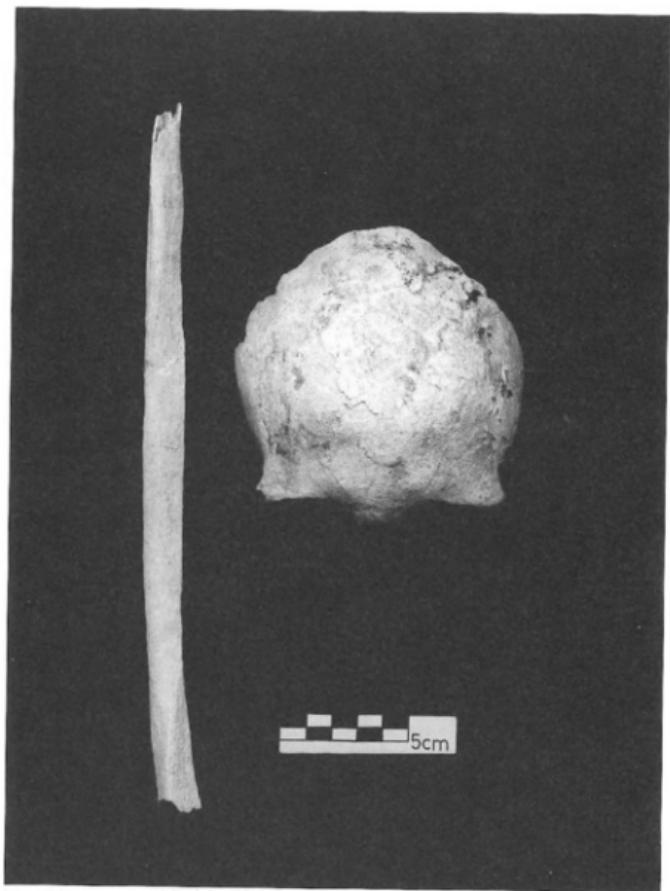
Two human skeletal remains were excavated from the Takashima undersea site, Kitamatsu ura gun, Takashima cho, Nagasaki Prefecture, in 1989.

An anthropological study of the human skeletal remains was conducted.

The period these skeletons are dated from can not be determined.

The frontal bone with the cribra orbitalia is presumed to be of a young adult female.

The right fibula is presumed to be of a male. The shaft is flat. The age is unknown.



PL. 53 滕島海底遺跡出土人骨，女性前額骨，男性腓骨  
(Takashima, female frontal bone, male fibula)

# 長崎県鷹島(海底)遺跡の貝類から見た考察

山 本 愛 三

## 1. 序

1989年6月8日から本遺跡の調査は行なわれて來たが、今回その一部資料の分析の依頼を受けた。この機会を与えて下さった、長崎県教育文化財保護主事高野晋司氏を始め長崎県北松浦郡鷹島町教育委員会等関係諸氏に深甚の謝意を表すものである。

## 2. 本遺跡の概況

本遺跡は Fig. 50, Fig. 51 に示すように、長崎県北松浦郡鷹島町床浪港にある。本地点が設定されるまでに、本島周辺海域でのサイドスキャナーやサブポトムプロファイラやボーリング等がくりかえされている。Fig. 52 で示すように、泥質堆積層がかなりの厚さで堆積している。本地区では Fig. 53 のように  $20m \times 70m$  のトレーナーを設定し、先ず堆積シルト層を大型サンドポンプで除去し遺物包含層である砂礫層を露出する方法がとられた。サンドポンプにより除去された泥土は沿岸に山積された。今回の資料は床浪海底西トレ内 5 m 第 3 層 8 8 0 9 1 4 にあたる。



Fig. 50 鷹島位置図



Fig. 51 鷹島における調査地位図

### 3. 本資料の年代

本遺跡の遺物包含層の年代測定のため包含層より抽出したイタヤガイ 5 個によるカーボン測定を日本アイソトープ協会に依頼し以下の結果を得た。

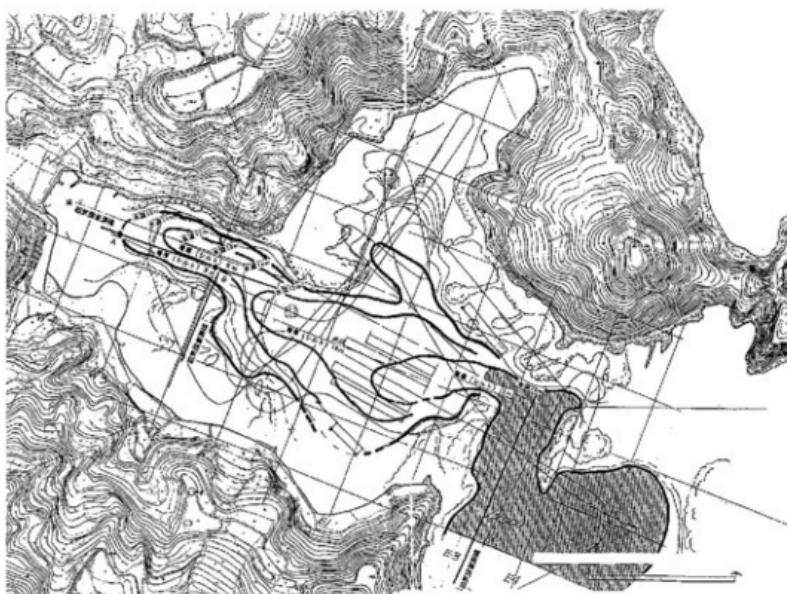


Fig. 52 泥質堆積層分布状況図

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-6255	床西 T-III 1	2330± 75yB.P. (2260± 75yB.P.)
N-6256	床西 T-III 2	5320±110yB.P. (5170±105yB.P.)
N-6257	床西 T III 3	4070± 85yB.P. (3950± 80yB.P.)
N-6258	床西 T-III 4	4700±105yB.P. (4560±100yB.P.)
N-6259	床西 T-III 5	1480± 90yB.P. (1430± 85yB.P.)

## 4. 貝類資料の種分析

Tab. 5 長崎県・鷹島海底遭跡貝類組成表

種	類	生息型
1. <i>Nordotis discus</i> (Reeve)	クロアワビガイ	II
2. <i>Monodonta labio</i> (Linné)	イシダタミガイ	II
3. <i>Tegula (Omohalius) rustica</i> (Gmelin)	コシダカガンガラガイ	II
4. <i>Tectus (Tectus) puramis</i> (Born)	ギンタカハマガイ	II
5. <i>Procavia kochi</i> (Philippi)	カニモリガイ	I
6. <i>Nassarius (Zeuxis) caelatus</i> (A. Adams)	ハナムシロガイ	I
7. <i>Serpularbis imbricatus</i> (Dunker)	オオヘビガイ	II
8. <i>Neverita (Glassaulax) didyma</i> (Röding)	ツメタガイ	I
9. <i>N. (G.) hosoyai</i> Kuroda et Kira	ホソヤツメタガイ	I
10. <i>N. (G.) didyma vesicalis</i> (Philippi)	ヒメツメタガイ	I
11. <i>Polinices sagamiensis</i> Pilsbry	ウチャマタマツバキガイ	I
12. <i>Thais bronni</i> (Dunker)	レイシガイ	II
13. <i>Fusinus perplexus</i> (A. Adams)	ナガニシガイ	I
14. <i>Pinctada martensi</i> (Dunker)	アコヤガイ	II
15. <i>Pecten (Nolovola) puncticulatus</i> Dunker	ハナイタヤガイ	I
16. <i>P. (N.) albicans</i> (Schater)	イタヤガイ	I
17. <i>Chlamys (Mimachlamys) nobilis</i> (Reeve)	ヒオウギガイ	I
18. <i>C. irregularis</i> (Sowerby)	ナデシコガイ	I
19. <i>Spondylus barbatus</i> Reeve	ウミギクガイ	II
20. <i>Ostrea (Crassostrea) nipponica</i> Seki	イワガキガイ	II
21. <i>Cardita leana</i> Duker	トマヤガイ	II
22. <i>Chama reflexa</i> Reeve	キクザルガイ	II
23. <i>Callista chinensis</i> (Holten)	マツヤマワスレガイ	I
24. <i>Papuria euglypta</i> (Philippi)	スダレガイ	I
25. <i>Dosinia (Phacosoma) troscheli</i> Lischke	マルヒナガイ	I
26. <i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> Reeve	カガミガイ	I
27. <i>Circa intermedia</i> Reeve	アツシラオガイ	I
28. <i>Lutraria sieboldii</i> Reeve	ヒラカモジガイ	I
29. <i>Soletellina boeddinghausi</i> (Lischke)	フジナミガイ	I
30. <i>Peronella jaronica</i> Martensen	ヨシアナカシパン*	I
31. <i>Coptothyris gruyi</i> (Davidson)	タテジホウズキチョウテン**	I

I 砂底性, II 岩礁性, \* キョクヒ動物, \*\* 挑足類

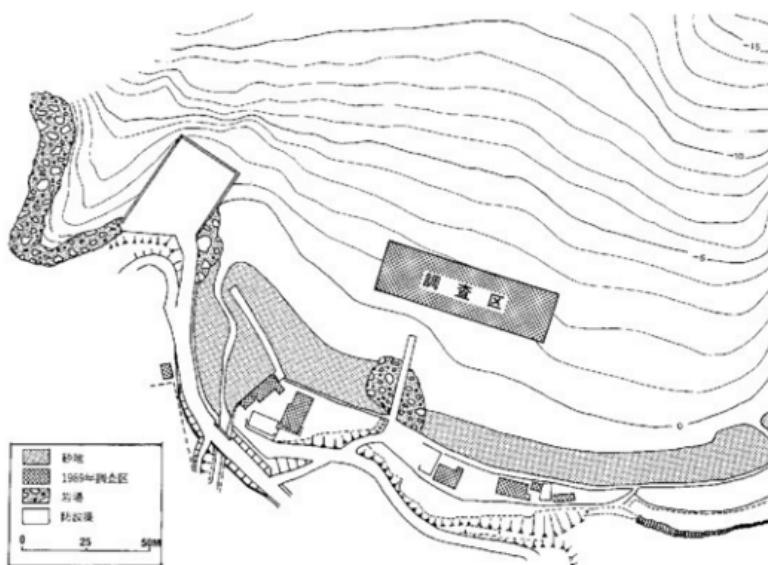


Fig. 53 資料抽出地見取図

### 5. 考 察

- (1) Tab. 5 で示す遺物包含層から抽出された貝類は干潮線～20fms に生息する砂底性及び岩礁性貝類で現水深よりシルト堆積層を除去した古海域の自然環境とよく一致し、シルト性貝類が発見されないところから、大きい擾乱はなかったと考えられる。なお、今後本海域におけるドレジによる現生貝類の調査との対比が望まれる。
- (2) 元軍来襲年代を約700年前とすると本資料によるカーボン測定 $5320+110\sim1480\pm90$ 年との間には相当のずれがある。

本資料による年代は遺物包含層の形成年代であり、遺物沈積年代ではない。両者の差を短縮には歴史学的事実による、より正確な日数計算と遺物に多数付着するフジツボ類によるカーボン測定との対比が必要と思われる。

## 長崎県鷹島海底遺跡出土動物遺存体

筆者の手元にもたらされた動物遺存骨で、種名の判明したものは以下の7種が確認された。骨の保存状態に2種あり、若干赤または茶がかっているが白色に近く表面の剥離がはげしいものと、灰色をなし、ややかたく剥離の少ないものがある。ウマ同一個体一体の遺存骨以外は後者の例になる。

### 種名

硬骨魚類 Osteichthyes

1 マグロ類 Thunnus S. P.

2 カマス類 Sphyraena gen. et sp. indet.

爬虫類 Reptilia

3 ウミガメの一一種 Chelonidae gen. et sp. indet

鳥類 Aves

4 ワシタカ科の一一種 Accipitridae gen. et sp. indet.

哺乳類 Mammalia

5 ウマ Equus caballus

6 イノシシ Sus scrofa

7 シカ Cervus

### 魚類

マグロ類 脊椎骨が2個検出されている。いずれも尾椎骨で、それぞれ、椎体高37.7, 46.7mm, 椎体長37.5mm, 57.9mmを測る。

カマス類 脊椎骨が3個検出されている。そのうち1個が光形に近く 椎体高24.0mm, 椎体長76.4mmを測る。

### 爬虫類

ウミガメの一一種 右側上腕骨が確認されている。全体に扁平氣味である。全長142mm。  
(89床浪A-7 I 下)

### 鳥類

鳥骨は、上腕骨(l)2点、尺骨(r)1点、が検出されているが、いずれも同一種のものと思われる。形態、大きさからするとワシタカ科のものと思われる。

いずれも左側であり、1点(88床浪B-6)は、大結節・橈骨との関節面を欠いている。全長

と上腕骨幅は、(148.2, 23.1mm) (147.0, 22.0 +  $\alpha$  mm) である。

尺骨 左側で、全長117.7mmを測る。

#### 哺乳類

##### ウマ

遺存骨は、下頸骨下頸枝 (r) 片、肩胛骨 (l) 片、寛骨 (r, l), (l), 大腿骨 (l), 胫骨 (l) が確認されているが、寛骨 (l) 1点を除き、残存状況からして同一個体のものと思われる。

下頸骨 右側の下頸枝部分の破片であり、筋突起は刃物で切断されており磨滅もみられる。関節突起内側部も切断された状況を示している。

肩甲骨 背縁部分は欠損し、肩甲骨も中位より遠位部分は欠損する。背縁を欠くが肩甲骨長は 26.85cm +  $\alpha$  を測り、それよりうる推定体高は 112.7cm +  $\alpha$  となる。

全長 26.85 +  $\alpha$  cm, 関節窓幅 5.24cm, 肩甲骨幅 6.1cm, 寛骨 他の遺存骨と同一個体となる一対の寛骨と、全く別の保存状態を示す別個体の左側寛骨がある。いずれも、腸骨稜から仙骨結節、恵骨結合、座骨結合にかけて欠損しており、寛骨最大長は不明であるが、一応の目安として最大長と推定体高を測定すると、左側 36.0 -  $\alpha$  cm, 推定体高 118.8cm, 左側 33.0 +  $\alpha$  cm, 推定体高 106.0 +  $\alpha$  cm となる。左右座骨結節は刃物で切断された痕跡を示している。

別個体の左側寛骨は、最大長 37.0 +  $\alpha$  cm, 推定体高 122.0 -  $\alpha$  cm を測る。

大腿骨、左側大腿骨、大転子、第三転子、外側頭を欠く。最大長は 33.9cm を測り、推定体高は 115.6cm となる。

胫骨 左側胫骨で、近位関節部を欠き、最大長は不明である。残存長は 22.8cm となり、推定体高は 105.8cm 以上となる。

以上、ウマの各遺存骨は、いずれも一部を欠くものであった。欠損部のなかには下頸骨筋突起や、寛骨座骨結節のように明らかに刃物によって切断された痕跡を示すものがある。おそらく付着する筋肉を取りはずす際につけられたものと思われ、食用として解体された部分骨が廃棄されたものとすることができます。

林田・山内 1957 よりする推定体高は、ほぼ完形に近い大腿骨より得られた計測値からすれば、115.6cm となる。また参考値にしかならないが、左側寛骨より得られた数値が 118.8cm 以上で遺存骨のなかで最大値を示している。いずれにしても、在来馬との比較からすれば、トカラ馬に類似した小形馬と推定される。各遺存骨の計測値も、蒙古馬などの中型馬よりも小さい値を示している。

また、遺存骨の保存状況や、廃棄されていることなどから、かなり新しい時代に農耕馬などに使役され馬の死後解体廃棄したと考えるのが妥当であると思われる。したがってモンゴル軍

の軍馬としての可能性は低いといえる。

同一個体とされた遺存骨以外に、寛骨(r)1点が確認されているが、遺存状態は他のイノシシ、シカ遺存骨などと類似しており、一休分の遺存骨と年代的に差がある可能性がある。寛骨最大長よりする推定体高は122.7cm以上を示しており、小型馬でも中型馬に近い数値である。蒙古馬の下限に近く、残存部分に解体痕も認められることや、他の馬骨より年代的にさかのぼれる可能性もあることからすれば、中世馬と考えられる余地も残っているが、年代決定については、他の分析法を待つ以外にない。

林田重幸・山内忠平、1957、馬における骨長より体高の推定法、鹿児島大学農学部学術報告6

Tab. 6 ウマ計測表

(単位:cm)

計測部位 部位	最大長	推定体高 (cm)	近位部		中央部		遠位部		備考
			幅	前後径	幅	前後径	幅	前後径	
大腿骨(ε)	339.0	115.6			39.6	42.8		109.0	同一個体
脛骨(ε)	288.0 +α	105.8 +α			34.65	27.7	67.0	39.0	"
肩甲骨(ε)	268.5 +α	112.7 +α	88.5		22.55				"
寛骨(r)	330.0 +α	106.0 -α							"
"(ε)	360.0 +α	118.8 +α							"
寛骨(ε)	370.0 +α	122.7 +α							別個体

### イノシシ

イノシシの遺存者として、肩甲骨(ε)、上腕骨(ε)、胫骨(ε)と、腰椎、肋骨、が確認されている。いずれも風化状態は類似している。

肩甲骨 成獣の左側肩甲骨で、前縁と肩甲棘の一部を欠く。肩甲骨最大長は、23.5cmを測り、現在の通常の成獣より大型である。

上腕骨 成獣の左側上腕骨の中位から遠位部にかけての破片で、骨体前面と外側頭を欠いている。

胫骨 成獣の左側胫骨で、近位関節部を欠いている。

### シカ

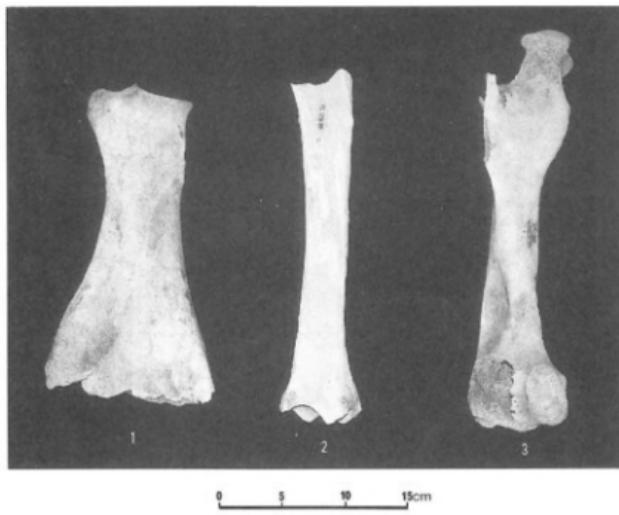
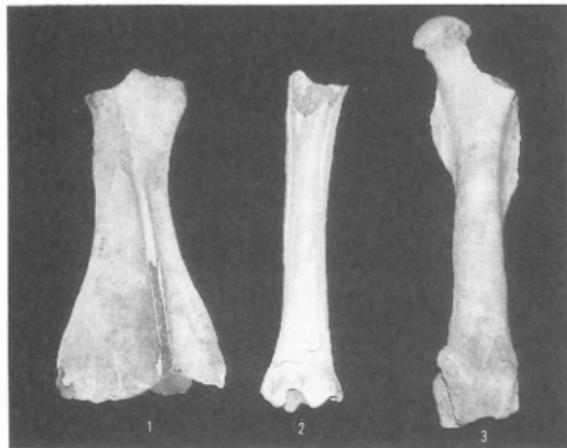
シカ遺存骨は、肩甲骨(ε)、大腿骨(ε)3、頭蓋骨片1が確認されている。

頭蓋骨 頭蓋骨は、左側鹿角座部分の破片で、角座骨部分で鹿角は切断されている。

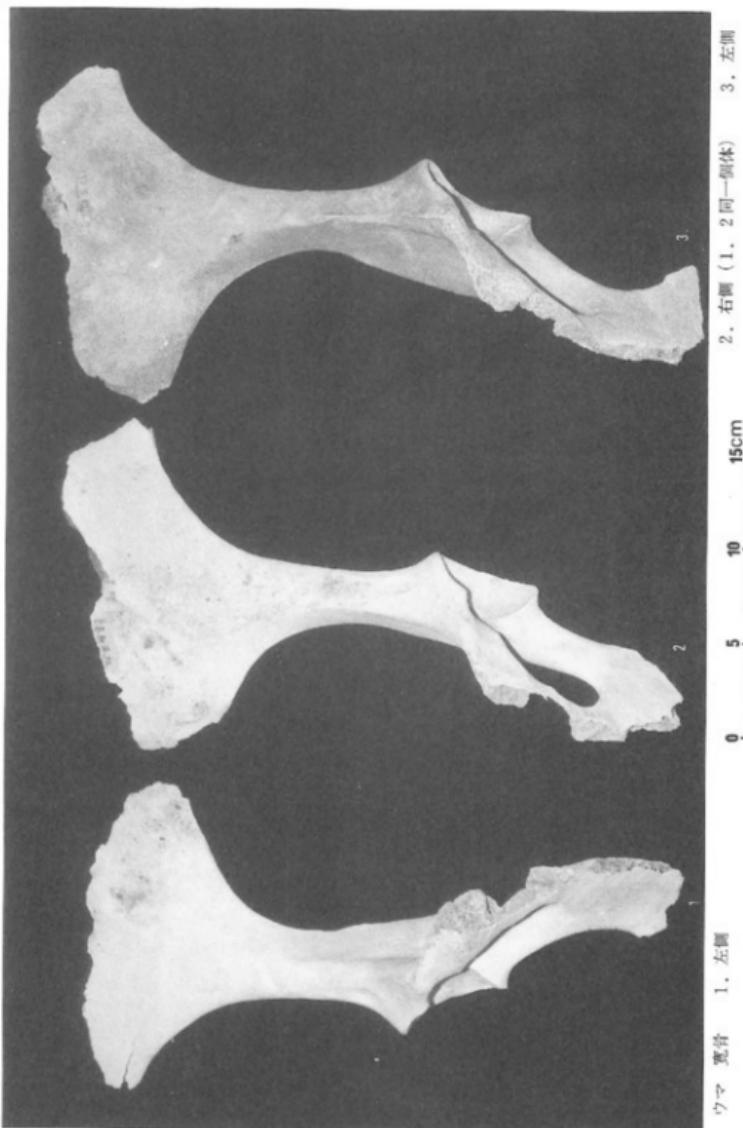
肩甲骨 肩甲窓遠位半分と、肩甲棘を欠く。肩甲窓幅22.55mm、関節窓幅42.35mm。

大腿骨 大腿骨は3個体確認されているが、いずれも左側遠位部片である。1点は、関節部が骨端分離して欠失している。上髄幅51.5、48.6mmを測る。

PL. 54 ウマ肩甲骨、脛骨、大腿骨



E ウマ 1. 肩甲骨(左侧) 2. 脛骨(左侧) 3. 大腿骨(左侧)

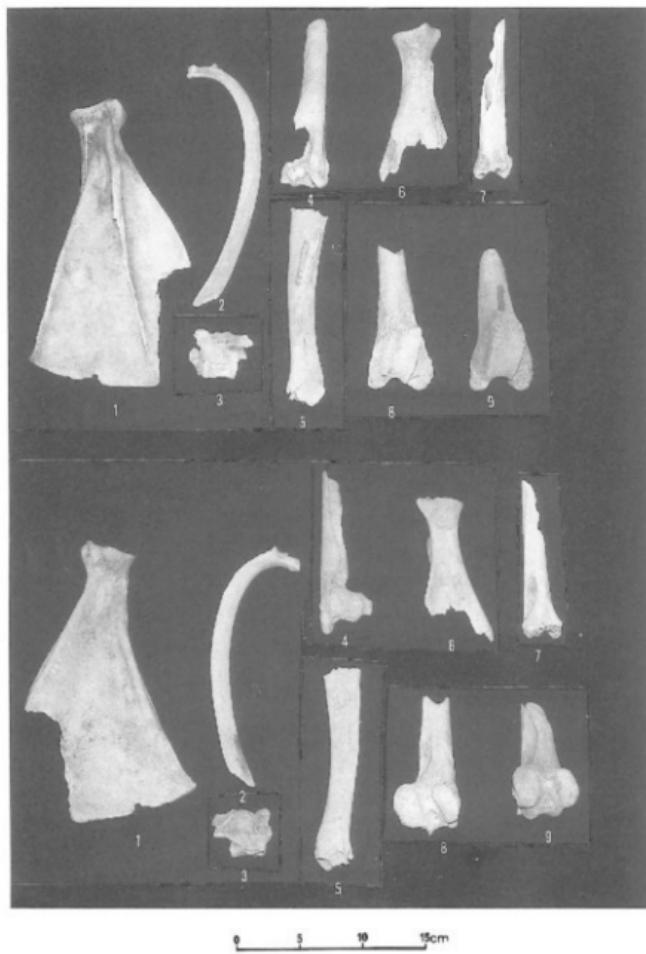


ウマ 寛骨 1. 左側

2. 右側 (1, 2 同一側体)

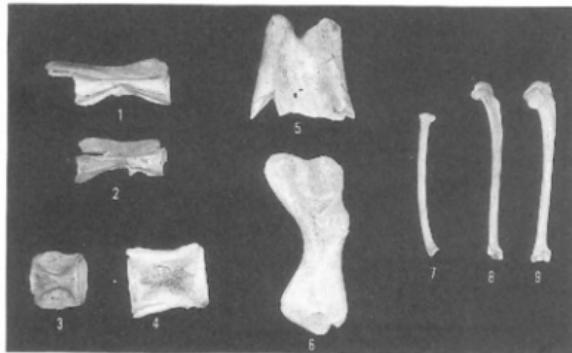
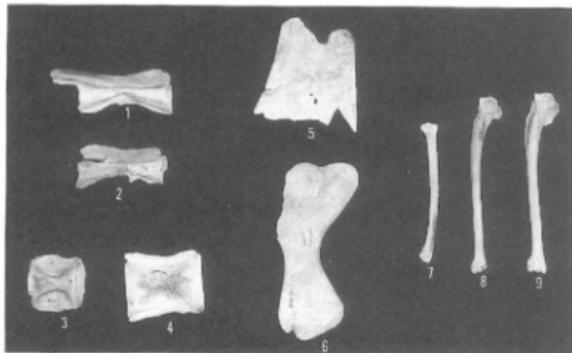
3. 左側

PL. 56 イノシシ、シカ遺存骨



遺存骨 1～5 イノシシ 1. 左側肩甲骨 2. 助骨 3. 脊椎骨 4. 左側上腕骨  
5. 左側胫骨 6～9 シカ 6. 左側肩甲骨 7. 左側大腿骨 8. 左側胫骨 9. 左側大腿骨

PL. 57 各種動物遺存体



遺存骨 1, 2 カマス 3, 4 マグロ 5 ウマ下顎骨(右側)  
6. ウミガメの一種 上腕骨(右側) 7 ~ 9 ワシタカ科の一種  
7 尺骨(左側) 8, 9 上腕骨(左側)

## V章 まとめ

1988年と1989年に実施した鷹島海底遺跡（床浪港）の発掘調査の結果について、反省と若干の問題点をふまえて簡単なまとめをしておきたい。

### 調査方法

海底（水中）の調査について問題になるのは、まずその方法であろう。一口に海底（水中）と言っても調査をする遺跡によって条件が全く異なる場合が多い。水深の問題、水の透明度の問題、堆積したシルトの厚さの問題等々である。琵琶湖で行なわれた粟津貝塚湖底遺跡の調査<sup>#1</sup>は調査区を厚い矢板で仕切って遺跡をドライな状態にし、陸上と同じ条件にした上で調査を実施している。床浪港の調査にあたっては、我々も当初調査区をドライにする方法を考えたが、費用の面で断念せざるを得なかった。水深が浅く、矢板を打ちこめる土層の場合は考慮の余地があろう。水深の問題については、特に10mを越す場合は潜水病の恐れが出てくる。水深に応じてその恐れは強くなるため、万一に備えての再圧室の完備等調査員の健康管理が最も重要な要素となる。また水深が増すにつれ労働時間が制限され、作業効率が極端に落ちることになり、ひいては調査経費増につながることになる。今回の床浪港の調査では、調査区の水深が最大満潮時でも-8m程度であったため、事故も無く当初の予定に近い作業効率をあげる事が出来たのは幸いであった。

また、調査にあたっては出来るだけ陸上の調査に近い方法をとることを念頭に置き、遺物の取り上げに際しても一々位置の測定を行うこととし、相当数の遺物をドットマップで示すことが出来た。その結果、シルトの中にあっても10m以上の距離をおいて接合する資料があったり、同一層からの出土遺物が元冠關係遺物に限らず縄文時代から江戸時代まで含まれるなど、思っていた以上に時間的に多岐にわたったことで、海底下のシルトの中でも想像以上に動いている事が確認出来た。学問的には不本意な状況ではあったが、技術的には水中でも基本的に陸上と同じ作業が出来ることが分かったこと合わせて一つの成果であろう。

床浪港での調査作業は、まず海底においては①調査区の設定②エアーリフトの操作③出土遺物の位置測定や遺構の実測④水中カメラやビデオ撮影などの記録などであり、これに以下のようないくつかの陸上での作業が伴う。⑤潜水に必要な器材の操作と点検・修理⑥筏の上に吸い上げられてくる散逸遺物の確保⑦遺物の収納と注記⑧台船上での各器材の操作・点検⑨健康管理のための潜水作業時間割の作成⑩水中通話を通じての作業の指示等である。今回の調査は、考古知識を持つ調査員が常時1～2名とプロの潜水士7名で実施した。遺構の実測や写真撮影を除く作業の大半は水中での作業と各種器材の操作・点検・修理に熟練したプロの潜水士が行なったが、調査責任者が海中において常時調査を観察することが出来ない環境下であること、海中であるための十分な意志の伝達が困難なための弊害も多い。潜水技術の習得は勿論のこと簡単な器材の操作や点検方法等は調査員も知識として持っておく必要があろう。

調査器材の改良と開発も重要な課題である。一般的には砂やシルトが沈殿堆積しているものと思わねばならない。床浪港の場合陸上に近い地区でも最底3m程の砂とシルトが堆積していたし、沖では10m単位のシルトの堆積がボーリングによって確認されている。そのシルト中に遺物が埋没している場合は、シルトの除去が最大の課題になる。シルトは軟質であり、絶えず崩落するため、壁面にかなりの勾配を持たせないと調査は危険である。水深が増す程危険性も増すのであるから、崩落を防ぐ欠板に代わる器材の開発が必要となる。

陸上でよく行う試掘程度の小面積の調査でも、水中においては規模の違いこそあれ渡深船が必要な時がある。1988年の床浪港の調査がそれであり、大型の渡深船と渡深したシルトを運ぶ土運船、そして渡深した後を精査するためのエアーリフトを使用した。もし必要部分のみ調査出来る設備でもあればとの要望から、直径3m、長さ5mで中空の試掘用鉄製円筒を三菱重工業長崎造船所に御好意で設計していただいた。その使用方法は、まず円筒を目的の場所に設置し、中のシルトをエアーリフトによって排除しながら掘り進める。円筒は自重によって沈み、調査深度が5mを越えれば新しい円筒を継ぎ足してまた掘り進める。円筒の中にはシルトが流入することはないから無駄な排水をする必要は無いことになる。水圧などの危険性も十分に考慮した上で設計趣旨であったが、ただ現実に使用するにはいくつかの問題点があった。

まず①円筒自体かなりの重量になると、目的の区域に同筒を設置するためには、その移動にクレーンを備えた大型の台船が必要なこと。②調査時、円筒自体は自重によって沈むであろうが、調査終了時点でのその回収は極めて困難であること③従って円筒は消耗品的な扱いになり、円筒の作成費用1基当たり数百万の単位では大変な無駄が生じること等である。

1989年の調査では一辺3.6m平方の木製の隔壁を実験的に作成し使用したことは前述したが、思うような成果は得られなかった。しかし、絶えず流れ込むシルトを防ぐ手立てがないと時間的にも費用的にも効率が悪いのは自明である。簡単に試掘ができるような設備の開発は是非必要である。

調査以前に何らかの異物を探知出来れば随分無駄が省けるのは陸上ばかりではない。特に海の調査はその広さに比して針の穴ほどの面積に過ぎない。このため1989年の本調査に先立ち調査区内に音波探査機による探査を行った。その時点では30カ所に及ぶ何らかの異物に対する反応があり、潜水調査にあたっては特にその地点に注意した。しかし、反応地点に遺物は発見されず、結果的にソナーが何に対して反応したのかの断定は出来なかった。こうした新しい機器や道具の使用についてまだ満足すべき結果は得られていないが、今後と効率的と考えられる調査方法の実験とその結果に対する検証を重ねる必要があろう。

長崎県は平成元年度から3カ年計画により文化庁からの委嘱事業「水中遺跡の保存方法の検討」を依頼され、さらに新しいソナー探査機や磁気探査機を使って海底下に埋没している異物の発見について実験を繰り返してきた。その成果については現在報告書を作成中であり、近く文化庁から刊行される予定である。

## 調査の成果

床浪港から出土した各種遺物については既に詳述したが、今後注意すべき問題点もある。

まず、石材の点から見ると、本書で石弾として掲載した資料の石材は玄武岩の可能性が高いといわれる。<sup>註1</sup> 玄武岩は中國江南地方や朝鮮半島南岸に於いては稀な石材であり、朝鮮半島では濟州島と鬱陵島を除くと北朝鮮と中國が接する大白山周辺に産するのみであるという。

石弾という極めて消耗度の高い材料を遠方まで求めることも不自然であり、本書で図示した資料が蒙古軍が実際に使用した石弾であれば、その材に関しては玄武岩の入手が簡単な鷹島を含む松浦一帯からの現地調達の可能性を考えておく必要もある。また、玄武岩が風化した玉葱状剥離の芯には丸玉状の塊がよく見られるということであり、そのような状態の石塊を入手すれば加工の必要も無くなることになる。元軍は1281年の旧暦7月上旬には平戸沖に集結し、以後博多絶攻撃に備え約1カ月程、この周辺を遊弋している。この間、食料や水等の調達に加え、消耗度の高い弾材まで補給調達した可能性があることになる。

鷹島南岸からは、これまで相当数の遺物が発見されている。ただ、遺物の内元寇関係資料に限定してみると、中國製品に対して高麗製品の占める割合が極めて少ない。本書で掲載した資料でもほぼ完形品の高麗青磁を除くと皆無に等しく、その傾向はほぼ全島的なものであろう。

『東国通鑑』忠烈王7年(1281年の)条には「元軍不還者無慮十万有機、我軍不還者亦七千余人」とある。元軍将兵は未帰還者「十万人もあり、遭難比率は出兵者の八、九割に相当するに比べ、東征軍は九千四百六十名、精工水手一万七千二十九中、帰還者は一万九千三百九十七名と逆に七割の將兵が帰還している。この間の差については古賀稔康氏によって、台風接近を察知した東征軍がいち早く平戸島の安全な港に緊急避難出来たためであるとの考証がある。

避難港の事実関係はまた考証の余地があるものとしても、ほぼ全滅に近い江南軍の遺物が濃密で東征軍の遺物が少ないという事実は、その帰還者と未帰還者との比率を出土遺物の量が示しているものとも思われる。記録に多少の誇張はあっても基本的には事実を述べているものと考えられる。

鷹島海底から出土する中世の輸入陶磁器類は圧倒的に荷物系陶器が多く、通常の消費遺跡から出土する遺物の種類とは明らかに傾向を異にしている。しかも製品に優品がなく、いかにも急造したとしか思えない資料も多い。戦争という異常事態を示す間接的証拠であると言える。

註1 滋賀県埋蔵文化財センター「滋賀埋蔵ニュース 129号」1990他

2 鎌田泰彦氏教示

3 清野精一郎「第二章モンゴル襲来」「長崎県史 古代・中世編」所収 1980

4 古賀稔康「海から見る元寇・弘安伊万里湾役について」1981

5 大橋康二氏教示

## Summary

This report deals with the underwater excavation researches carried out at the Tokonami harbor of Takashima Island during 1988 and 1989. The Tokonami site is a depth of 8m at the high tide level. We had to concern that the underwater survey method should be similar to that applied on the land survey; therefore, uncovered artifacts were recorded as precisely as possible at the sea bottom so that we could show the location of every artifact in situ on the map. As a result, some of the artifacts lying in the silt were found in piece separately more than 10m. Not only artifacts belonging to war fleet of the great Mongol emperor Kublai Khan, but also those belonging to the Jomon through Edo period were found in the same stratum. Artifacts of various periods lying in the same context (silt) can prove that stratigraphy were disturbed.

It is 3m thick of the sediment of sand and silt at the excavation area. In 1989, a 3.6x3.6m wooden caisson was experimentaly used for excavating the sediment, but this experiment did not get any satisfied result.

The underwater research at the Tokonami harbor was carried out by as follow: ① establishing the survey area, ② using air-lifts, ③ recording and measuring uncovered artifacts and remains, and ④ recording with cameras and a video camera. Simultaneously, land works were done by such as ⑤ maintenance and repair of tools for diving, ⑥ recovering artifacts which were accidentally sucked up to rafts, ⑦ filing and numbering artifacts, ⑧ maintenance and repair of instruments on a pontoon, ⑨ scheduling working hours at the sea bottom for safety diving, and ⑩ communicating with a diverphone system between sea bottom and the surface.

There has been so far a large amount of artifacts found at the southern coast of Takashima Island; however, these all artifacts do not belong to those of the remains of Mongol invasion. Looking into the artifacts relating to Mongol invasion, the number of unearthened Korean artifacts is quite little as comparing with Chinese artifacts. Most of Chinese ceramics of Middle Age unearthed at the Takashima site mainly belong to several types of brown glazed vases, and this tendency is quite different from the diversity of Chinese ceramics as consumer goods unearthed at the other sites of Middle Age. The quality of Chinese ceramics unearthed at the site are not good enough; this implies that those vases were produced in a hurry. It must be an indirect evidence to show an unusual situation of war.

鷹島海底遺跡

1992

発行 鷹島町教育委員会  
長崎県北松浦郡鷹島町神崎免

印刷 昭和堂印刷  
長崎県諫早市長野町1007-2